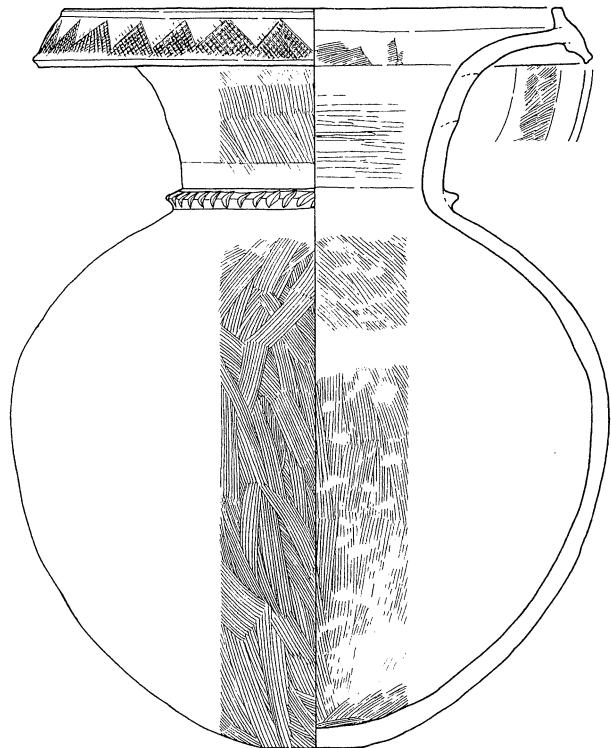


旧練兵場遺跡

特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



平成14年

善通寺市
(財)元興寺文化財研究所

旧練兵場遺跡

特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年

善通寺市
(財) 元興寺文化財研究所

例　言

- 1) 本書は香川県善通寺市仙遊町二丁目に所在する旧練兵場遺跡の平成13年度における発掘調査報告書である。
- 2) 本書に使用した方位は、特に指定しない限り座標北を指し、遺跡の測量は国土調査法第VI座標系による。
- 3) 遺構の実測及び撮影は、片桐節子、角南聰一郎、宇田員将が行い、遺物の実測は角南、仲井光代、庄司雅子を中心に行い、遺物の写真撮影は狭川真一、角南が担当した。
- 4) 出土資料の自然科学分析は（財）元興寺文化財研究所保存科学センター植田直見・菅井裕子が行った。
- 5) 本書の執筆は、 笹川龍一、角南、植田、菅井が行い、分担を目次に記した。
- 6) 本書の編集は 笹川の指導のもと、狭川、角南が担当した。

目　次

第1章　調査経過と体制	（ 笹川）	1
第2章　旧練兵場研究のあゆみ	（ 笹川・角南）	3
第3章　調査の概要		
(1) 調査区の位置と基本層序	（ 角南）	7
(2) 検出遺構	（ 角南）	10
(3) 出土遺物	（ 角南）	30
第4章　旧練兵場遺跡出土土管・煉瓦の蛍光X線分析	（ 植田・菅井）	55
第5章　小結	（ 角南）	56
付論		
1 中・四国地方出土の軽石	（ 角南）	60
2 近現代の景観復元と練習用塹壕	（ 角南）	65
3 旧練兵場遺跡出土の蹄鉄	（ 角南）	70

第1章 調査経過と体制

(調査に至る経過)

昭和28（1953）年に竣工された仲多度伝染病院は平成11（1998）年12月に廃止となり取り壊され、跡地は駐車場として利用されていた。善通寺市では特別養護老人ホーム仙遊荘の老朽化の対策と施設の整備に伴い、現在より南に建て替え事業を旧仲多度伝染病院跡地に予定した。しかし、仙遊町全域には旧練兵場遺跡と呼ばれる古代の拠点的集落が広がっているため、これまで各地点で発掘調査が実施され重要な埋蔵文化財が多数確認されていることはよく知られていた。しかも近年当該地の東に隣接する国立善通寺病院内や、当核地の北側で実施された善通寺市老人ホーム増設に伴う発掘調査でも住居群や土器が多く堆積した水路跡が確認されていたことから、老人ホーム新設予定地にも同様の遺構が存在する可能性が極めて高いと考えられた。しかも、老人ホーム新設予定地内の地質調査ではボーリング調査で得られたコアの中に弥生土器片が含まれていた。

そこで試掘調査は行わず、平成13（2000）年4月に埋蔵文化財発掘調査を実施することを決定し、実施設計書が完成した段階で教育委員会と具体的な調整作業を行い、駐車場用地等は調査範囲から除外し、工事掘削により地中の遺構に影響が生じる範囲のみを調査対象範囲とした。新たに建設される建物は鉄筋コンクリート造3階建である。

発掘調査の実施に際しては、善通寺市教育委員会が事業主体である埋蔵文化財調査事業や史跡有岡古墳群保存整備事業と重なったため、外部への委託を検討した。そして、平成12年度市営西仙遊町住宅建設に伴って旧練兵場遺跡を調査した実績があり、文化財の調査・研究および出土遺物の保存処理業務・研究等を目的として設立された利益追及を目的としない公益法人である財団法人元興寺文化財研究所に業務を委託した。

(調査体制)

調査主体 善通寺市

調査指導 善通寺市教育委員会

文化振興室 課長補佐 笹川龍一

主 事 海邊博史

調査担当 (財)元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善

所 長 坪井清足

事務局長 奥洞次郎

考古学研究室 室長 狹川真一

研究員 岡本広義 佐藤亜聖 角南聰一郎

嘱託研究員 庄司雅子

調査員 宇田員将

調査及び整理参加者

【現場作業】

安藤純二 荒木 博 石谷文子 太田俊男 大前義和 柿平コト 加治正信 川辺キクミ 木村 貢

小森重博 嶋田 勝 杉峰ヨシ子 高木一江 高島義勝 谷本正一 西宇祥太郎 松下 薫 森岡富明

森岡ミチ子 山田敏照 横田一徳 山口真一郎 片桐節子

社団法人仲善広域シルバー人材センター 藤井組 丸亀司レッカー

【整理作業】

武田浩子 仲井光代 三谷幸恵 大西美奈 小田真由美 昼田恵理 新谷桃子 長谷川義明

調査及び報告書作成にあたって、次の方々から御教示・御指導を受けた。記して感謝の意を表したい。

(順不同・敬称略)

森 格也（香川県教育委員会）、片桐孝浩・藏本晋司・佐藤竜馬・陶山仁美・中山尚子・西村尋文・乘松真也・信里芳紀・松本和彦・真鍋昌宏・森下英治（(財)香川県埋蔵文化財調査センター）、渡辺淳子（善通寺市役所）、森 裕行・森 治（豊中町教育委員会）、荒木計雄（讃岐習俗参考館）、詫間貞利（詫間土管製造所）、吉久由紀子（丸亀市立資料館）、東 憲男（丸亀市教育委員会）、白川雄一（三野町教育委員会）、角田一巳、六車恵一、柴田昌児・真鍋昭文（愛媛県立埋蔵文化財調査センター）、富田尚夫（愛媛県歴史文化博物館）、田崎博之・吉田 広（愛媛大学）、梅木謙一（(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）、作田一耕（テクノリサーチ）、日下正剛（徳島県埋蔵文化財センター）、武知邦博（日本はきもの博物館）、藤沢典彦（大谷女子大学）、江浦 洋（(財)大阪府文化財調査研究センター）、永見秀徳（筑後市教育委員会）、山本嘉一・山本恵一（(株)磯じまん）、長友恒人（奈良教育大学）、伊藤厚史（名古屋市立見晴台資料館）、末崎真澄（馬の博物館）、関口 隆（JRA馬事公苑）、追川吉生（東京大学埋蔵文化財調査室）、小川望（小平市教育委員会）、小林謙一（江戸在地系土器研究会）、両角まり（江戸東京博物館）、渡辺貴子（近現代考古学研究会）、徳澤啓一・後藤理加・水本 和美（新宿区立新宿歴史博物館）、秋岡礼子（新宿区遺跡調査会）、崎野千代美（台東区文化財調査会）、横山昭一・武田浩司（目黒区教育委員会）、朽木量（日本学術振興会特別研究員）

第2章 旧練兵場遺跡研究のあゆみ

ここでは、旧練兵場遺跡のあゆみを最新調査成果まで踏まえて整理することで、位置と環境に代えたい。

旧陸軍第11師団は明治29（1896）年に開設された。翌明治30（1897）年には陸軍演習のため、市街地の北側一帯の土地約14万坪が買い上げられ練兵場が開設された。練兵場は西を弘田川、東と南を中谷川で限られた東西に長い広大な橢円形の土地である。軍用地であることもあり自然の河川で囲まれたこの土地が条件に適していたのであろう。また、この橢円形地形の北東部には瓢箪池の他、多数の湧水地（香野辺湧・花香井湧など）が残されており、現在も農業用水等に利用されているが、これらは旧河道の名残りである。

この河川に囲まれた橢円形の自然地形内には、弥生時代以降繁栄を続けた拠点集落の遺跡や遺物が高い密度で包蔵されていた。古代の人々は自然の河川に囲まれた地形を利用して生活したようである。戦後の開発に伴い研究者がこれを確認し、旧練兵場遺跡の名が付けられた。遺跡が広がる自然地形と練兵場の関係は航空写真を見れば一目瞭然である。

旧練兵場遺跡が考古学の世界で認知されたのは、六車惠一による香川県下の弥生土器の集成・編年作業の際に良好な資料として図化されたことにはじまる（六車 1956）。これ以前から練兵場付近で弥生土器が多く出土することは、地元住民にとっては周知の事実であったらしい。地元讃岐宮の宮司であった矢原高幸は、戦前より善通寺市周辺の遺跡を踏査し多くの遺跡を発見した。矢原は練兵場付近の考古資料も収集をおこない保管をしていた。この資料を六車が図化し編年資料内で紹介したようだ。つまり、旧練兵場遺跡の発見者は矢原として差し支えなかろう。

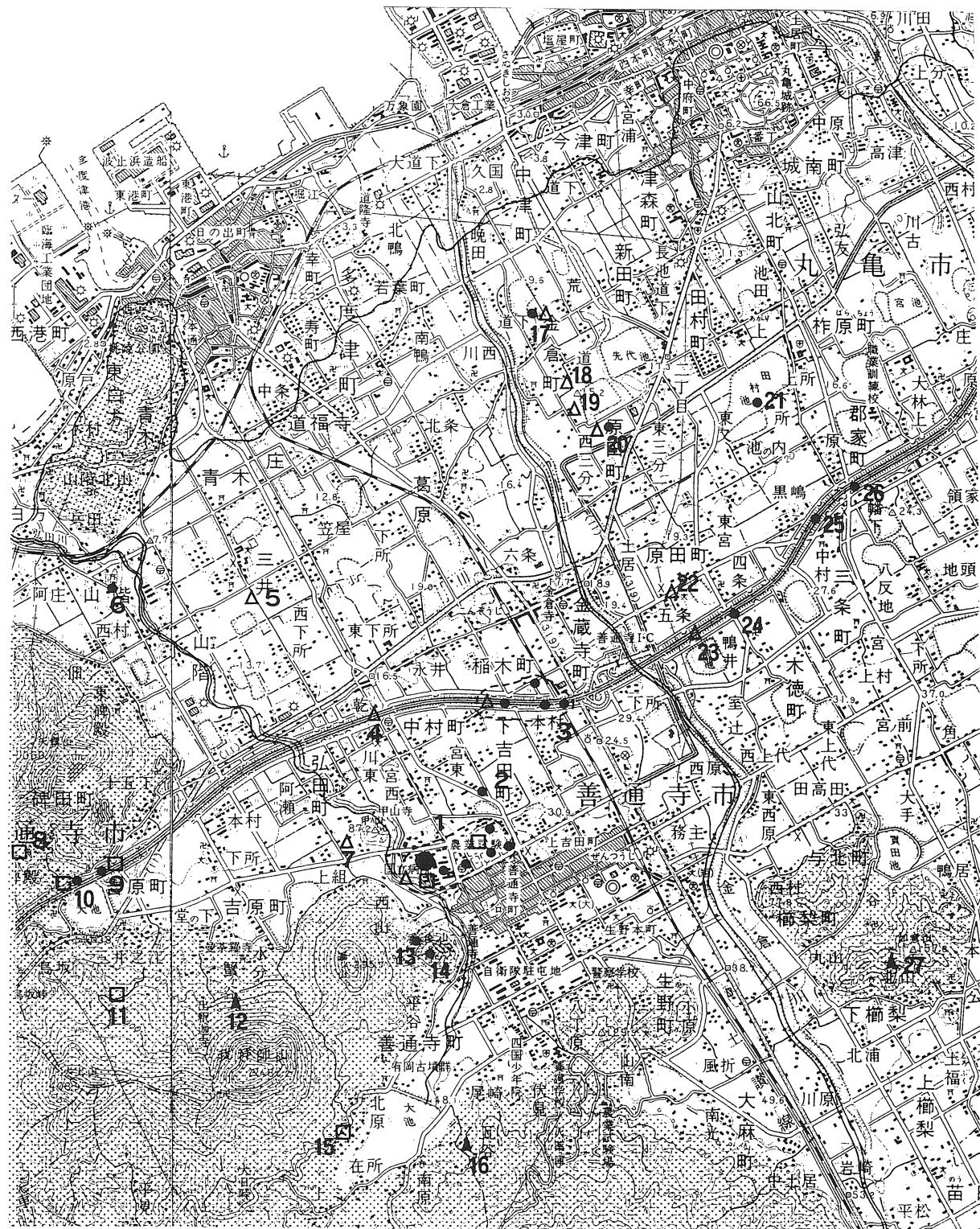
しかし、一方で本格的な実測技術を導入し図化作業に努めた六車の研究業績は高く評価できよう。この時点で六車は旧練兵場付近の集落よりやや高い位置に「壺棺」が群集して無秩序に埋設されている事実を確認している。六車は大川町大井遺跡の事例で壺内より硬玉製勾玉が出土した点、壺口縁部を打ち欠いて胴部・底部近くに穿孔があり、合口とし斜位に埋設されている点からこれを土器を転用した棺であると認識した。この卓見によって、以来旧練兵場遺跡から出土する大型壺は埋葬施設であると躊躇なく考えられるようになったと考えられる。その後、香川県下でも土器棺の出土が最も多い地域であるのが善通寺市であることを考慮すれば、六車の影響は絶大であり評価も妥当であったといえる。

また、六車は香川県出土の石庖丁を検討した際、旧練兵場遺跡出土の磨製及び打製の石庖丁を提示している（六車 1958）。

昭和33（1958）年10月12日、矢原高幸、尽誠学園教諭・大久保義朗によって国立病院前庭地点で発掘調査がおこなわれた（尽誠学園史学会1959）。この調査が旧練兵場遺跡内でははじめての発掘調査である。報告によると遺物包含層は2層に区分され、上層からは古墳時代中期の須恵器・土師器が、下層からは弥生時代後期の土器が出土したとされる。

続いて香川県立善通寺第一高等学校歴史同好会によって、善通寺市域出土の弥生土器が調査された際に「旧練兵場遺跡」の名称が正式に採用された（香川県立善通寺第一高等学校歴史同好会 1965）。さらに四国農業試験場前庭付近で弥生時代前期の「甕棺」が発見されたことを伝えている。

1970年代は矢原高幸によって善通寺市域の弥生文化に関する資料がまとめられ、練兵場遺跡についても詳しく解説がなされている（矢原 1973、1977）。これによると国立善通寺病院前庭の弥生時代後期庖含層中から、ガラス玉・小玉が出土したとある。



遺跡一覧表（第3図凡例 △前期～中期前葉 □中期中葉～後期後半 ●後期後半～終末期）

- | | | |
|-------------------|------------------------|----------------------|
| 1：旧練兵場遺跡（前期～終末期） | 10：西碑殿遺跡（中期） | 19：平池西遺跡（前期） |
| 2：九頭神遺跡（後期～終末期） | 11：吉原火上山遺跡（中期） | 20：平池南遺跡（前期・後期） |
| 3：稻木遺跡（前期・後期～終末期） | 12：我拝師山遺跡（中期・後期：青銅器埋納） | 21：田村池遺跡（終末期） |
| 4：永井遺跡（前期） | 13：香色山山麓遺跡（後期） | 22：五条遺跡（前期） |
| 5：三井遺跡（前期・後期） | 14：香色山山頂遺跡（後期） | 23：龍川五条遺跡（前期・後期～終末期） |

Fig.1 旧練兵場遺跡の位置と主要遺跡分布図（1/25000、森下 1994 より）

1983年と1989年に善通寺市教育委員会が調査主体となり、旧練兵場遺跡の西端に相当する仲村廃寺の調査をおこなった（笠川 1984、1989a）。白鳳～奈良時代の遺構・遺物を検出するが、弥生時代後期と古墳時代後期の遺構・遺物も発見された。続いて市教委は遺跡東端に相当する、彼ノ宗遺跡を調査した。3635m²にわたる調査面積は当遺跡において最大規模のものであり、弥生時代中期～後期の住居跡38棟ほか多数の遺構を検出した（笠川 1985）。更に市教委は仙遊遺跡で弥生時代終末期の箱式石棺墓を調査した。この石棺の蓋石には人面線刻絵画が描かれていた（笠川 1986a）。

1994年以降は香川県教育委員会が国立善通寺病院内、四国農業試験場内を調査し成果をあげている（森下 1994、1997、1998、西岡 1998、塩崎 1996）。

遺跡を題材とした研究は笠川龍一、森下英治によって試みられている。笠川龍一は彼ノ宗遺跡の調査成果から、善通寺市付近には弥生時代後期前後に住居跡廃絶時に銅鏡片、土玉、ガラス玉、管玉などを用いた祭祀が執りおこなわれた可能性を示唆した（笠川 1986b）。森下英治は香川県下の弥生時代中期集落を検討する中で、旧練兵場遺跡の広がりと地形環境の復原を試み、弥生時代中期～後期土器の編年もおこなっている（森下 1999、2001）。

今年度は本報告の地区以外でも、隣接する国立善通寺病院内で県埋蔵文化財調査センターによって大規模な調査がおこなわれており成果があがっている（（財）香川県埋蔵文化財調査センター 2001）。

このように旧練兵場遺跡は戦前からの長い調査・研究の歴史があり、本格的な調査がおこなわれるようになつた現在、資料の蓄積と更なる研究に期待が寄せられる。

【引用・参考文献】

- 香川県立善通寺第一高等学校歴史同好会 1965 「善通寺市及び近郊における弥生式文化の生成と展開」『文化財協会報』特別号7 香川県文化財保護協会
- 片桐孝浩 1996 『弘田川西岸遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- （財）香川県埋蔵文化財調査センター 2001 『仙遊ヶ原の地下を探る—旧練兵場遺跡発掘調査 現地説明会一』 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 笠川龍一 1984 『仲村廃寺発掘調査報告（旧練兵場遺跡内）』 善通寺市教育委員会
- 笠川龍一 1985 『彼ノ宗遺跡』 善通寺市教育委員会
- 笠川龍一 1986a 『仙遊遺跡発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会
- 笠川龍一 1986b 『彼ノ宗遺跡の発掘調査とその問題点』『香川史学』15 香川歴史学会
- 笠川龍一 1989a 『仲村廃寺』 善通寺市教育委員会
- 笠川龍一 1989b 「古墳時代の竪穴住居跡で確認された廃絶時の祭祀について」『香川史学』18 香川歴史学会
- 笠川龍一・角南聰一郎ほか 2001 『旧練兵場遺跡』 善通寺市・（財）元興寺文化財研究所
- 塩崎誠司 1996 『旧練兵場遺跡』 IV 四国農業試験場・香川県教育委員会
- 尽誠学園史学会 1959 「国立病院前庭遺跡発掘調査概報」『西讃史誌』1 尽誠学園史学会
- 中西昇 1988 「旧練兵場遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度～昭和62年度』 香川県教育委員会
- 西岡達哉 1998 『旧練兵場遺跡』 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

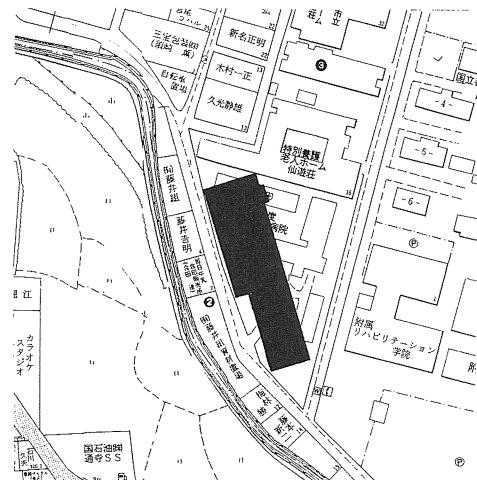


Fig.2 調査地点位置図（黒塗部分、1/3000）

- 六車恵一 1955 『讃岐石庵丁図録』
- 六車恵一 1956 『讃岐弥生式土器聚成図録』『文化財協会報』特別号1 香川県文化財保護協会
- 六車恵一 1958 『石庵丁と讃岐の初期農業』『文化財協会報』特別号3 香川県文化財保護協会
- 森下英治 1994 『旧練兵場遺跡』 香川県教育委員会
- 森下英治 1997 『旧練兵場遺跡』 II 香川県教育委員会
- 森下英治 1998 『旧練兵場遺跡』 III 香川県教育委員会
- 森下英治 1999 「讃岐地方における弥生時代中期集落の機能と構造について」『古代学協会四国支部第13回大会資料 濑戸内の弥生中期集落』 古代学協会四国支部
- 森下英治 2001 「善通寺市旧練兵場遺跡における弥生土器の編年と地域性の検討（上）」『研究紀要』 IX （財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 矢原高幸 1973 『善通寺市の古代文化』 善通寺市
- 矢原高幸 1977 「原始・古代」『善通寺市史』 1 善通寺市

第3章 調査の概要

(1) 調査区の位置と基本層序

廃土置き場のスペースの関係から調査区を南北に二分割し、反転することにした。最初に南から調査を開始し、これに伴って遺構番号も原則的に南から北へと並んでいる。

調査地の基本層序は、調査区南半分では表土を除去したところ、包含層は既に削平されており、弥生時代の地

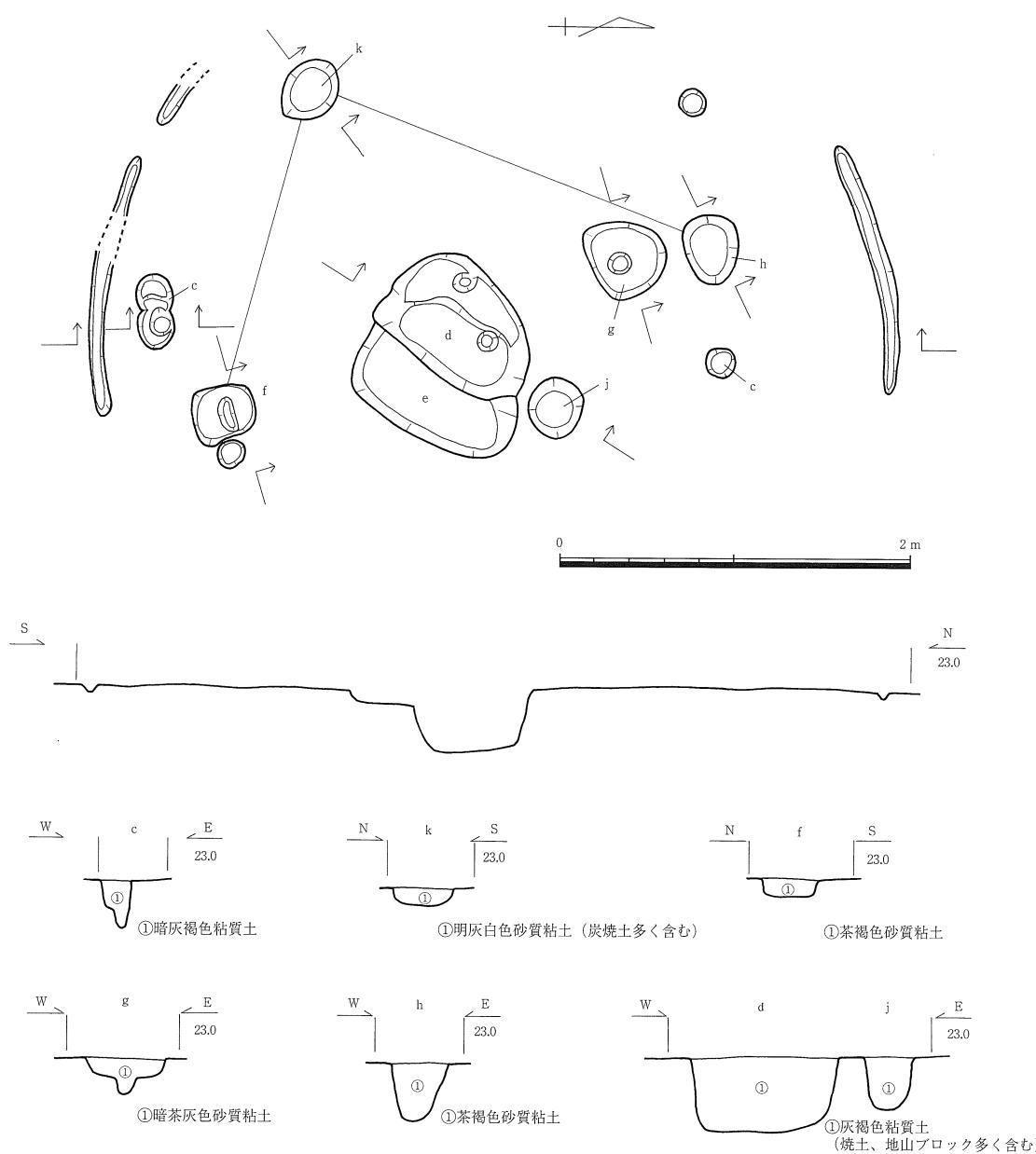


Fig.3 SH170実測図・土層観察図 (1/40)

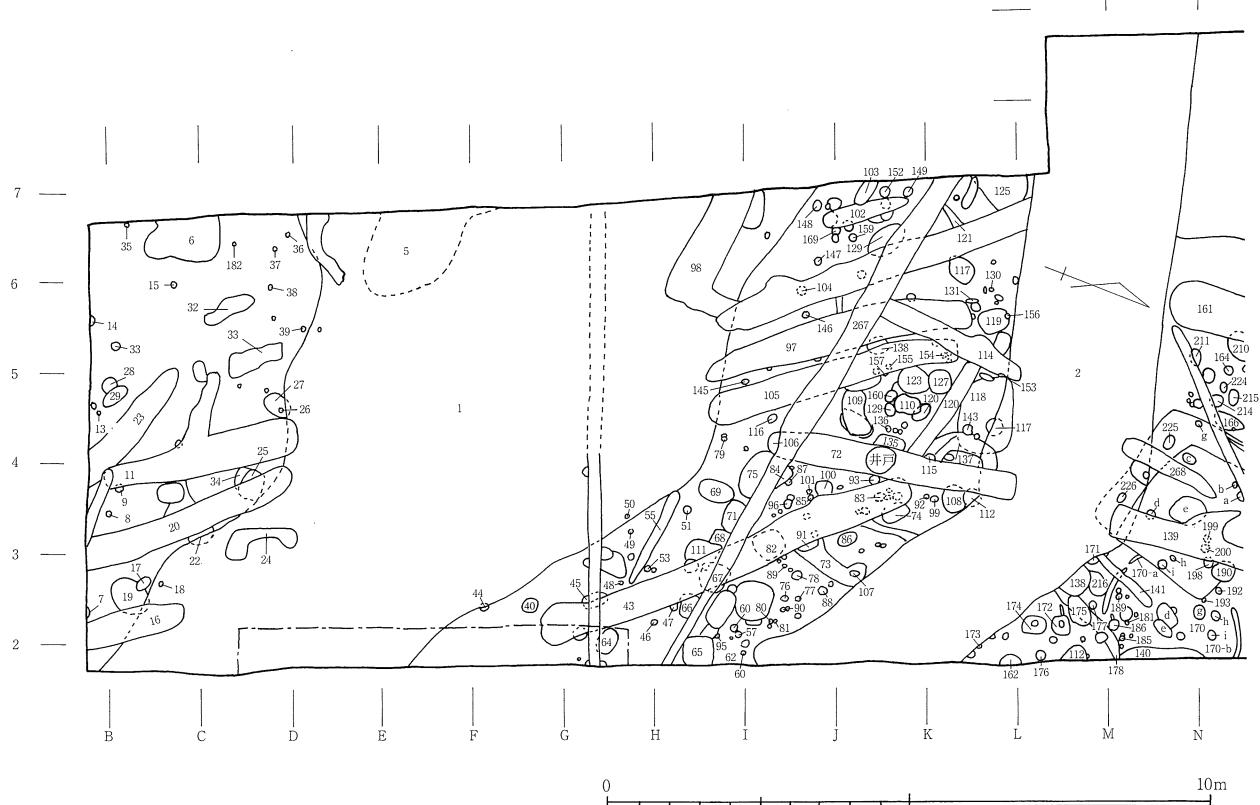
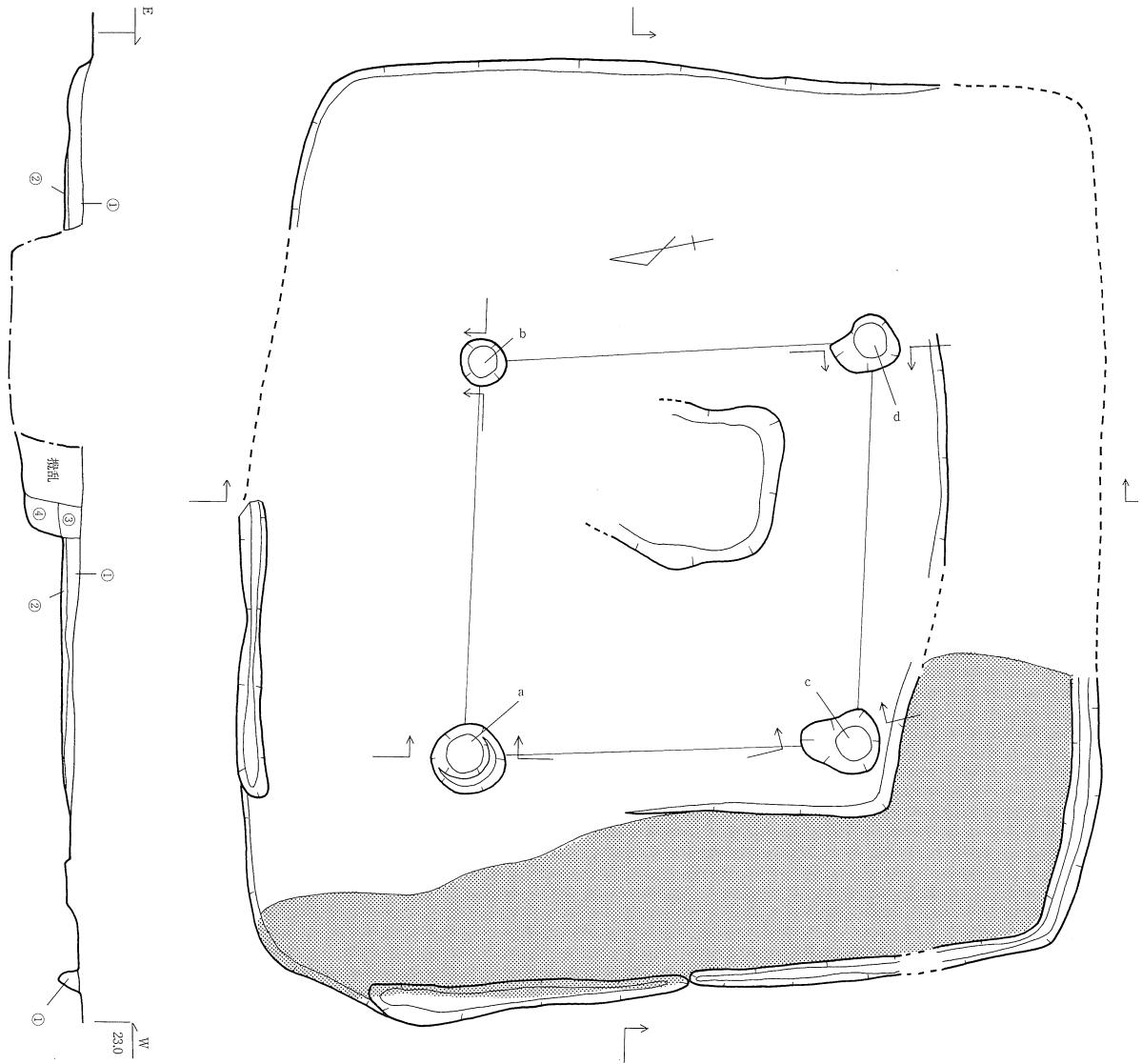


Fig.4 検出遺構略測図 (1/250)



① 黒茶褐色砂質粘土
 ② 黄橙褐色砂質粘土
 ③ 淡茶褐色砂質粘土
 (地山ブロック炭含む)
 ④ 淡灰褐色砂質粘土

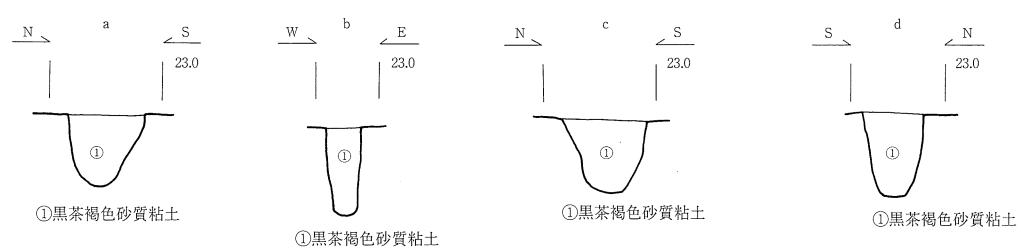
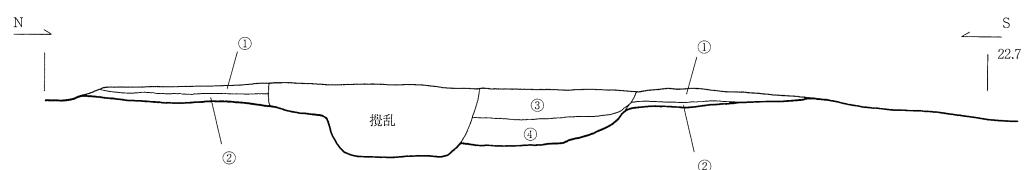


Fig.5 SH180実測図・土層観察図 (1/40)

山である黄橙色シルトが露出していた。調査区北部分では表土を除去すると5~10cmの灰白色砂質粘土層が堆積し、部分的に古墳時代～古代の遺物を多く包含する灰茶色粘土層が存在していた。

(2) 検出遺構

調査区西側で旧弘田川の岸と考えられる自然流路を検出したが、この地点以外は遺構が何度も切り合った状態で検出され、原則的に新しい遺構から古い遺構へと順に掘り下げをおこなっていったため、調査は難航した。この結果、住居跡5棟、掘立柱建物跡4棟、土坑、溝、ピット、柱穴状遺構、地鎮遺構などを検出した（Fig.4、付図、Pla.1・2）。以下、遺構の概要について、弥生時代～古代までと、近世～近現代に分けて述べていく。

弥生時代～古代の遺構

住居跡

SH170（Fig.3、Pla.3）

調査区中央東付近で検出した円形プランの竪穴で、床面で検出した柱、炉跡位置、壁溝の存在等から住居と判断した。削平が著しく、隣接するSH180に切られる。主柱穴は4本であると考えられる。直径約4.6mである。壁溝は幅約0.12m、深さ約0.06mで南北にそれぞれ残存する。中央炉跡は楕円形のものと円形のものがセットになっており、楕円形のものは長軸0.74m、短軸0.62m、深さ0.43mで、円形のものは径0.27m、深さ0.3mである。中央炉跡の埋土をサンプリングして洗浄した結果、土器片、焼土、炭、骨片、サヌカイトチップが多く含まれていた。また、緑泥片岩製小玉1点、ガラス製小玉2点も出土した。いわゆる10型中央土坑と類似した形状を呈する。出土遺物より、弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SH180（Fig.5・6、Pla.3・4）

調査区中央東付近で検出した隅丸方形プランの竪穴で、壁溝、柱穴、炉跡位置の存在等から住居と判断した。練兵場期に主に塹壕などによって攪乱されており、遺存状況は悪い。主柱穴は4本であると考えられる。柱間は南北・東西ともに2.2mである。床面西側は粘土によって貼床がされていた。南北幅約5.25m、東西幅4.75mである。壁溝は幅約0.16m、深さ約0.12mで西と南北の一部に残存する。中央炉跡は楕円形を呈し、幅0.91m、深さ0.3mである。中央炉内から、ほぼ完形の鉢点と半裁され壺胴部片点が出土した。中央炉跡及び埋土をサンプリングして洗浄した結果、埋土中より土器片、焼土、炭、種子、骨片、被熱石、サヌカイトチップが出土地し、緑泥片岩製小玉3点・ガラス小玉4点も出土した。出土遺物より、弥生時代終末と考えられる。

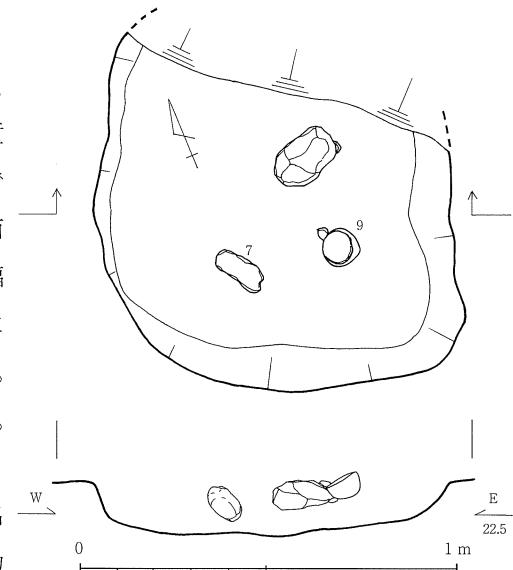


Fig.6 SH180中央土坑e遺物出土状況図(1/20)

SH230（Fig.7、Pla.4・5）

調査区北東で検出した隅丸方形プランの竪穴で、壁溝、柱穴、炉跡の存在等から住居と判断した。練兵場期に主に塹壕などによって攪乱されており、遺存状況は悪い。主柱穴は4本であると考えられる。柱穴には一度の建て代え痕跡が認められる。柱間は南北・東西ともに2.75mである。床面東側及び南側は粘土によって貼床がされ留板の痕跡が認められた。復原南北幅約5.25m、復原東西幅5.5mである。壁溝は幅約0.22m、深さ約0.12mで西と南北の一部に残存する。中央炉跡は楕円形を呈し、幅0.63m、深さ0.2mである。中央炉跡及び埋土をサンプリングして洗浄した結果、土器片、焼土、炭、骨片、サヌカイトチップが多く含まれていた。出土遺物より、弥生時代終末と考えられる。

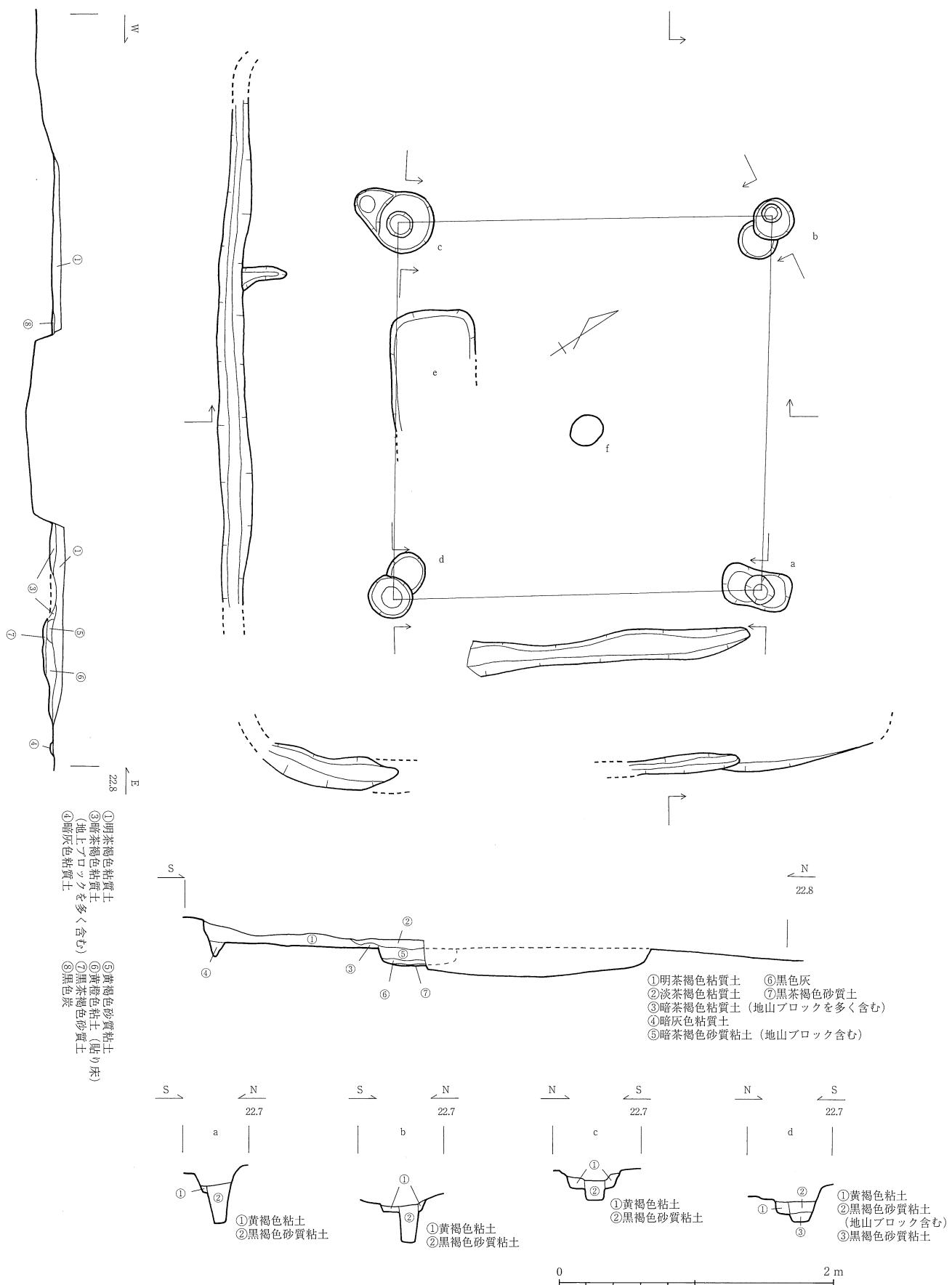


Fig.7 SH230実測図・土層観察図 (1/40)

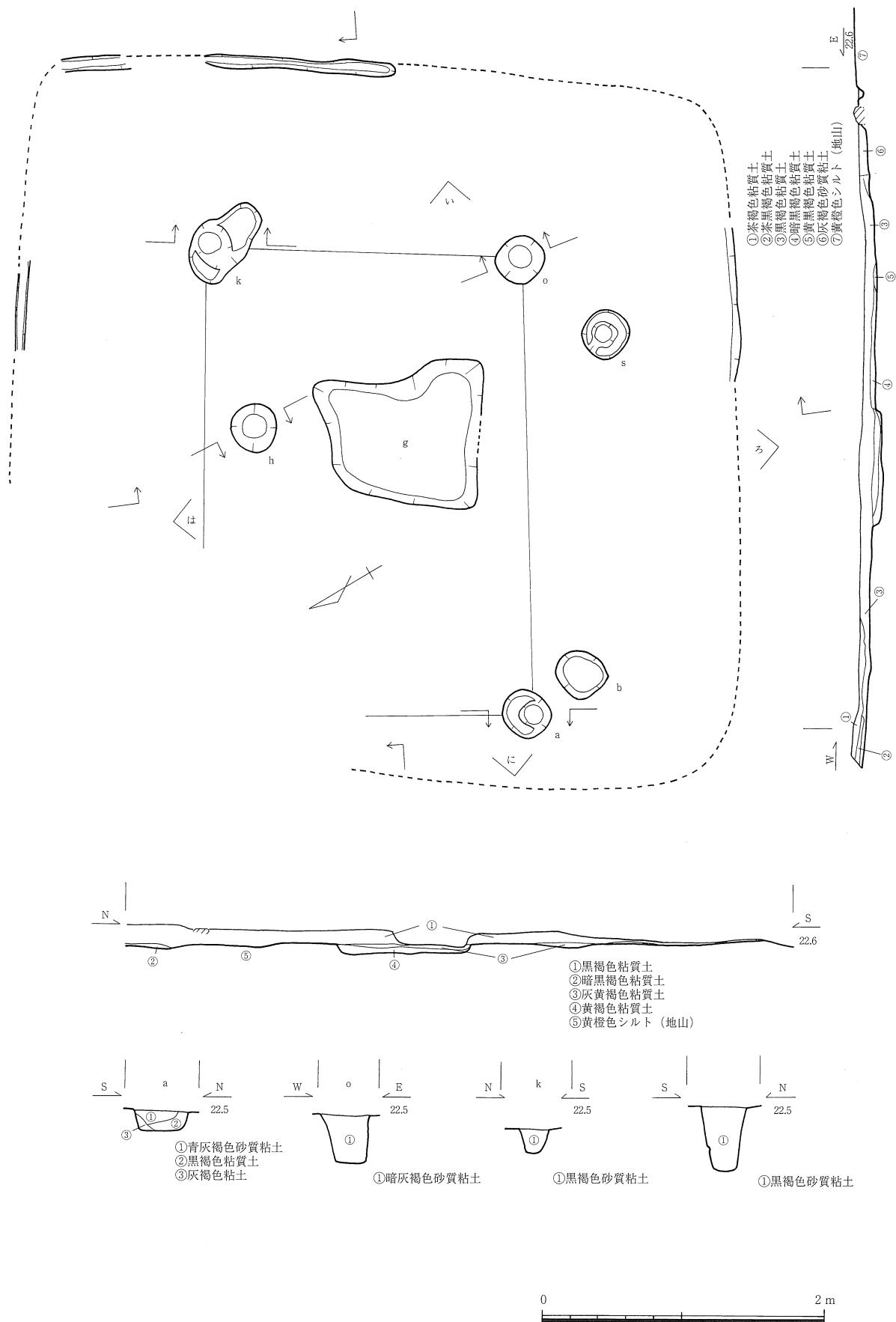
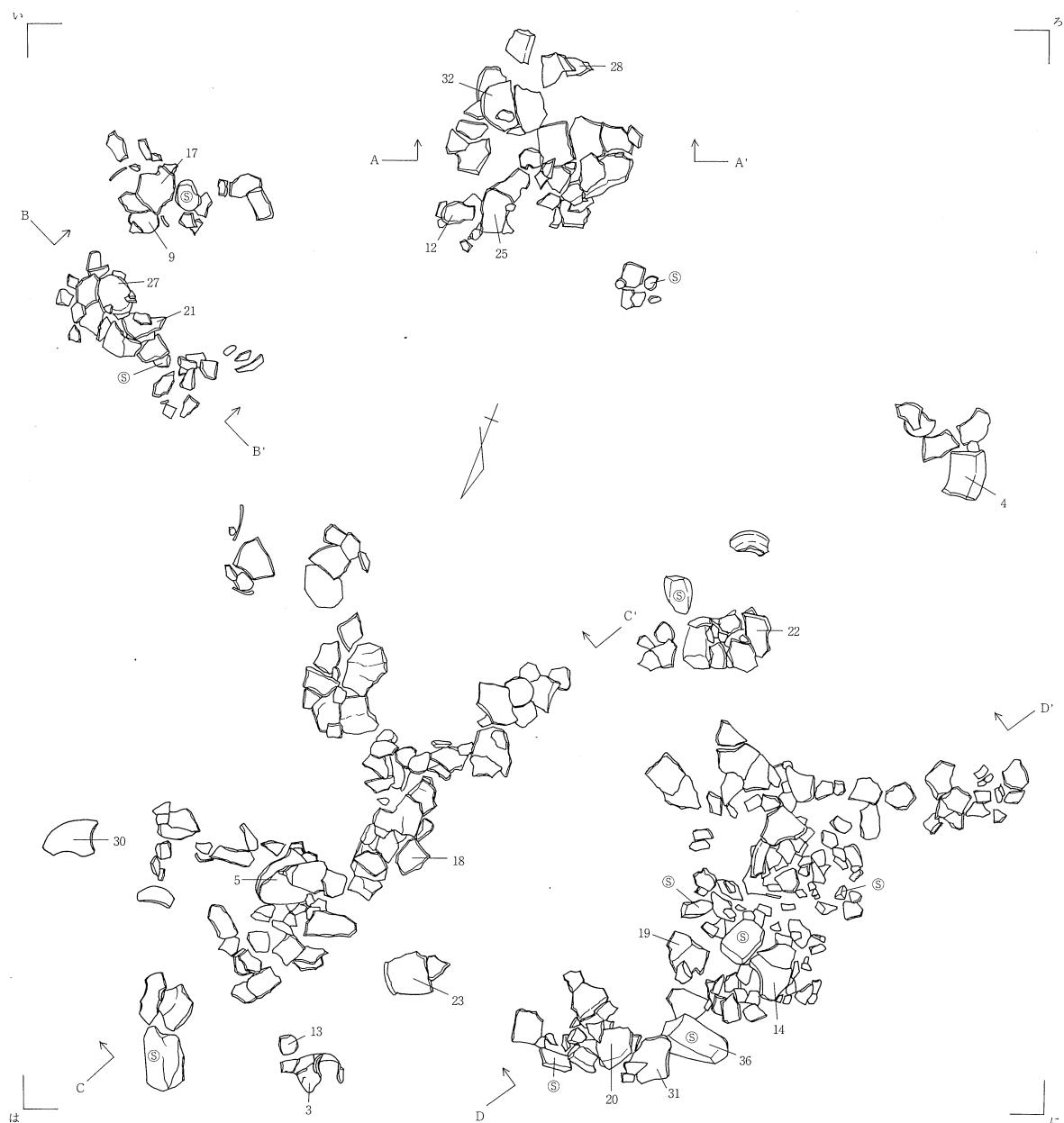


Fig.8 SH370実測図・土層観察図 (1/40)



※(S)は石または石器

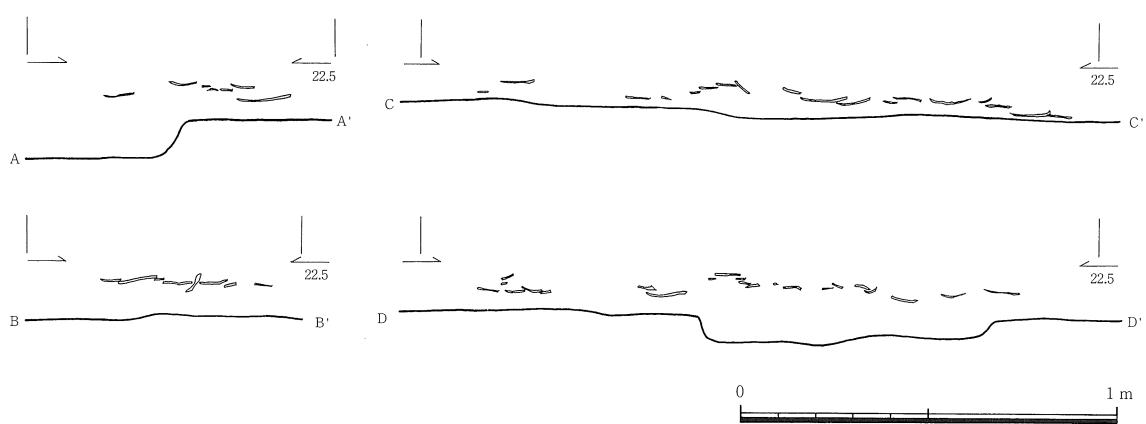


Fig.9 SH370土器群遺物出土状況図 (1/20)

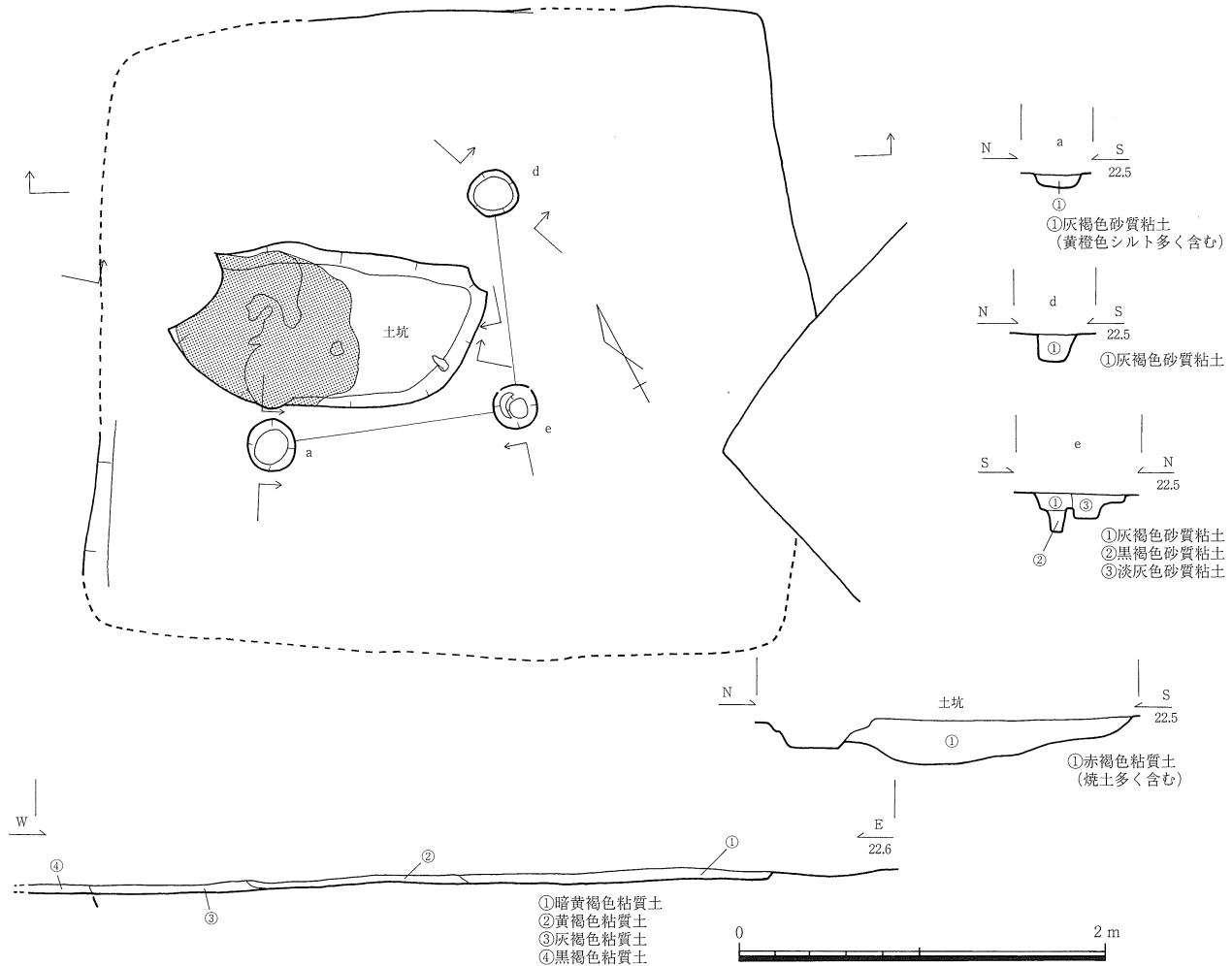


Fig.10 SH371実測図・土層観察図（1/40）

SH370 (Fig.8・9、Pla.5・6)

調査区北東で検出した竪穴で、壁溝、柱穴、炉跡の存在等から住居と判断した。調査区内にプランの約半分が検出されたため東側に調査区を拡張した。かなりの削平を受けており遺存状況は悪い。主柱穴は4本であると考えられる。柱間は南北3.2m・東西2.3mである。南北幅約5.08m、東西幅5.15mである。壁溝は幅約0.12m、深さ約0.05mで南・東の一部に残存する。中央炉跡は楕円形を呈し、長軸約1m、短軸約0.8m、深さ約0.18mである。中央炉付近一帯に、床面よりやや浮いた状態でおびただしい数の土器が出土した。埋土をサンプリングして洗浄した結果、土器片、炭、骨片、被熱石、サヌカイトチップが多く含まれており、緑泥片岩製小玉1点も出土した。出土遺物より、弥生時代終末と考えられる。

SH371 (Fig.10、Pla.5・6)

調査区北東で検出した隅丸方形プランの竪穴で、埋土の状況等から住居と判断した。削平が著しく、壁溝は残存していないかった。復原南北幅約3.55m、復原東西幅3.9mである。主柱穴は4本と考えられるが、このうち3本が残存する。中央部付近の土坑から焼土が大量に出土した。土坑は長軸1.72m、短軸0.84m、深さ0.24mで、楕円形を呈する。これらの焼土の中には面を有するものがあることより、本来住跡南端にあった造付竈の部材を、住居

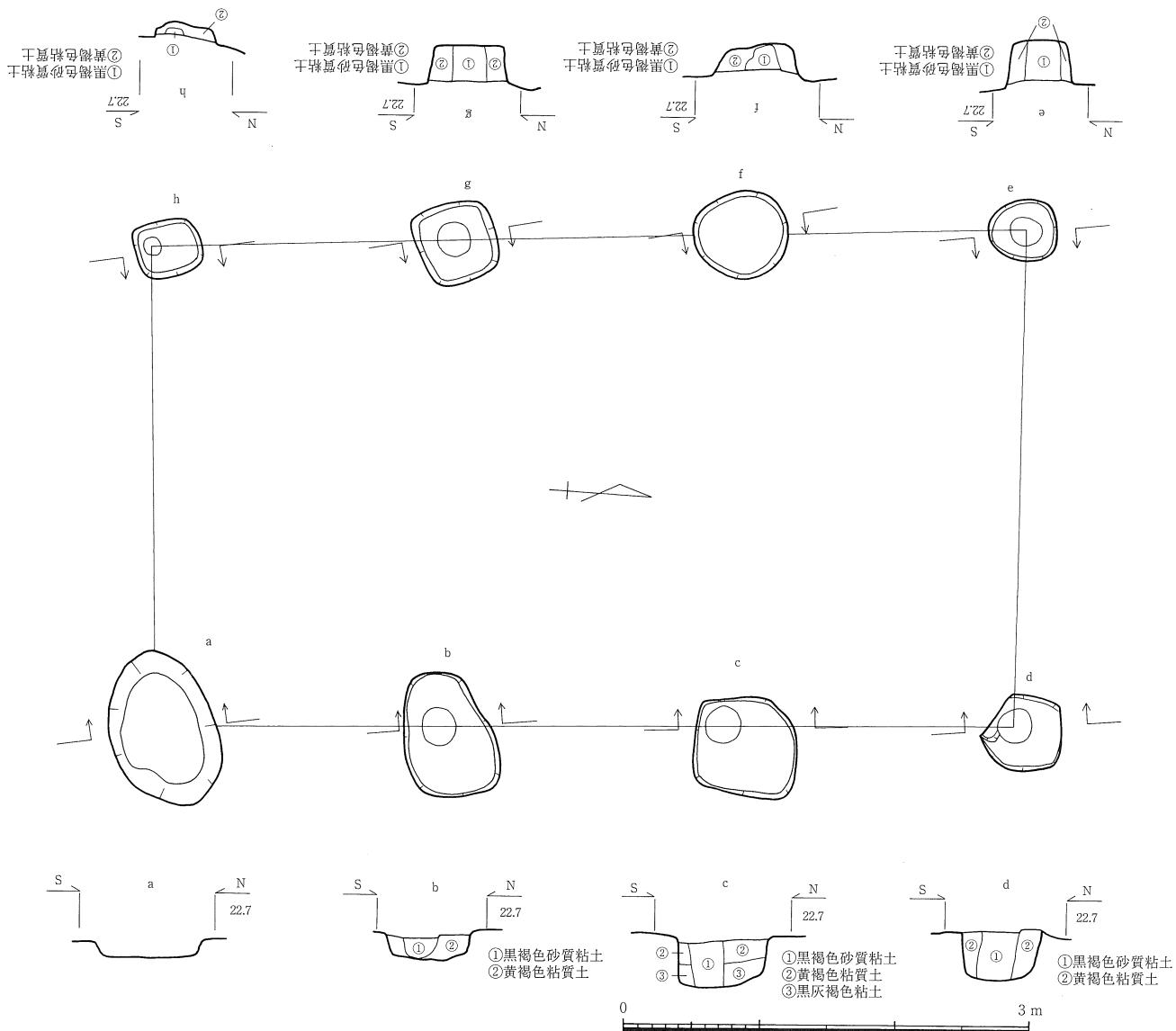


Fig.11 SB250実測図・土層観察図 (1/50)

跡廃棄時に片付けしたものと考えられる。出土遺物より、時期は古墳時代後期後半と考えられる。

掘立建物跡

SB250 (Fig.11, Pla.7~10)

調査区中央付近で検出した1間×3間の南北棟の建物。柱間は南北が2.1m、東西3.51mである。後世の削平によって深さが極めて浅いものもあるが、掘り方は方形を呈し、残存状態の良い掘り方で、一辺0.72×0.75m、深さ約0.35mである。柱穴b、c、d、e、g、hの掘り方でそれぞれ柱痕跡が認められ、柱径0.12～0.25mに復原できる。出土遺物等より、時期は弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SB330 (Fig.12, Pla.11・12)

調査区北東付近で検出した1間×2間の南北棟の建物。柱間は南北2.1m・東西2.5mである。後世の削平によって深さが極めて浅いものもあるが、掘り方は方形を呈し、残存状態の良い掘り方で、一辺0.58×0.57m、深さ約0.28mである。柱穴b、c、fの掘り方でそれぞれ柱痕跡が認められ、柱径0.21～0.27mに復原できる。出土遺物等より、時期は弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

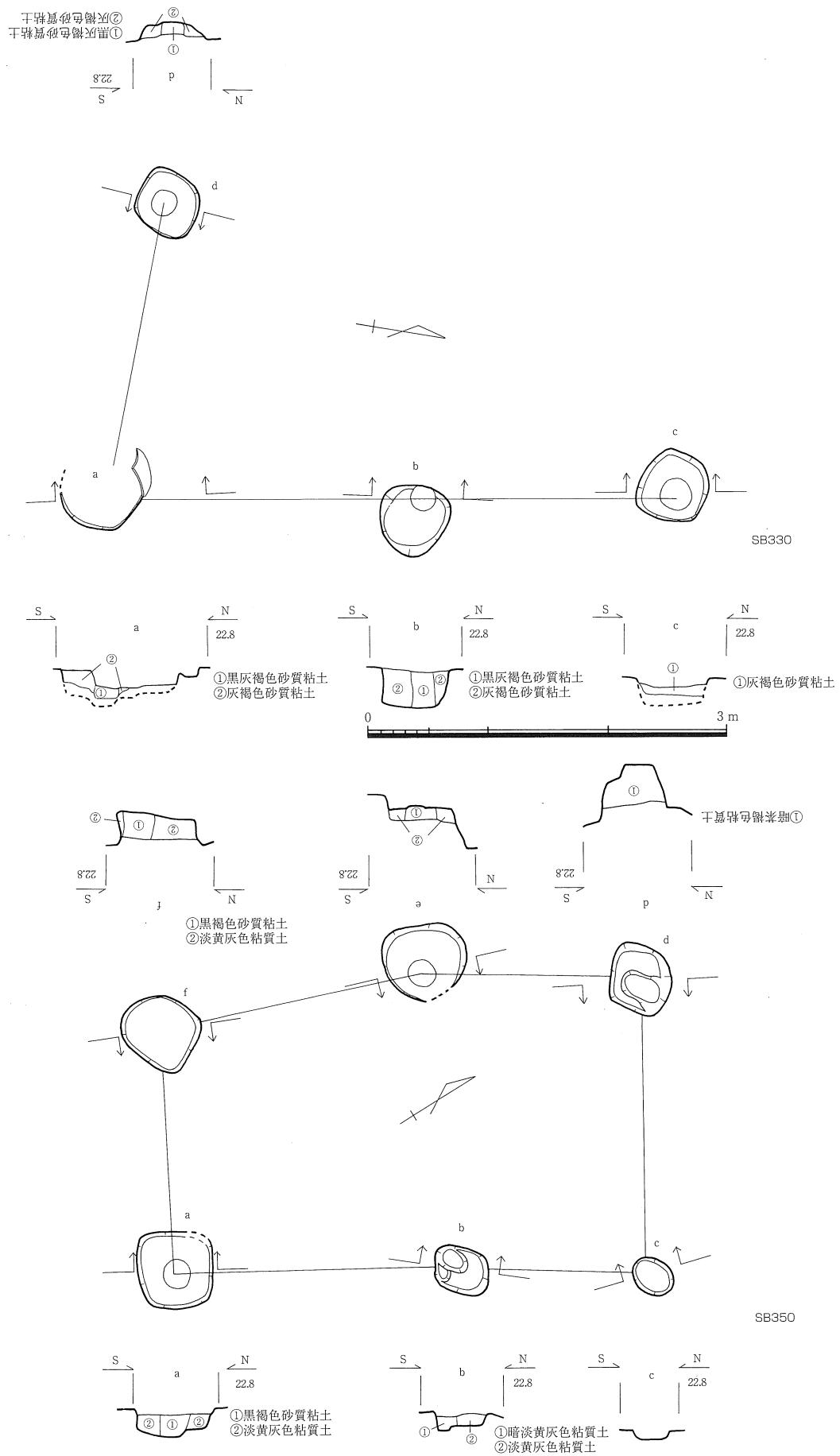


Fig.12 SB330・SB350実測図・土層観察図 (1/50)

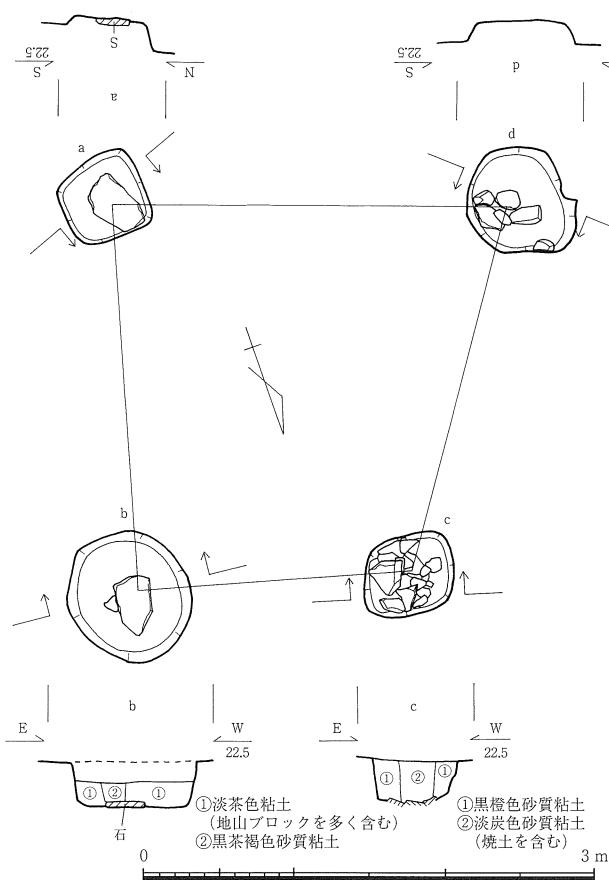


Fig.13 SB380実測図・土層観察図 (1/50)

SB350 (Fig.12、Pla.13～15)

調査区北東付近で検出した1間×2間の南北棟の建物。柱間は南

北が2.4m、東西2.3mである。後世の削平によって深さは浅く、掘り方は方形を呈し、残存状態の良い掘り方で、一辺0.57×0.64m、深さ約0.23mである。柱穴a、eの掘り方でそれぞれ柱痕跡が認められ、柱径約0.20mに復原できる。出土遺物等より、時期は弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SB380 (Fig.13、Pla.16～18)

調査区中央東付近で検出した1間×1間の東西棟の建物。柱間は南北2.55m・東西2.60mである。柱穴にはそれぞれ川原石が敷かれており建物の根石と考えられる。後世の削平によって深さが極めて浅いものもあるが、掘り方は方形を呈し、残存状態の良い掘り方で、一辺0.53×0.60m、深さ約0.30mである。柱穴a、bの掘り方でそれぞれ柱痕跡が認められ、柱径約0.20mに復原できる。出土遺物等より、時期は弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

土坑

SK243 (Fig.14)

調査区中央東で検出した橢円形の土坑で、SH230の一部を切り、現代の攪乱によって大半が失われている。残存長1.65m、幅0.96m、深さで0.18mである。灰白色砂粘質粘土が全面に堆積していた。出土遺物から時期は奈良時代以降と考えられる。

溝

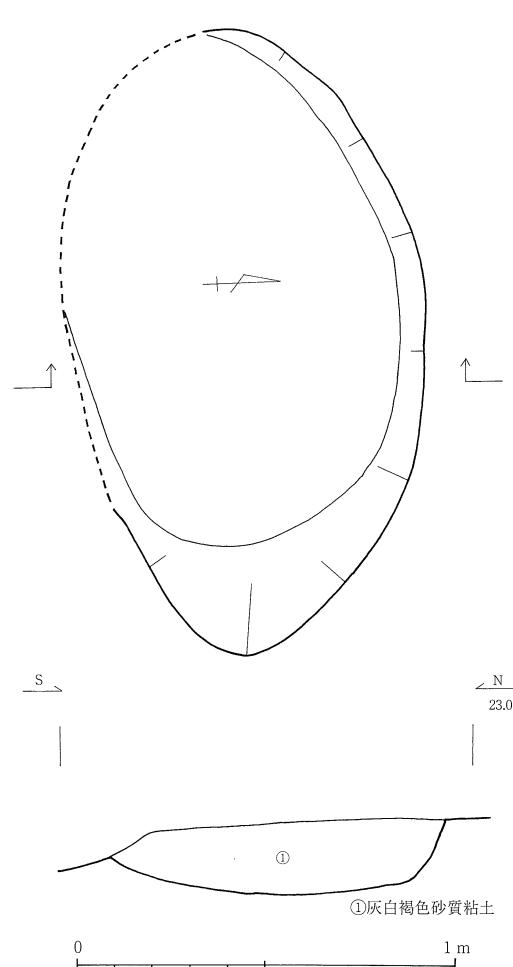


Fig.14 SK243実測図・土層観察図 (1/20)

SD178 (Fig.15)

調査区東付近で検出した溝状遺構で、東は調査区壁面に接し、西はSX175に切られる。現存長4.1m、最大幅1.1m、深さ0.15mである。暗灰褐色粘質土が全面に堆積していた。出土遺物と切り合い関係より時期は弥生時代と考えられる。

SD270 (Fig.15、Pla.19・20)

調査区中央付近で検出した舟形の遺構で、長さ3.85m、最大幅1.2m、深さ0.35mである。黒褐色粘質土が堆積していた。出土遺物より時期は奈良時代と考えられる。

柱掘り方状遺構

SX019 (Fig.16、Pla.26)

調査区南東隅で検出され方形を呈する。南北幅1.02m、東西幅1.05m、深さ0.18mである。SD001及びSD016に切られる。埋土は暗灰褐色粘質土である。弥生土器甕・高杯が出土した。

SX022 (Fig.16、Pla.20)

調査区南付近で検出され楕円形を呈する。南北幅0.92m、東西幅0.43m、深さ0.18mである。SD001とSD020に切られている。埋土は黒灰褐色砂質粘土の単一層である。弥生土器高杯、須恵器高杯が出土した。

SX025 (Fig.16、Pla.18・19)

調査区南で検出され方形を呈する。南北幅1.33m、東西幅1m、深さ0.26mである。SD020に切られる。掘り方中央部付近で石が出土した。根石的なものと考えられる。埋土は暗灰褐色粘質土である。弥生土器片が出土した。

SX027 (Fig.16)

調査区南で検出され楕円形を呈する。南北幅0.9m、東西幅0.75m、深さ0.16mである。SD001に切られる。中央部付近で石が出土した。根石的なものと考えられる。埋土は暗灰褐色粘質土、黄褐色シルトよりなる。遺物は出土しなかった。

SX040 (Fig.17、Pla.21)

調査区南で検出され方形を呈する。南北幅0.6m、東西幅0.42m、深さ0.1mである。近現代の攪乱によって北半分は失われている。埋土は灰茶褐色粘質土の単一層よりなる。弥生土器片、須恵器壺などが出土した。

SX065 (Fig.17)

調査区中央東付近で検出され方形を呈する。南北幅1.21m、東西幅1m、深さ0.3mである。東SD016に切られる。

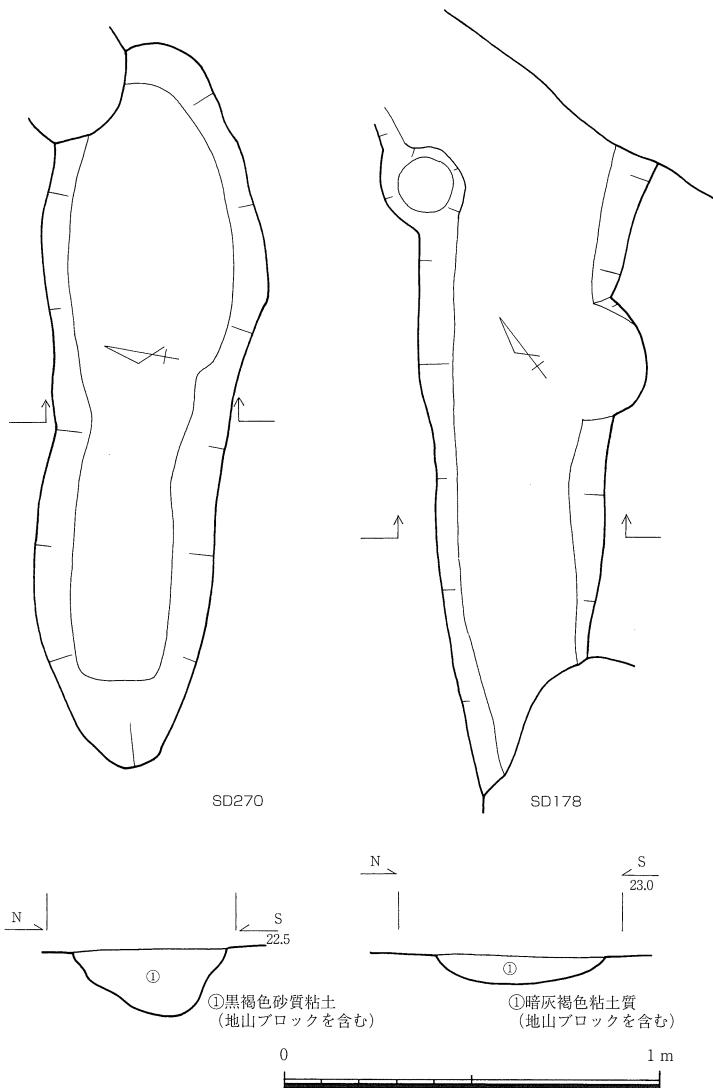


Fig.15 SD178・SD270実測図・土層観察図 (1/20・1/40)

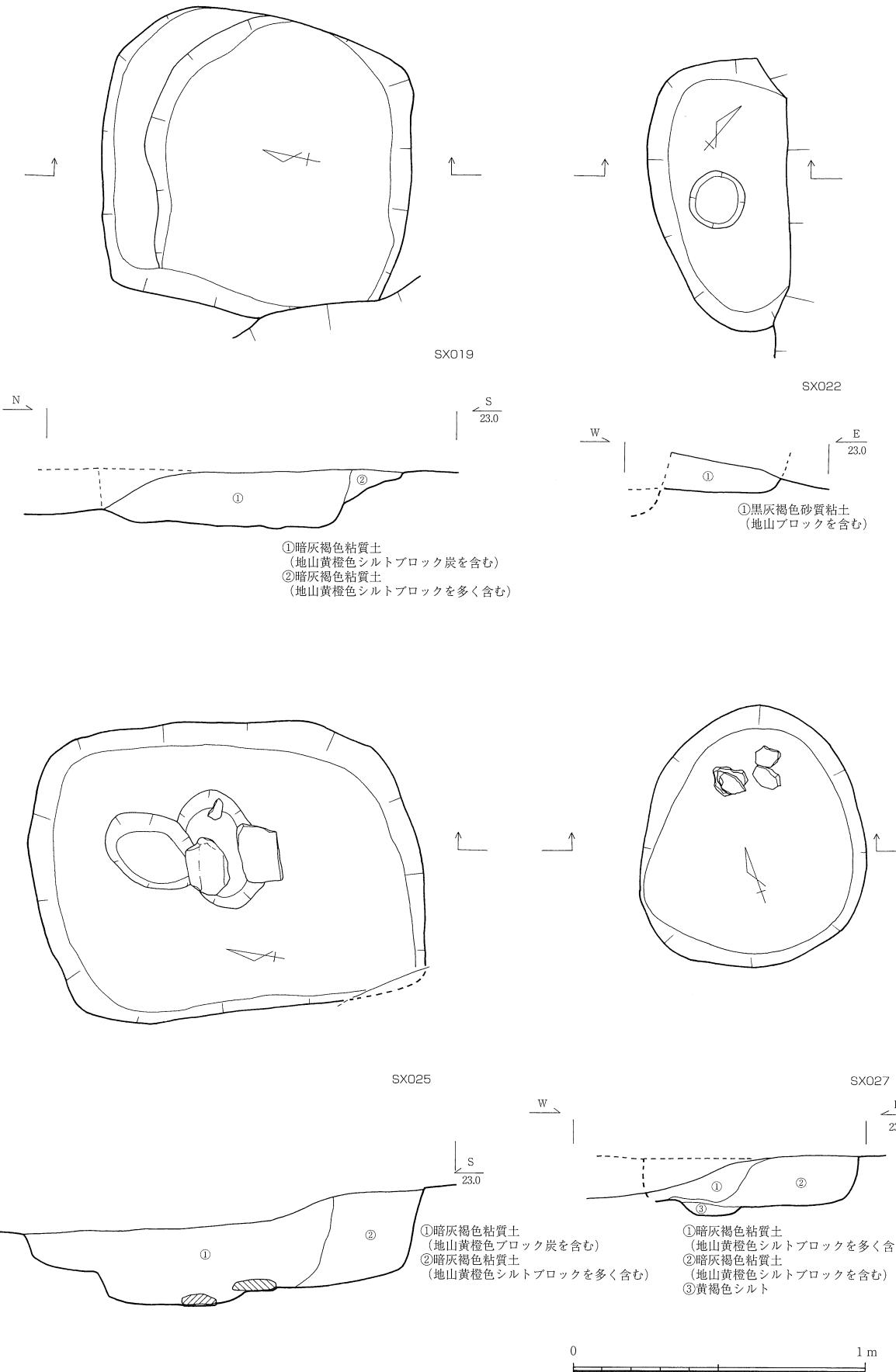


Fig.16 柱掘り方状遺構実測図・土層観察図 (1) (1/20)

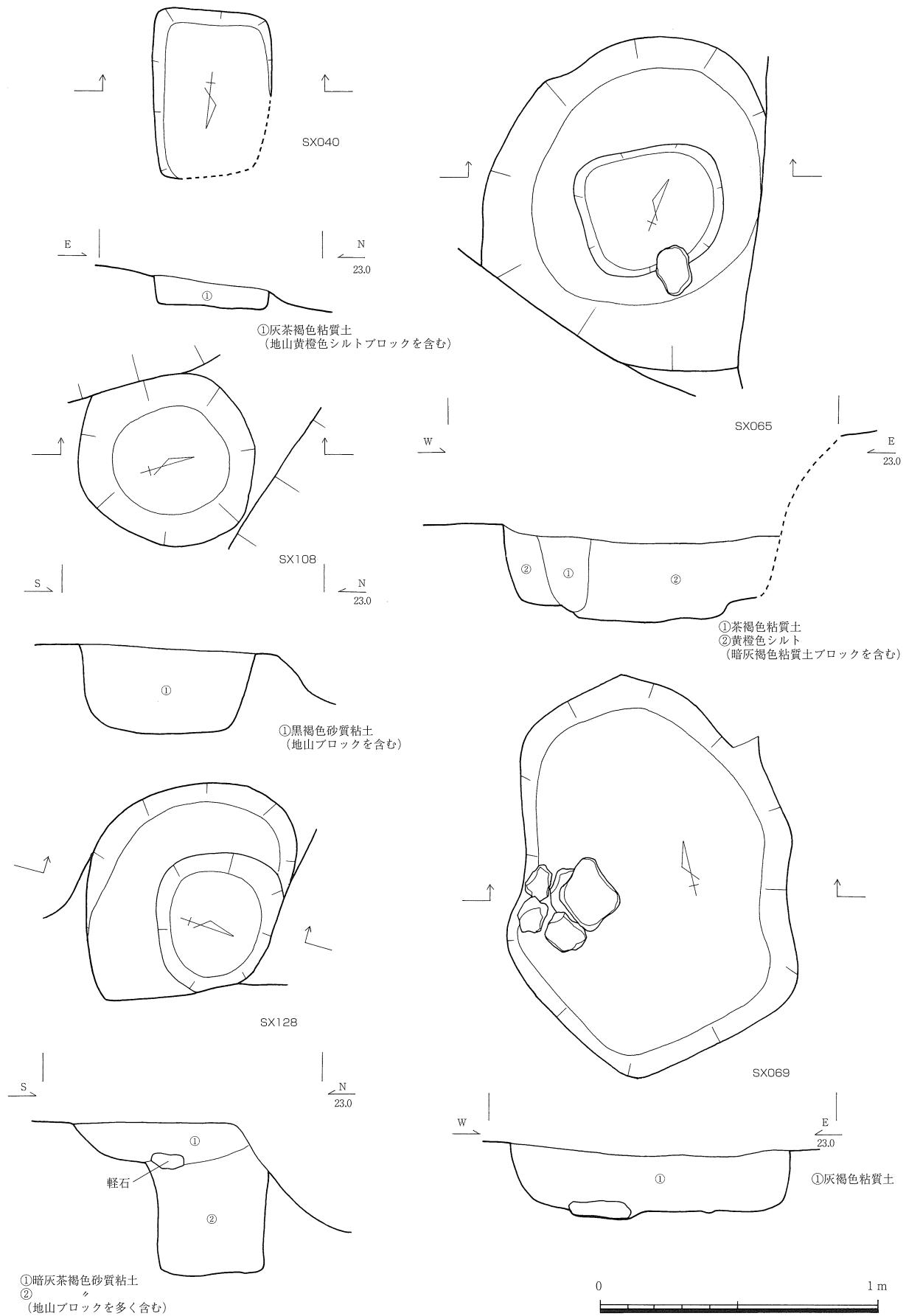


Fig.17 柱掘り方状遺構実測図・土層観察図 (2) (1/20)

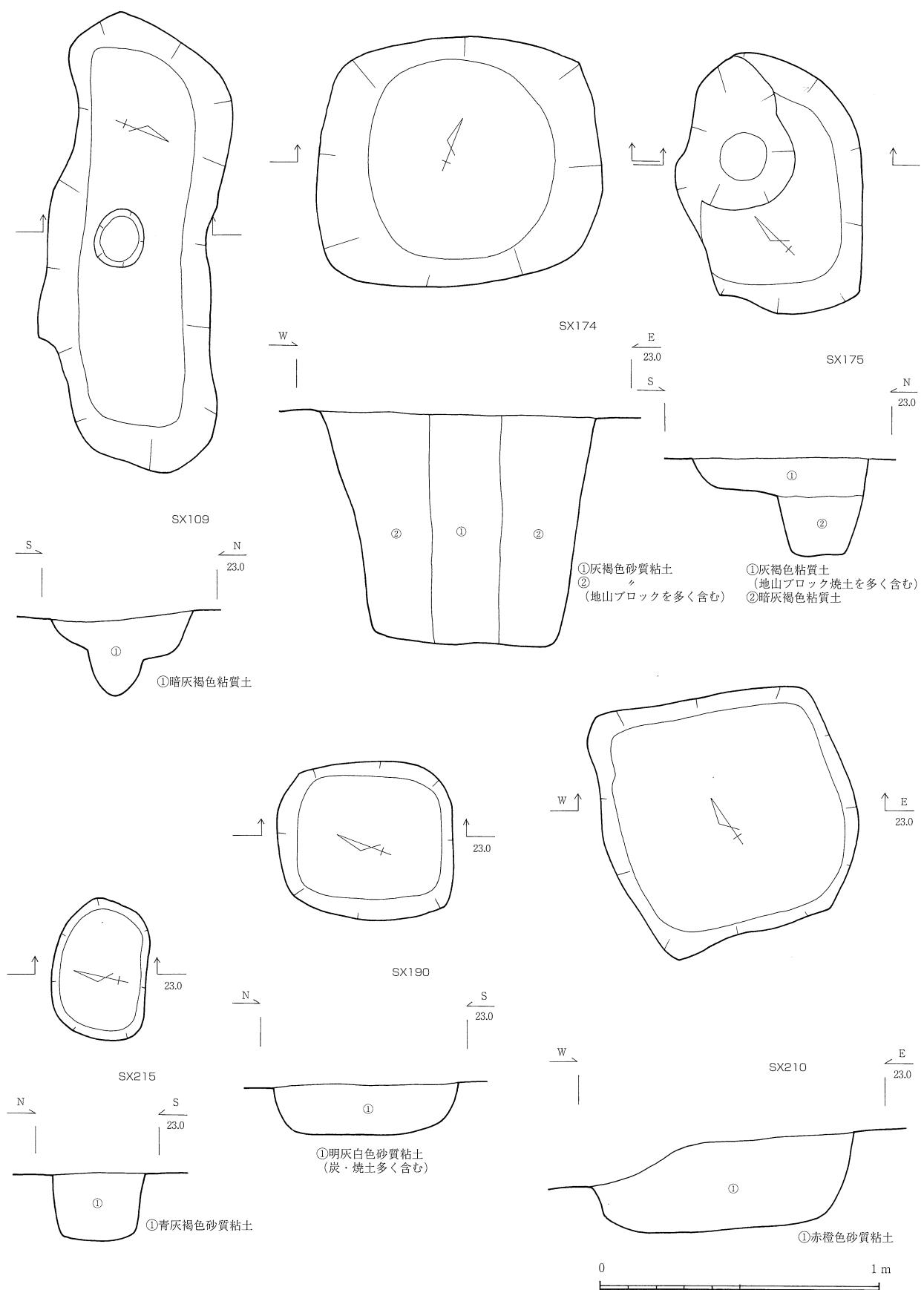


Fig.18 柱掘り方状遺構実測図・土層観察図（3）（1/20）

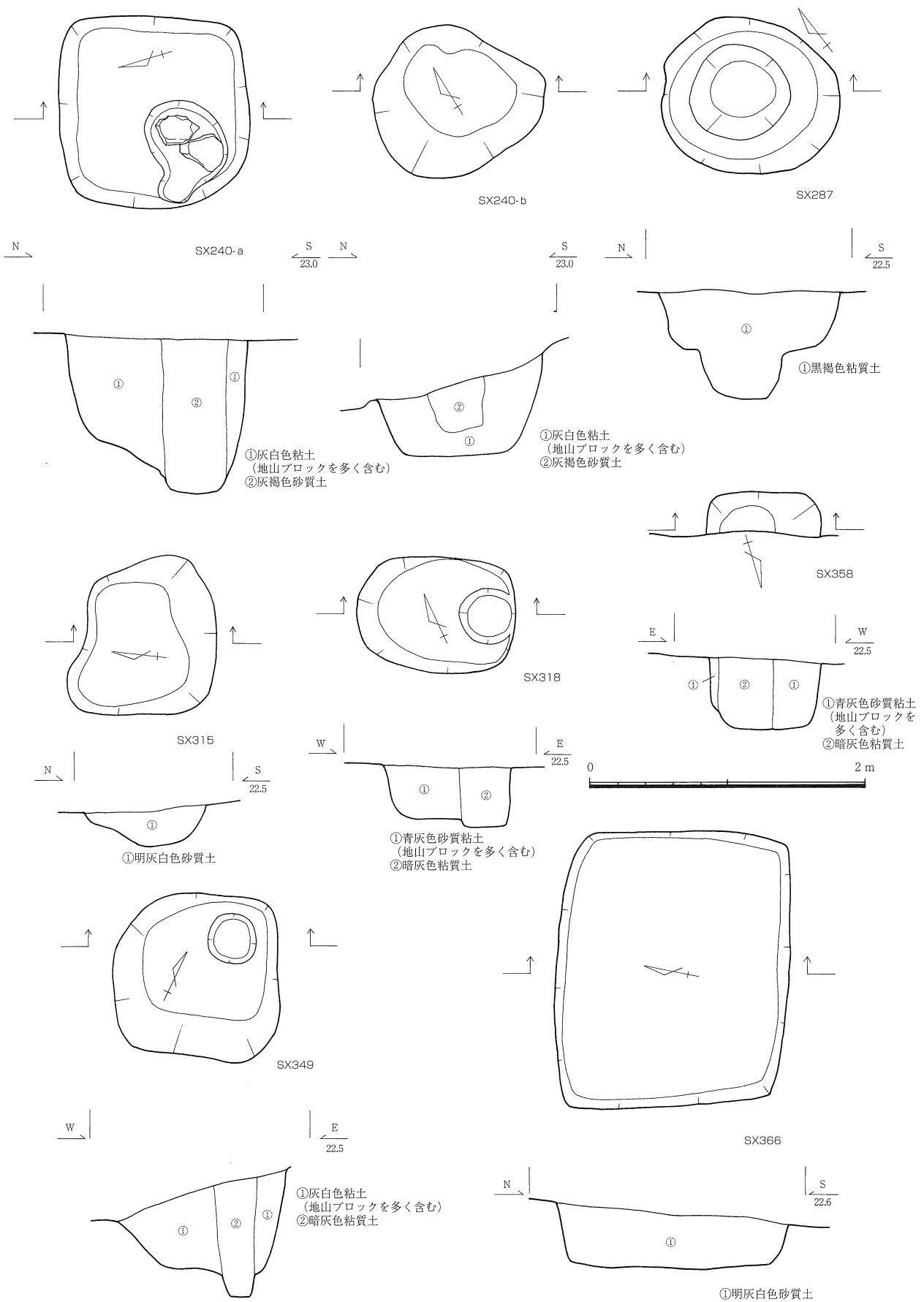


Fig.19 柱掘り方状遺構実測図・土層観察図 (4) (1/20)

中央部付近で石が出土した。根石的なものと考えられる。埋土は暗灰褐色粘質土よりなる。弥生土器甕などが出土した。

SX069 (Fig.17、Pla.22)

調査区中央付近で検出され橢円形を呈する。南北幅1.45m、東西幅1.02m、深さ0.23mである。S-71に切られる。中央部付近で石が出土した。根石的なものと考えられる。埋土は灰褐色粘質土の単一層よりなり、焼土を多く含む。弥生土器片・サヌカイトチップが出土した。

SX108 (Fig.17)

調査区中央付近で検出され円形を呈する。直径0.63m、深さ0.3mである。SD072及びS-112に切られる。埋土は黒褐色砂質粘土よりなる。弥生土器片・須恵器片が出土した。

SX109 (Fig.18)

調査区南東隅で検出され長方形を呈する。南北幅0.57m、東西幅1.65m、深さ0.27mである。SD001及びSD016に切られる。中央部は円形に窪んでいる。埋土は暗灰褐色粘質土の単一層である。弥生土器片・須恵器杯・打製石鏃・サヌカイトチップが出土した。

SX128 (Fig.17、Pla.22)

調査区中央西付近で検出され橢円形を呈する。残存幅0.8m、深さ0.55mである。SD104及びS-129に切られる。埋土は暗灰褐色粘質土と黄橙色シルトを含む暗灰褐色粘質土の2層よりなる。上層からは軽石、下層からは弥生土器甕・高杯が出土した。

SX174 (Fig.18、Pla.23)

調査区中央東付近で検出され方形を呈する。南北幅0.89m、東西幅1m、深さ0.82mである。埋土は灰褐色粘質土、黄橙色シルトブロックを含む灰褐色粘質土である。弥生土器壺・甕が出土した。

SX175 (Fig.18、Pla.23)

調査区中央東付近で検出され方形を呈する。南北幅0.66m、東西幅0.92m、深さ0.35mである。S-138に切られ、SD178を切る。埋土は灰褐色粘質土と暗灰褐色粘質土の2層よりなる。弥生土器片・須恵器杯・土師器甕が出土した。

SX190 (Fig.18、Pla.24)

調査区中央東付近で検出され方形を呈する。南北幅1.02m、東西幅1.05m、深さ0.18mである。SH180を切り、SD139に切られる。埋土は明灰褐色粘質土の単一層である。弥生土器甕・ミニチュア鉢、炭化物、骨片が出土した。

SX210 (Fig.18、Pla.24)

調査区中央付近で検出され方形を呈する。南北幅0.91m、東西幅0.87m、深さ0.32mである。S-161に切られる。埋土は赤橙色砂質粘土の単一層である。弥生土器壺・甕・器台、須恵器片、土師器甕、焼土が出土した。

SX215 (Fig.18)

調査区中央付近で検出され橢円形を呈する。南北幅0.33m、東西幅0.5m、深さ0.19mである。埋土は青灰褐色砂質粘土の単一層である。弥生土器壺・甕・高杯が出土した。

SX240 -a (Fig.19、Pla.25)

SX240-a及びSX240-bは調査当初、同一の掘立柱建物跡の柱穴を想定して番号を付した。しかし、掘り方の深さや埋土の状態、出土遺物等から両者の同時性を断言することが出来ず、報告では柱掘り方状遺構として両者を個別に述べる。

調査区中央東で検出され方形を呈する。南北幅0.69m、東西幅0.7m、深さ0.56mである。柱痕跡は灰褐色砂質土、埋土は灰白色粘土である。中央部付近で石が出土した。根石的なものと考えられる。弥生土器壺・甕・高杯、サヌカイト剥片が出土した。

SX240-b (Fig.19、Pla.25)

調査区中央東で検出され方形を呈する。南北幅0.63m、東西幅0.55m、深さ0.35mである。柱痕跡は灰褐色砂質土、埋土は灰白色粘土である。弥生土器片、サヌカイト剥片、焼土が出土した。

SX287 (Fig.19)

調査区で検出され円形を呈する。南北幅0.63m、東西幅0.56m、深さ0.39mである。S-275に切られる。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。弥生土器壺・甕・鉢・敲石が出土した。

SX315 (Fig.19、Pla.26)

調査区北東隅付近で検出され橢円形を呈する。南北幅0.48m、東西幅0.55m、深さ0.12mである。SH371の焼土坑を切る。埋土は明灰白色砂質土の単一層である。弥生土器壺・甕・高杯、須恵器片、土師器甕、焼土が出土した。

SX318 (Fig.19、Pla.27)

調査区北東付近で検出され方形を呈する。南北幅0.58m、東西幅0.42m、深さ0.21mである。柱痕跡は暗灰色粘質土で、埋土は青灰色砂質粘土である。弥生土器壺が出土した。

SX349 (Fig.19、Pla.27)

調査区北東付近で検出され方形を呈する。南北幅0.59m、東西幅0.6m、深さ0.42mである。SD226に切られる。柱痕跡は灰褐色砂質土、埋土は灰白色粘土である。弥生土器壺、サヌカイトチップが出土した。

SX358 (Fig.19、Pla.28)

調査区北東付近で検出され方形を呈する。東西幅0.42m、深さ0.26mである。SD308に切られる。柱痕跡は暗灰色粘質土、埋土は青灰色砂質粘土である。弥生土器片、土師器碗が出土した。

SX366 (Fig.19、Pla.29)

調査区北拡張部で検出され方形を呈する。南北幅0.85m、東西幅1m、深さ0.21mである。SH371を切る。埋土は明灰白色砂質土の単一層である。弥生土器壺、須恵器杯身、サヌカイトチップ、焼土が出土した。

近世～近現代の遺構

土坑

SK005 (Fig.20、Pla.28)

調査区南東端で検出した不定形な土坑で、調査区西壁に接しており全体の形状は不明である。SD001の整地土を切っており、深さ約1.5mである。炭を多く含む黒褐色砂質土が堆積していた。出土遺物は陶磁器片、軍用食器、煉瓦、

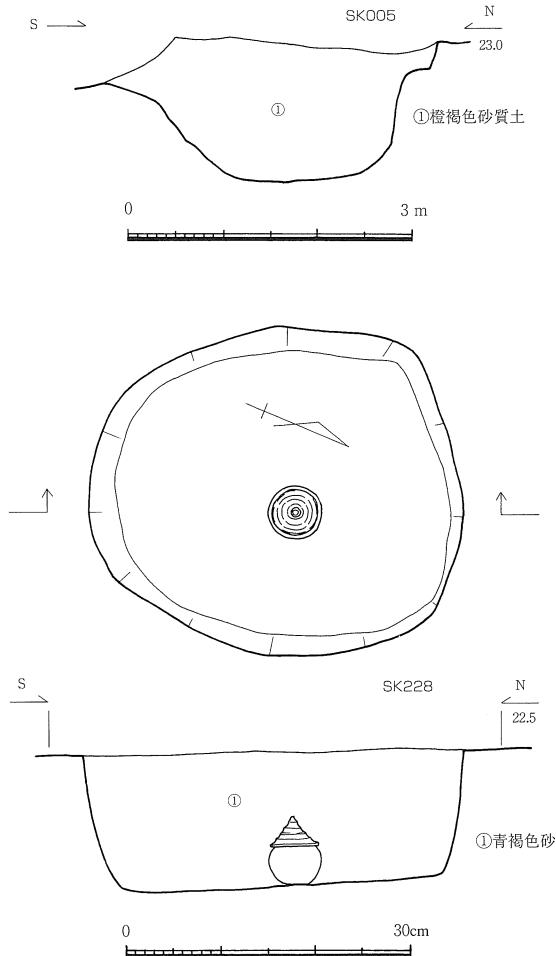


Fig.20 SK005・SK228実測図・土層観察図
(1/8・1/40)

ガラス瓶である。戦前のゴミ穴と考えられる。

地鎮遺構

SK228 (Fig.20、Pla.29・30)

調査区中央東付近で検出した楕円形の土坑で、SD231を切っている。南北幅0.4m、東西幅0.38m、深さ約0.14mである。土坑内に陶器製の宝珠形容器1点を中心に据え青褐色砂が入れられていた。容器内にはガラス製ビー玉点と、五円銅貨、一円銅貨、五十銭銅貨、及び劣化により判読は出来ないが、十銭アルミ貨と考えられるものがそれぞれ一枚入れられていた。また容器内からは塩も検出された。五円銅貨は昭和26年、一円銅貨は昭和21年、五十銭銅貨は昭和21年と判読できる。宝珠形容器の特殊な内容物等から地鎮遺構と判断した。

溝

SD001 (Fig.21、Pla.30・31)

調査区南付近で検出した自然流路で、東西は調査区東西壁と接する。検出長約18.5m、最大幅17m、深さ0.8～1mである。溝は東から西へと走る。埋土は上層から暗褐色粘質土、淡灰褐色砂質土である。下層は溝機能時の堆積であるが、上層は徐々に埋土が堆積して溝が廃絶したのではなく、地山面の黄橙色シルトを大量に含んでいる。これは地山を削りだして溝を整地し、平坦にした結果ではないかと考えられる。遺物は弥生土器壺、須恵器高杯、土師器片、打製石器、焼土、蹄鉄、不明鉄製品、ガラス片などが出土した。出土遺物と切り合い関係から、溝の整地による廃絶は明治時代段階と考えられる。

SD002 (Fig.21、Pla.31)

調査区中央付近で検出した自然流露で、東西は調査区東西壁と接する。検出長22.5m、幅5m、深さ0.9mである。溝は東から西へと走りSD003を切る。埋土は上層から青灰褐色砂礫土、青灰褐色砂質粘土である。下層は溝機能時の堆積であるが、上層は徐々に埋土が堆積して溝が廃絶したのではなく、地山面の黄橙色シルトを大量に含んでいる。これはSD001同様に地山を削りだして溝を整地し、平坦にした結果と考えられる。遺物は弥生土器壺・甕・高杯、須恵器甕・杯・高杯、土師器甕・杯・皿、陶磁器片、サヌカイト剥片、土管、木製品、ガラス片などが出土した。出土遺物と切り合い関係から、溝の整地による廃絶は明治時代段階と考えられる。

SD003 (Fig.21、Pla.32・34)

調査区西で検出した自然流路で、検出長約42.5m、検出幅約13m、深さ約0.5mである。溝は南から北へと走ると考えられる。西部分は西壁と接しており、実際の幅は不明である。SD002に切られる。埋土の状態は、最下層では砂層が堆積しており、その上に灰褐色砂質粘土系の土が、縞状に堆積していく様子が観察される。このことからSD003は、調査区西に位置する弘田川の岸であったが、後世に耕地化されていった可能性が考えられる。遺物は弥生土器壺・高杯、分銅形土製品、須恵器甕、土師器脚付鍋・皿、国産陶磁器片、青磁碗、瓦、打製石庖丁、柱状片刃石斧、サヌカイト剥片などが出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係より近世段階ものと考えられる。

SD266 (Fig.21、Pla.32)

調査区北東付近で検出した南東から北西に走る溝で、調査区東壁と北壁に接しているため全長は不明である。検出長約14.5m、最大幅約0.4m、深さ約0.5mである。埋土は灰色砂礫土の単一層である。堆積状況や断面形態から自然流路と考えられる。SD308に切られる。遺物は弥生土器壺・甕・鉢、須恵器杯身、土師器脚付鍋・皿、国産陶器片、染付片、瓦片、サヌカイト剥片、石塔が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係から、埋没時期は近世末～明治時代初頭の段階と考えられる。

SD308 (Fig.21、Pla.33)

調査区北東付近で検出した南東から北西に走る溝で、調査区東壁に接しているため、全長は不明である。検出

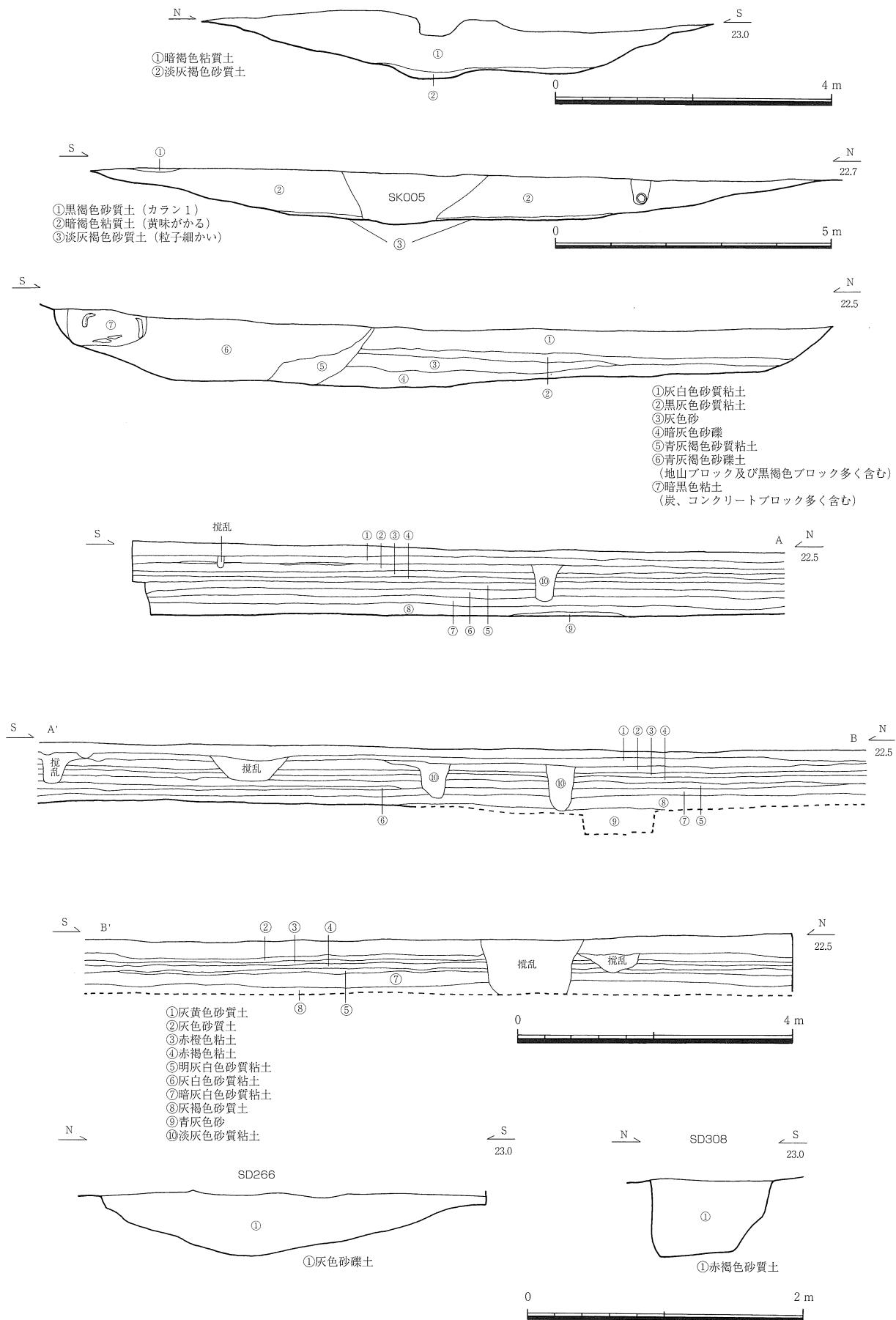


Fig.21 溝土層観察図 (1/20・1/40・1/50)

長約13.8m、幅0.8m、深さ約0.52mである。埋土は赤褐色砂質土の単一層である。SD266を切る。遺物は弥生土器高杯、須恵器杯身、国産陶器、染付、瓦、サヌカイト剥片等が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係から、埋没時期は昭和時代の段階と考えられる。

塹壕

SD011 (Fig.22、Pla.33)

調査区南付近で検出した南東から北西方向の溝状遺構で、調査区南壁に接するため、全長は不明である。検出長6.5m、幅1.2m、深さ0.15mである。一部東方向に分岐する。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD001及びSD012を切る。遺物は弥生土器片、須恵器片、サヌカイト剥片が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係から、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

SD012 (Fig.22、Pla.34)

調査区南端付近で検出した東西方向の溝状遺構で、調査区南壁に接するため、全長は不明である。検出長4.5m、幅1.1m、深さ0.62mである。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD001を切りSD011に切られる。遺物は弥生土器片、須恵器片が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係から、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

SD016 (Fig.22)

調査区南東付近で検出した南東から北西に伸びる溝状遺構で、調査区南壁に接するため全長は不明である。検出長3.5m、幅1.1m、深さ0.57mである。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD001を切る。遺物は出土しなかった。遺構の切り合い関係と方向、埋土の状況などから、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

SD020 (Fig.22、Pla.34)

調査区南端で検出した南東から北西に伸びる溝状遺構で、調査区南壁に接するため全長は不明である。検出長7.5m、幅1.1m、深さ0.28mである。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD001を切る。遺物は弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係から、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

SD024 (Fig.22)

調査区南付近で検出した「コ」字形の溝状遺構で、長さ2.5m、幅0.75m、深さ0.5mである。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD001を切る。遺物は出土しなかった。

SD043 (Fig.22、Pla.35)

調査区中央東付近で検出した南東から北西に伸びる溝状遺構で、長さ11.5m、幅1.2m、深さ0.2mである。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD072に切られる。遺物は弥生土器片、須恵器片が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係、埋土の状況から、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

SD072 (Fig.22、Pla.35)

調査区東付近で検出した南西から北東に伸びる溝状遺構で、長さ8.5m、幅1.1m、深さ0.53mである。埋土は淡

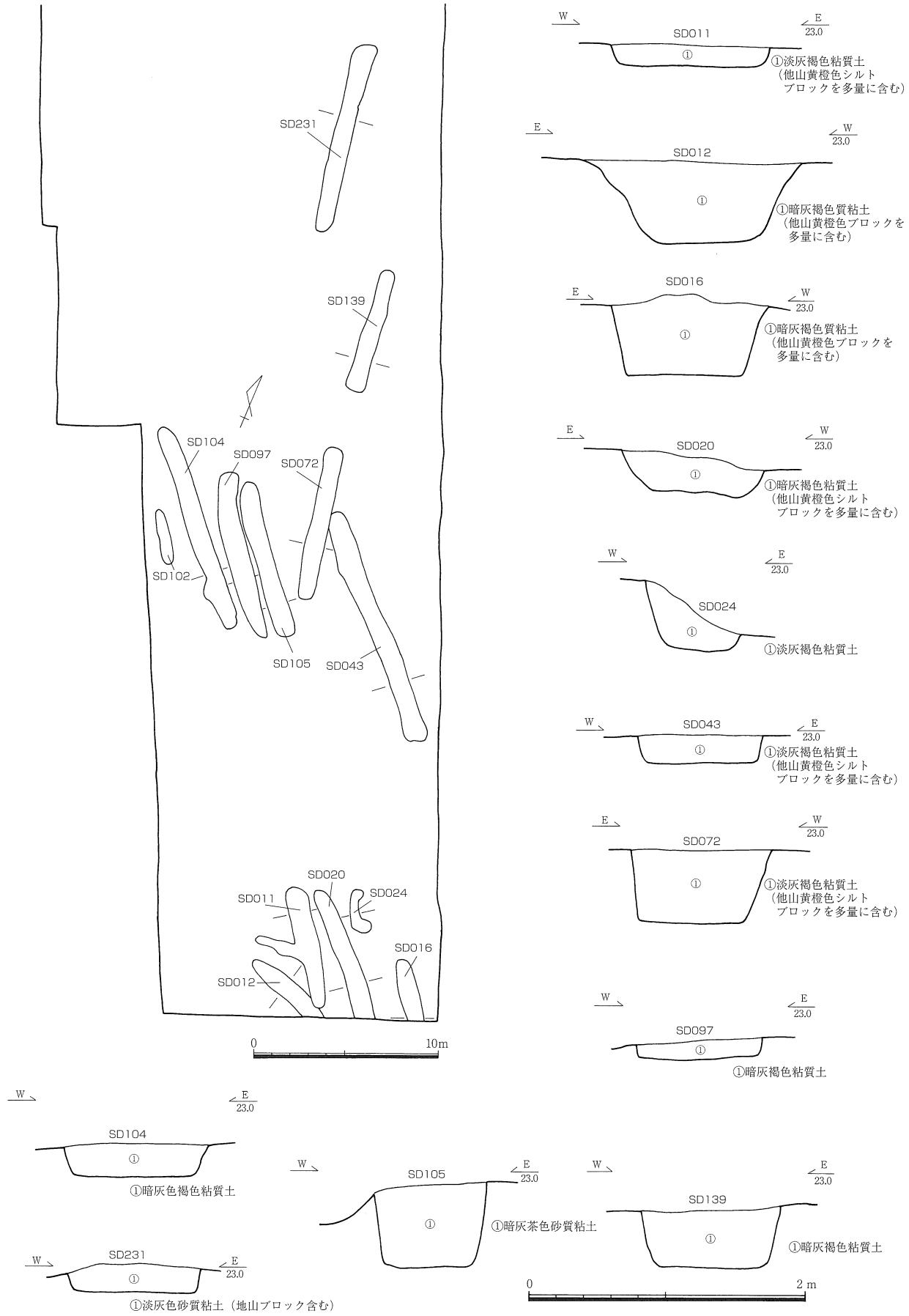


Fig.22 塹壕実測図・土層観察図 (1/40・1/300)

灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD002及びSD043を切る。遺物は弥生土器片、須恵器片、サヌカイト剥片が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係、埋土の状況から、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

SD097 (Fig.22、Pla.36)

調査区東付近で検出した南東から北西に伸びる溝状遺構で、長さ9m、幅1.2m、深さ0.14mである。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD001を切る。遺物は弥生土器片、須恵器片、サヌカイト剥片、銅板、ガラス片等が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係から、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

SD104 (Fig.22、Pla.36)

調査区東付近で検出した南東から北西に伸びる溝状遺構で、長さ11.5m、幅1.1m、深さ0.24mである。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD001を切る。遺物は弥生土器片、須恵器片、瓦器片、国産陶器片、ガラス片等が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係から、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

SD105 (Fig.22、Pla.37)

調査区東付近で検出した南東から北西に伸びる溝状遺構で、長さ8.6m、幅1.1m、深さ0.6mである。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD001を切る。遺物は弥生土器片、須恵器片、サヌカイト剥片、煉瓦等が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係から、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

SD139 (Fig.22、Pla.37)

調査区中央付近で検出した南西から北東に伸びる溝状遺構で、長さ6.8m、幅1.1m、深さ0.43mである。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SD002とSH180を切る。遺物は弥生土器、須恵器が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係から、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

SD231 (Fig.22、Pla.38)

調査区中央付近で検出した南西から北東に伸びる溝状遺構で、長さ10.5m、幅1.2m、深さ0.21mである。埋土は淡灰褐色粘質土で、黄橙色シルトブロックを多く含む。埋土の状況から掘り返した土を、さほど時間経過なく埋め戻したと考えられる。SH230を切る。遺物は弥生土器、須恵器片、土師器片、染付、焼土が出土した。出土遺物と遺構の切り合い関係から、埋没時期は明治時代以降～昭和時代初頭の段階と考えられる。

【引用・参考文献】

柿田富造 1992 「「土管」使用的変遷」『常滑市民俗資料館研究紀要』V 常滑市教育委員会

柿田富造 1994a 「「土管」製作技術の変遷」『常滑市民俗資料館研究紀要』VI 常滑市教育委員会

柿田富造 1994b 「わが国の土管の歩み」『土管の歴史展』 常滑市民俗資料館

蔵本晋司 1999 「弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について」『中間西井坪遺跡』 II 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

—

蔵本晋司 1999 『川津川西遺跡・飯山一本松遺跡』 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

角南聰一郎 2000 「「円錐塊充填法」に関する予察」『永野原遺跡』 高山村教育委員会

松本和彦 2000 「松並・中所遺跡竪穴住居について」『松並・中所遺跡』 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

(3) 出土遺物

弥生時代

住居跡

SH170出土遺物 (Fig.23、Pla.39)

弥生土器

高杯 (1) 口縁部のみ残存する。内外面ともに精緻なミガキを施す。口縁形態は鉤手状を呈する。柱穴dより出土。

鉢 (2) 口縁部のみ残存し、口縁部端部は肥厚する。内外面ともに精緻なミガキを施す。外面には形骸化した二条の凹線が認められる。柱穴dより出土。

石製品

小玉 (3) 石材は緑泥片岩で、直径3mm、内孔径1mm、厚さ3mmである。表面は丁寧に磨き上げられる。孔は錐状工具によって穿孔されたものと考えられる。覆土中より出土。

ガラス製品

小玉 (4・5) 4は直径4mm、内孔径2mm、厚さ2.5mmで覆土中より出土。5は直径3mm、内孔径1.5mm、厚さ3mmで

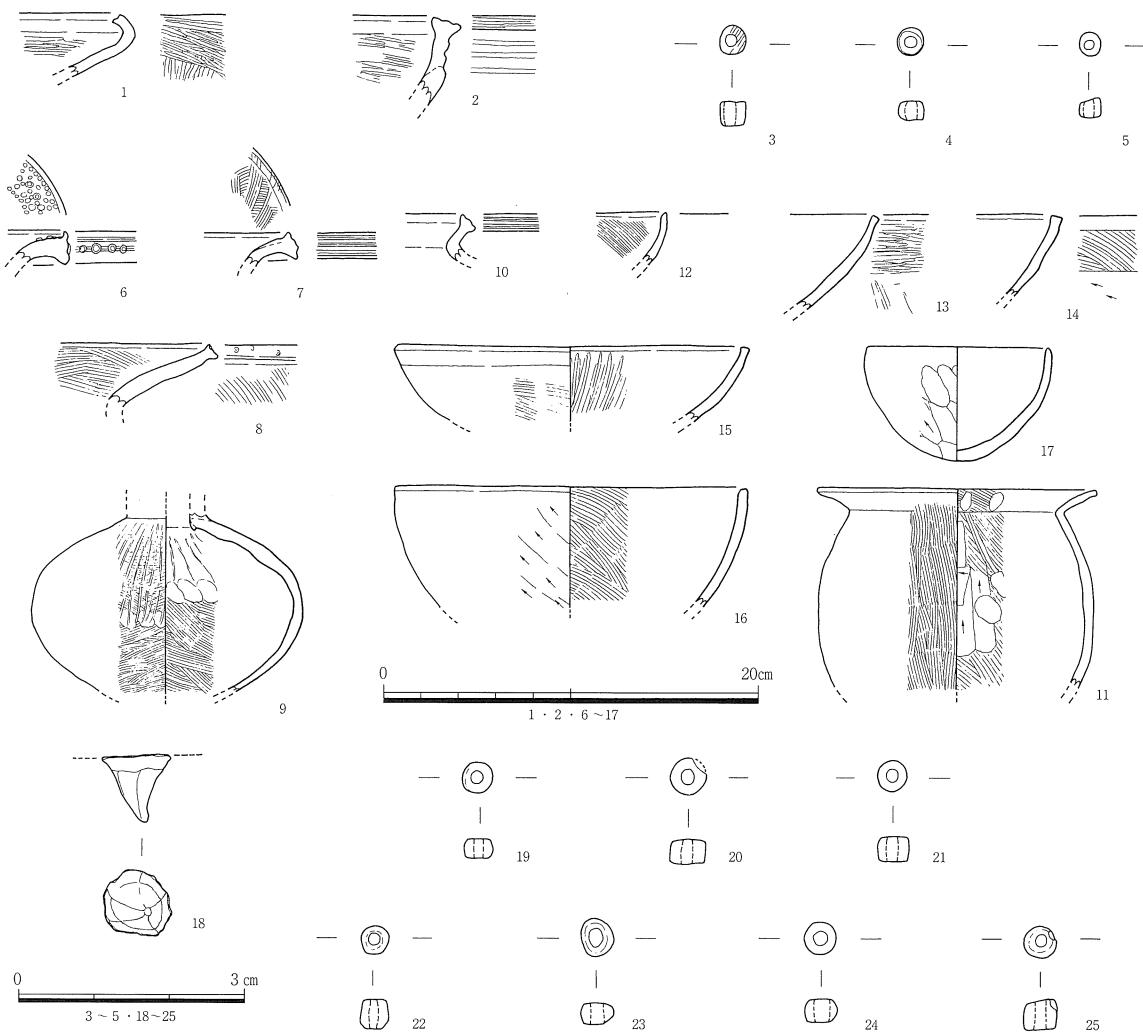


Fig.23 SH170 · 180出土遺物実測図 (1/1 · 1/4)

柱穴jより出土。色調はいずれもスカイブルーである。特に27は1mm大以下の気泡が若干観察される。

SH180出土遺物 (Fig.23、Pla.39・40)

弥生土器

壺 (6~8) 6は口縁部の細片で口縁部外面に凹線文を施し、円形に指突した後に、球形の粘土を嵌め込み浮文状にしている。内面も外面同様に浮文状を呈し、竹管文でも飾る。壁溝出土。7は口縁部片で口縁部外面に凹線を施し、内面には櫛原体により斜格子文を描く。覆土中より出土。8は口縁端部が外傾する広口壺の破片で、内外面ともハケ調整を施し、口縁端部は竹管文で飾る。覆土中より出土。9は長頸壺の胴部で、胴部最大径14.2cmである。外面はハケ調整後に縦方向のまばらなミガキをし、内面はハケ調整し、上半部は指頭圧痕を残す。中央土坑eより出土。

甕 (10・11) 10は口縁部片で、口縁部外面に二条の凹線を施す。柱穴aより出土。11は口径14.8cm、残存高10.4cmである。口縁部は「く」字状に外傾し、胴部内外面ともにハケ調整し、内面はハケ後板状工具によりケズリを施す。覆土中より出土。

鉢 (12~17) 12小型鉢の口縁部片で、口縁部内面にハケ調整を施す。覆土中より出土。13は口縁部のみ残存し、口縁端部は面取りされ外面に精緻なヘラミガキを施す。中央土坑eより出土。14は口縁部片で、口縁端部は面取りされ外面はハケを施し、下半部はハケ後ヘラケズリされる。柱穴aより出土。15は口縁端部は面取りされ外面はハケを施し、内面はハケ後縦方向の暗文状ミガキをする。口径18.2cm、残存高4cmである。覆土中より出土。16は内面をハケ調整し、外面は斜め下から上方向にケズリあげる。口径18.6cm、残存高6.5cmである。柱穴cより出土。17はほぼ完形の小型鉢で、口径9.8cm、器高6.1cmである。内外面ともにナデ調整し、外面胴部下半はケズリ状を呈する。胎土に雲母を多く含む。

土製品

円錐塊 (18) 円錐形の粘土塊で、小型高杯の杯部と脚部をいわゆる「円盤充填技法」によって接合する際に用いられたものが剥離したと考えられる。高さ0.9cm、長さ0.9cmである。覆土中より出土。

石製品

小玉 (19~21) 石材はいずれも緑泥片岩で、直径4~5mm、内孔径1.5~2mm、厚さ3~4mmである。表面は丁寧に磨き上げられる。孔は錐状工具によって穿孔されたものと考えられる。いずれも覆土中より出土。

ガラス製品

小玉 (22~25) 直径4~5mm、内孔径1.5~2mm、厚さ3~5mmである。色調は22、24がコバルトブルー、23、25がスカイブルーである。特に25は1.0mm大以下の気泡が比較的多く観察される。いずれも覆土中より出土。

SH230出土遺物 (Fig.24、Pla.40~43)

弥生土器

壺 (1~6) 1は口縁部が外傾し、横方向の強いヨコナデを施す。覆土中より出土。2は端部がやや拡張し外面にハケ調整を施す。覆土中より出土。3は口縁部が断面方形を呈し、横方向の強いヨコナデを施す。覆土中より出土。4は口縁部外面に浮文を付した後、棒状四条の凹線を施す。頸部外面には指頭突帯を貼り付ける。覆土中より出土。5は底部で底径3.8cmで、外面はハケ調整する。覆土中より出土。6は底部片で底径8.2cmである。内外面ともヘラミガキを施す。覆土中より出土。

甕 (7~14) 7は口縁部片で外面に二条の凹線を施す。覆土中より出土。8は口縁部片で三条の凹線を施す。覆土中より出土。9は薄手の甕の口縁部片で、胴部内面は図上向かって左から右方向にヘラケズリする。覆土中より出土。10は底部片で外面はハケ調整を施す。覆土中より出土。11は口径15.8cmで口縁部は水平に外側に拡張

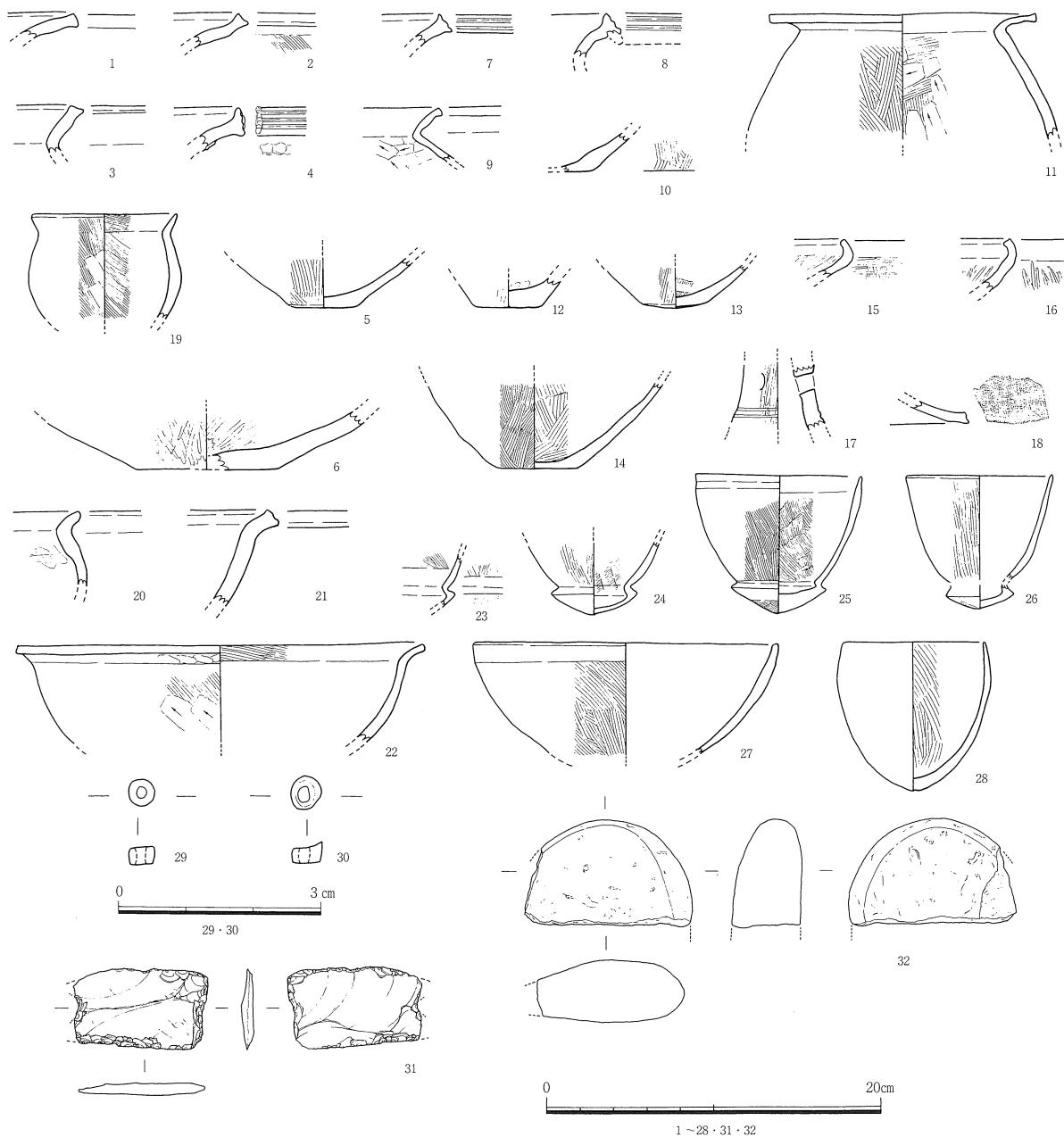


Fig.24 SH230出土遺物実測図 (1/1・1/4)

する。胴部外面はハケ調整し、内面はハケ後ヘラケズリを施す。12は小型甕の底部で、底径4.2cmで外面は後ナデ調整を施す。覆土中より出土。13は底部片で底径3.8cmで、内外面ともハケ調整する。覆土中より出土。14は胴部下半から底部片で底径4.8cmである。内外面とも縦方向主体にハケ調整する。外面には煤の付着が認められる。胎土には角閃石を多く含む。中央土坑e出土。

高杯 (15~18) 15・16はいずれも口縁部のみ残存する。内外面ともに精緻なミガキを施す。口縁形態は鉤手状を呈する。いずれも覆土中より出土。17は脚柱部片で、外面下部に二条の沈線が認められる。円形の透孔を穿つ。覆土中より出土。18は脚裙部片で外面にヘラ状工具によって線刻がされている。胎土に雲母を多く含む。覆土中より出土。

鉢 (19~28) 19~22は口縁部が短く外傾するタイプの鉢である。19は小型のもので口径8.6cmである。内外面ともにハケ調整をする。胎土に雲母を多く含む。中央土坑e出土。20は口縁部片で口縁端部を強いヨコナデす

る。内面には指頭圧痕が認められる。覆土中より出土。21は口縁部片でやや粗い胎土である。内外面をナデ調整して仕上げる。覆土中より出土。22は口径24cmで内外面ともハケ調整し、外面下半部はヘラケズリを施す。柱穴cより出土。

23~26は口縁部が特徴的に長く伸びて、ゆるやかに外傾するタイプのもので、いわゆる小型丸底土器と呼ばれるものである。23は胴部片で、内外面とも非常に細かいハケ調整を施す。中央土坑e出土。24は下半部片で内外面とも非常に細かなハケを施す。覆土中より出土。25はほぼ完形で内外面には細かいハケを施す。内面底部付近に黒斑が認められる。口径9.8cm、器高8.2cmである。覆土中より出土。26は口縁部片と底部片で図上復元した。外面は細かいハケが認められる。表面は劣化しており遺存状況は悪い。覆土中より出土。27は椀形のタイプである。口径17.5cm、残存高6.6cmである。内面はナデ調整をし、外面はハケ調整後にナデをする。外面には黒斑が認められる。覆土中より出土。28は飯蛸壺形のもので、口縁部端部が垂直に立ち上がる。外面ナデ、内面はハケ調整を施す。覆土中より出土。

石製品

小玉（29） 石材は緑泥片岩で、直径4mm、内孔径1mm、厚さ2.5mmである。表面は丁寧に磨き上げられる。孔は錐状工具によって穿孔されたものと考えられる。覆土中より出土。

ガラス製品

小玉（30） 直径5mm、内孔径2mm、厚さ3mmである。色調はコバルトブルーを呈する。1.0mm大以下の気泡が多く観察される。覆土中より出土。

石器

打製石庖丁（31） 長さ5cm、幅8cm、厚さ0.8cm、重量40.3gである。サヌカイト製で刃部及び背部には刃ツブシ調整が施される。覆土中より出土。

台石（32） 長さ6.4cm、幅9.8cm、厚さ4.5cm、重量349.3gである。砂岩製で表裏面に敲打痕が認められる。覆土中より出土。

SH370出土遺物（Fig.25~27、Pla.43~51）

弥生土器

壺（1~5・38） 1は口縁部の細片で、口縁部が上下方向に拡張し内傾するものである。内面に暗文状のミガキをし、外面はハケ後ナデをする。土器群出土。2は口縁部が短く外傾するもので、外面はやや細かいハケ、内面は粗いハケを施す。土器群出土。3・4は広口壺でいずれも口縁部が水平に伸びるタイプで口頸部が残存する。内面は斜め方向に、外面は縦方向にハケ調整する。3は口径24cm、残存高9.7cmである。4は口径22.4cm、残存高9.4cmである。いずれも土器群出土。5は口縁部が上下に拡張するタイプの壺で、口縁部外面には鋸歯文を描く。同一個体から図上復原をした。口径26.4cm、復元高29.0cm、底径5.4cm、胴部最大径31.8cmである。頸部外面に突帯を貼り付け刻み目を施す。土器群出土。38は口縁部片で、端部が内傾するタイプになるものと思われる。外面には鋸歯文を描き、頸部外面は粗いヘラミガキをする。柱穴aより出土。

甕（14~23・44・45） 14は大型のもので、口径17.4cm、残存高11.4cmである。口縁部は「く」字状を呈し、胴部外面はハケ調整、内面はハケ後これをナデ消している。土器群出土。15は口径13cmで口縁部は「く」字状を呈する。胴部外面から口縁部付近までハケ調整をし、胴部内面は下から上方向にヘラケズリを施す。土器群出土。16は小型の甕で、口径7.6cmで口縁部はやや外傾する。外面は細かなハケをし、内面は丁寧なナデを施す。土器群出土。17は底部5.9cmで、底径3.4cmである。内外面ともハケ調整を施す。土器群出土。18は口径15.8cmで、口縁部は「く」字状を呈する。外面は口縁部まで細かなハケを施し、口縁部内面は細かな、胴部は粗いハケ調整

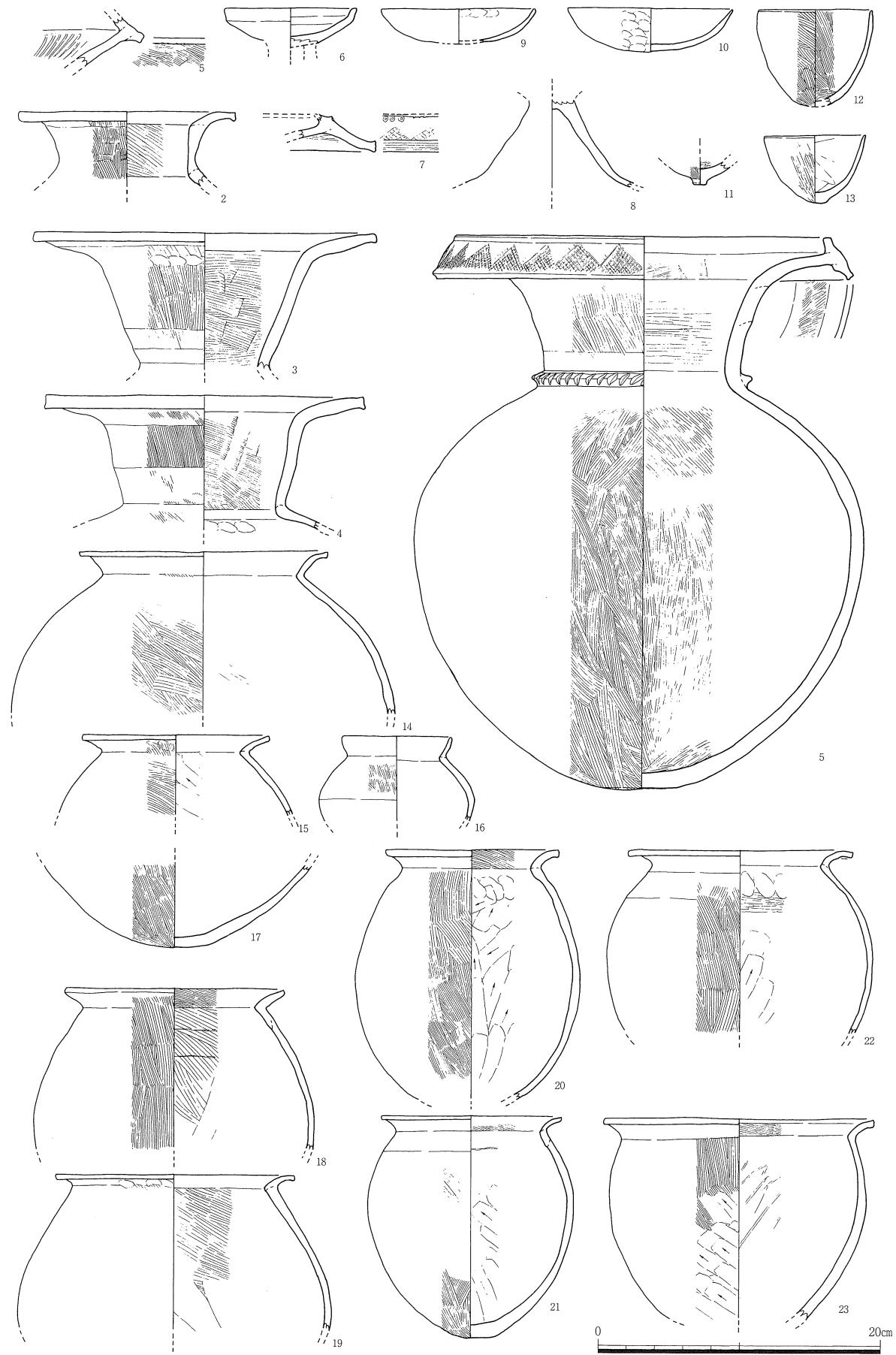


Fig.25 SH370出土遺物実測図 (1) (1/4)

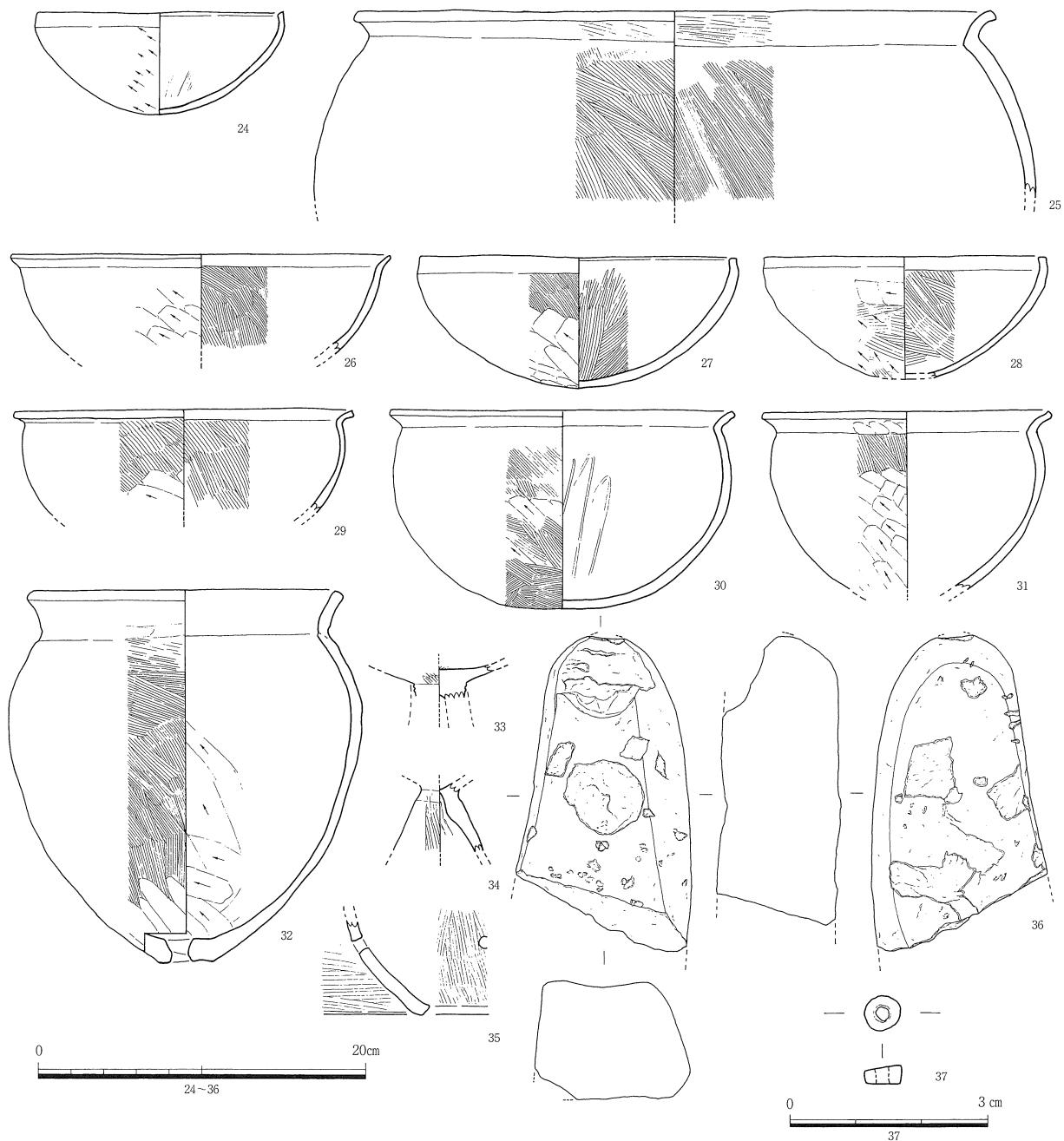


Fig.26 SH370出土遺物実測図 (2) (1/1・1/4)

をする。粘土紐の接合痕が観察できる。土器群出土。19は口径16.8cm、口縁部は水平に横方向に伸びる。胴部外面はハケ後ナデ調整し、内面はハケ調整の痕跡が残る。土器群出土。20は胴部下半部付近まで残存し、口径12.1cm、胴部最大径15.8cm、残存高17.2cmである。口縁部は「く」字状を呈する。胴部外面は粗いハケ後細かなハケをする。内面は下から上方向にヘラケズリをする。頸部内面付近に指頭圧痕が認められる。土器群出土。21は図上復元したもので、口径12.7cm、復元高15.5cm、底径2.8cmである。外面はハケ調整、内面は下から上方向のケズリを施す。土器群出土。22は下半部を欠く。口径15.9cm、残存高12.9cmである。外面はハケ調整、内面は下から上方向のケズリをする。頸部内面付近に指頭圧痕が認められる。土器群出土。23は甕に分類したが、鉢としても支障ない資料である。口径19cm、口縁部内面に細かなハケが残り、胴部内面には暗文状のミガキが認められる。外面はハケ後胴部下半は下から上方向のヘラケズリを施す。土器群出土。44はいわゆるタタキ甕である。

口径14.8cm、口縁部は「く」字状を呈し、胴部外面はタタキ後やや細かなハケをする。内面はナデ調整をする。覆土中より出土。45は口径16.2cmで、胴部外面は細かなナデ調整をし、内面は丁寧なナデ調整をする。柱穴hより出土。

高杯（6～8・33～35・46） 6は小型高杯の杯部のみで、口径9.2cmである。表面は劣化しており調整は不明瞭である。土器群出土。7は口縁部片で、口縁部は拡張し鋸歯文を描く。器台の可能性もある。土器群出土。8は脚部のみ残存し、器面の劣化が激しく調整は不明瞭である。土器群出土。33は脚柱部片で、外面にミガキが僅かに認められる。覆土中出土。34は小型高杯の脚柱部で外面には縦方向の精緻なミガキを施す。覆土中出土。35は脚裾部片で、外面はやや細かなハケを内面は粗いハケを施す。円形の透孔を穿つ。覆土中より出土。46は脚裾部片で、内外面ともハケ調整をし、円形の透孔を穿つ。覆土中より出土。

鉢（9～13・24～31・39～43） 9は小型の鉢で、口径10.8cm、残存高2.8cmである。内外面ともナデ調整をする。土器群出土。10は小型の鉢で口径11.6cm、残存高3.1cmである。内外面ともナデ調整をする。外面には指頭圧痕が残る。土器群出土。11は小型精製鉢の底部で、底部が突起状を呈するものである。内外面とも細かなハケ調整を施す。覆土中より出土。12・13は飯蛸壺形の鉢で、12は口径8cm、器高6.8cmで内外面は細かいハケ調整をする。13は口径7.1cm、器高4.8cmで外面はハケ調整し、内面は板状工具によるナデが認められる。いずれも土器群出土。24は椀形のもので、口径15cm、器高6.3cmである。外面は下から上方向にヘラケズリし、内面はハケ後ナデ調整をする。土器群出土。25は大型の鉢で口径38.6cmである。口縁部は短く外傾し、内外面ともに細かいハ

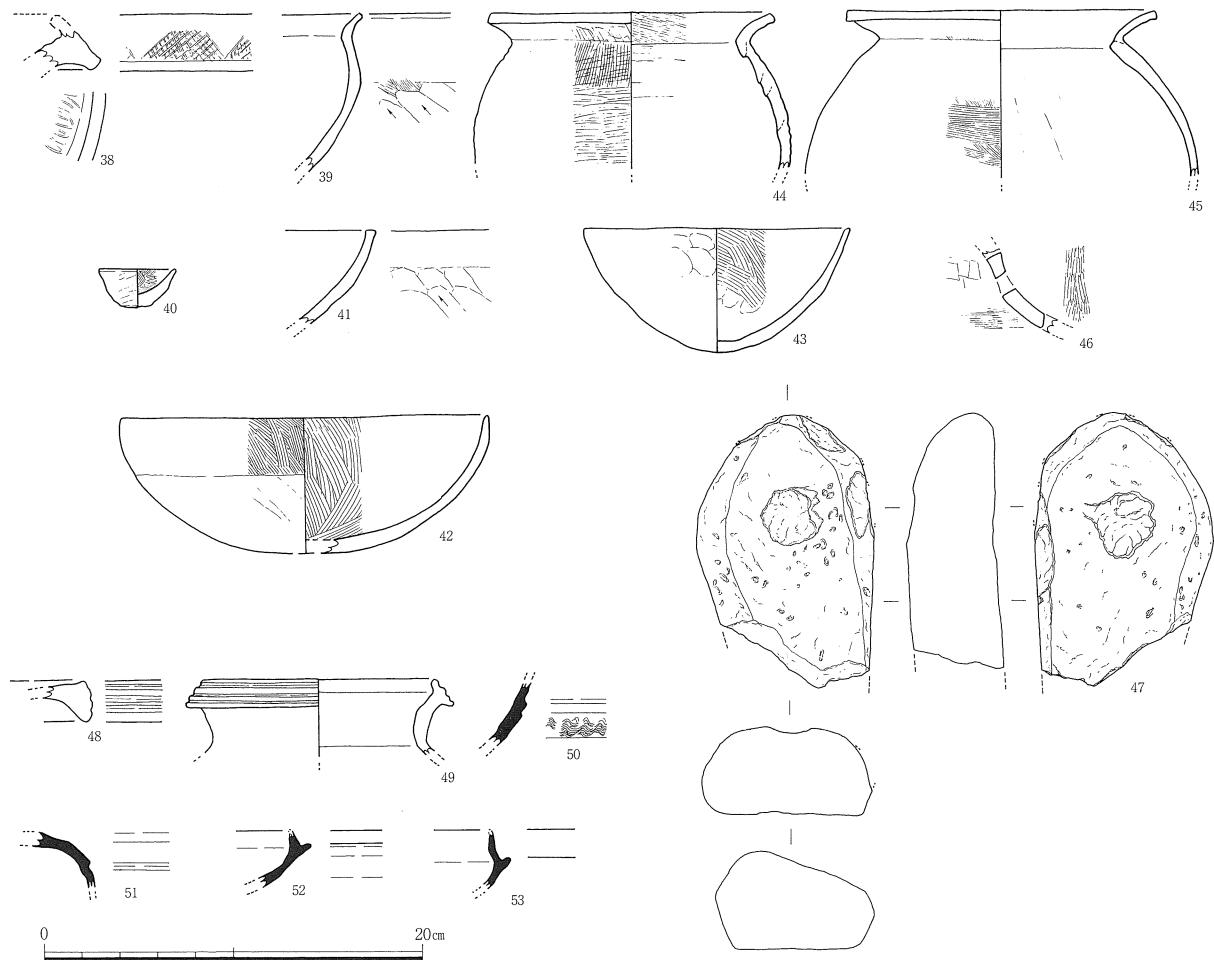


Fig.27 SH370・371遺物実測図（1/4）

ケを施す。土器群出土。26・29~31は口縁が短く外傾するタイプのもので、いずれも外面は細かいハケ調整後に下から上方向にヘラケズリをする。内面はハケ後ナデ調整をする。30の内面には暗文状の細いミガキが認められる。26は口径23cm、29は口径20.6cmで、30は口径20.8cm、器高12.1cm、31は口径17.4cmである。いずれも土器群出土。27・28は楕形のもので、内面は細かなハケをし、外面はハケ後ケズリを施す。27口径17.2cm、器高8cm、28は口径17.1cm、残存高7.3cmである。いずれも土器群出土。39は口縁部が短く外傾タイプで、内面はナデ、外面はハケ後ケズリを施す。柱穴gより出土。40はミニチュアの鉢で、完形である。口径4.1cm、器高2cm、底径1.6cmで外面にタタキが認められ、内面はハケ調整をする。柱穴kより出土。41は楕形の鉢で、口縁端部は面取りする。内面はナデ、外面はヘラケズリを施す。柱穴hより出土。42は楕形の鉢で、口径19.4cm、器高7.3cmで、外面はハケ後ナデをし、内面はやや粗いハケを施す。柱穴sより出土。43は小型鉢で口径14cm、器高6.6cmである。内面はハケ調整し外面はナデを施す。柱穴sより出土。

有孔土器（32）底部に一個の焼成前穿孔を穿ち、図上復元したものである。口径18.6cm、復元器高22.8cmである。外面は細かいハケ調整し、内面は下から上方向にヘラケズリを施す。土器群出土。

石製品

小玉（37）直径4mm、内孔径1mm、厚さ2.5mmである。石材は緑泥片岩である。覆土中より出土。

石器

台石（36・47）36は長さ19.4cm、幅10.7cm、厚さ7.4cm、重さ2059.2gである。表裏面に敲打痕が認められる。土器群出土。47は長さ14.6cm、幅9.4cm、厚さ5.2cm、重さ1003.5gである。表裏面及び側面に敲打痕及び被熱痕が認められる。柱穴gより出土。いずれも砂岩製である。

SH371出土遺物（Fig.27、Pla.51）

弥生土器

壺（48・49）48は口縁部片で外面に三条の凹線を施す。柱穴aより出土。49は口縁部片で、口縁部は短く外反し口縁部外面に凹線文を施す。口径12.2cmである。柱穴bより出土。

須恵器

高杯（50）胴部片と考えられ、外面には波状文を描く。覆土中より出土。

杯（51~53）51は杯蓋片で天井部と口縁部の境界に稜を有する。覆土中より出土。52は杯身片で口縁部のみ残存する。受部は短く立ち上がりやや内傾する。覆土中より出土。53は杯身片で、口縁部のみ残存し口縁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土中より出土。

土製品

焼土塊（Pla.63-a、b）土坑内に投棄された状態でコンテナ約1箱分の焼土が出土した。造付竈の一部と考えられる。

掘立柱建物跡

SB250出土遺物（Fig.28、Pla.52）

弥生土器

壺（1~7）1は口縁部片で外面に三条の凹線を施す。柱穴bより出土。2は小型壺の口縁部片で、口縁部外面に円形浮文を貼り付け、その上から竹管文を施す。柱穴eより出土。3は大型壺の口縁部で、器台の可能性もある。外面には緩やかな四条の凹線を施す。柱穴gより出土。4は底部片で、底径13.6cmである。内面はケズリ後粗いミガキをし、外面は精緻なミガキを施す。柱穴cより出土。5は底部片で、底径7cmである。外面はヘラミガキし、内面はケズリ後ナデを施す。柱穴fより出土。6は底部のみ残存し底径である。外面は丁寧なミガキをし、内面は

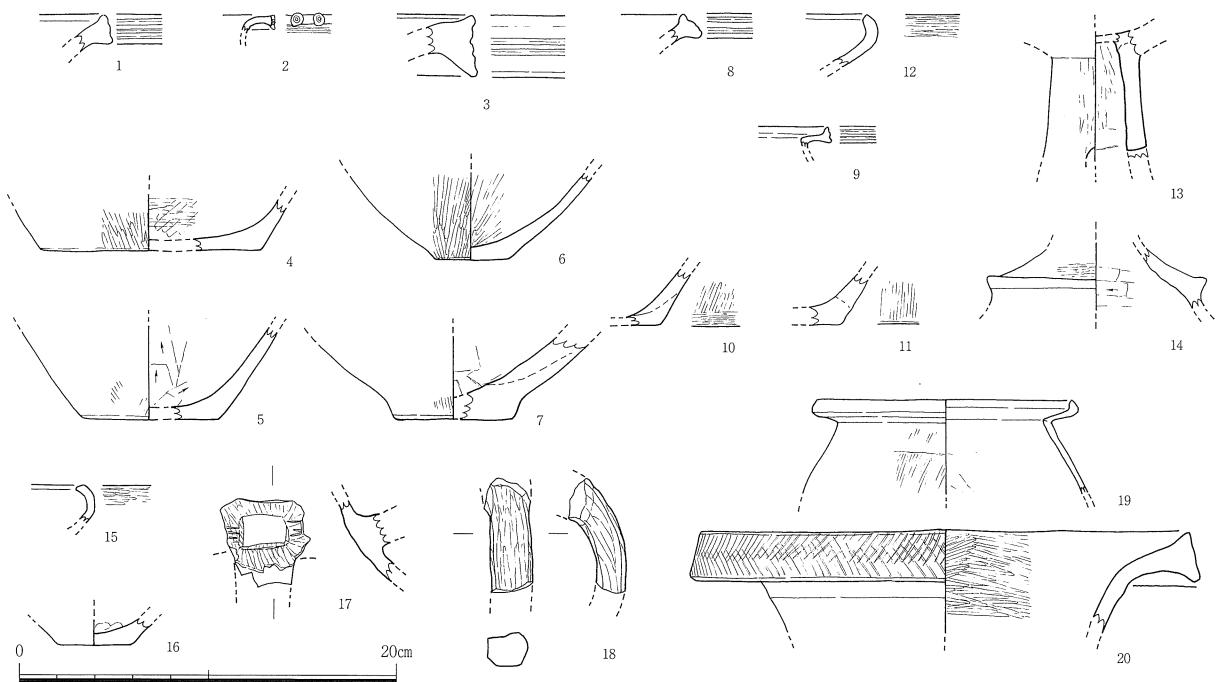


Fig.28 挖立柱建物出土遺物実測図 (1/4)

やや粗ミガキをする。柱穴aより出土。7は底部部片で底径である。外面はナデを施し二次焼成を受ける。内面には板状工具の痕跡が認められる。柱穴eより出土。

甕 (8~11) 8は口縁部片で、外面に二条の凹線を施す。柱穴aより出土。9aは薄手のもので、口縁部のみ残存する。口縁は上方に拡張し垂直に立ち上がる。外面に二条の凹線を施す。柱穴aより出土。10は底部片で、外面にハケをする。柱穴fより出土。11は底部片で、内面はナデ、外面はハケをする。柱穴bより出土。

高杯 (12~14) 、外面に1314 12は口縁部片で口縁部のみ残存し、口縁部は鉤手状を呈する。外面は精緻なミガキを施す。柱穴dより出土。13は脚柱部片で、外面に縦方向のミガキが認められる。柱穴gより出土。14は脚裾部片で、段を有するものである。外面にはハケ調整をし、内面は横方向にヘラケズリを施す。柱穴cより出土。

SB330出土遺物 (Fig.28、Pla.52)

弥生土器

壺 (20) 口縁部が残存し、口径25.6cmである。内面は横方向にミガキをし、口縁部外面は羽状に刻み目を施す。柱穴aより出土。

SB350出土遺物 (Fig.28、Pla.52)

弥生土器

甕 (16) 底部片で、底径4cmである。内面に指頭圧痕が認められる。柱穴fより出土。

高杯 (15) 口縁部片で、鉤手状を呈する。外面は横方向にミガキをする。柱穴fより出土。

水差 (17・18) 17は把手部分で、外面は精緻なヘラミガキを施す。把手部付け根付近に沈線を三条施す。柱穴fより出土。18は把手のみ残存する。表面はナデを施す。柱穴fより出土。

SB380出土遺物 (Fig.28、Pla.52)

弥生土器

甕 (19) 口径13.4cmで、口縁端部は摘み上げられる。外面はハケ調整し、内面はナデを施す。柱穴cより出土。

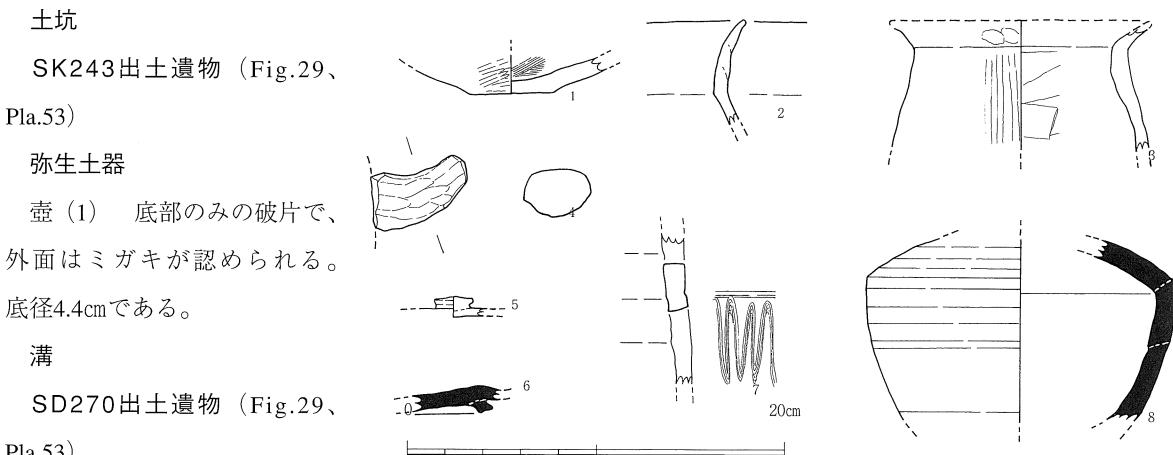


Fig.29 SK243・SD270出土遺物実測図 (1/4)

壺 (2・3) 2は頸部がゆるやかに屈曲し、表面はナデを施す。3は粗製の壺で口縁部はやや外側に屈曲する。
外面は粗いハケをし、内面には工具痕が認められる。

把手 (4) 把手部のみ残存する。表面全体をナデ調整する。

杯 (5) 蓋の宝珠つまみ部分である。

須恵器

壺 (8) 長頸壺の胴部片である。表面に粘土紐の接合痕が認められる。

杯 (6) 底部片である。高台を貼り付ける。

器台 (7) 胴部の破片で、方形の透孔を穿つ。外面には波状文を施す。

その他の遺構

SX022出土遺物 (Fig.30、Pla.53)

須恵器

高杯 (1) 脚部の残存する。脚が低いタイプである。残存高4.1cmである。

SX040出土遺物 (Fig.30、Pla.53)

須恵器

杯 (2) 底部片で、底径9.3cmである。高台部は貼り付けている。

SX069出土遺物 (Fig.30、Pla.53)

弥生土器

壺 (3) 胴部上半部以上が欠損し、底径6.1cmである。胴部がタマネギ形になるタイプの壺と考えられる。内
面は丁寧にハケ調整し、外面は密なミガキを施す。

SX108出土遺物 (Fig.30、Pla.54)

弥生土器

壺 (4) 口径17.8cmで口縁部外面に退化した二条の凹線を施す。

SK109出土遺物 (Fig.30、Pla.53)

須恵器

壺 (5) 口縁部片で、口縁端部は肥厚し外面には波状文を施す。

杯 (6) 杯蓋で、口径12.2cm、器高3.5cmである。

石器

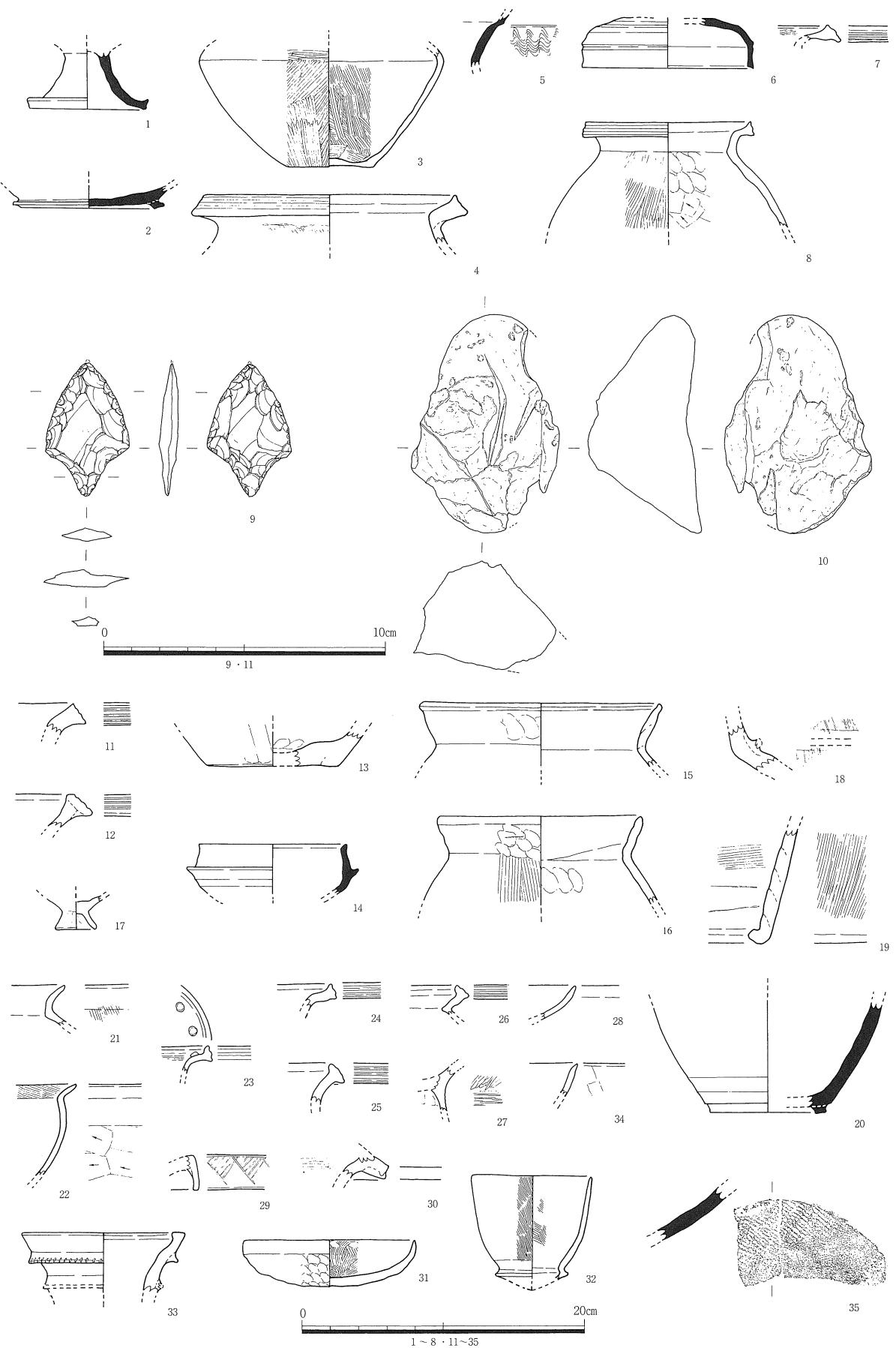


Fig.30 各遺構出土遺物実測図 (1/2・1/4)

石鏸（9） 打製石鏸である。完形で長さ4.7cm、幅3cm、厚さ0.6cm、重さ6.9gである。石材はサヌカイトである。

SX128出土遺物 (Fig.30、Pla.54)

弥生土器

壺（8） 口頸部から胴部までが残存し、口径11.6cmである。口縁部外面は二条の凹線を施し、外面はハケ調整、内面は胴部付近をヘラケズリし、頸部付近には指頭圧痕が認められる。

甕（7） 口縁部片で、外面に二条の凹線を施す。

石器

砥石（10） 軽石製で、一部欠損する。長さ7.7cm、幅5.2cm、厚さ4cm、重さ26.9gである。表面には「V」字状を呈する溝が認められる。

SX174出土遺物 (Fig.30、Pla.54)

弥生土器

壺（13） 底部片で、底径4.2cmである。内外面ともナデ調整をする。

甕（11・12） 11・12は口縁部の細片で、いずれも口縁部は短く外反し口縁部外面に凹線文を施す。

SX175出土遺物 (Fig.30、Pla.54)

土師器

甕（15・16） いずれも口縁部片で、口縁部緩やかに外反する。15は口径16.6cmで、口縁部外面に指頭圧痕跡が認められる。16は口径14.2cmで外面に粗いハケを施し、口縁部外面と頸部内面付近に指頭圧痕が残る。

須恵器

杯（14） 口径10.4cm、受部径12.4cmである。口縁端部に沈線を有する。

SX190出土遺物 (Fig.30、Pla.55)

弥生土器

鉢（17） 底部に脚台を有するもので、底径2.8cmである。全体的に被熱を受けており、形状などより、製塙土器と考えられる。

SX210出土遺物 (Fig.30、Pla.55)

弥生土器

壺（18） 頸部の細片で、頸部外面に突帯を貼り付け、外面には櫛描で直線と鋸歯文状の文様を表現する。

土師器

甕（19） 底部片で、底部端部を内面に折り返す。外面は縦、内面は横にそれぞれ粗いハケを施す。

須恵器

壺（20） 底部から胴部下半が残存する。底径8.2cmである。底面には高台を貼り付ける。

SX215出土遺物 (Fig.30、Pla.55)

弥生土器

甕（21） 口縁部の細片で、口縁はやや外傾し、外面はハケ調整する。

鉢（22） 口縁部片で、口縁部内面には横方向のハケ、胴部内面にはハケ後ナデ調整をする。胴部外面はハケ後ケズリを施す。

SX240-a出土遺物 (Fig.30、Pla.55)

弥生土器

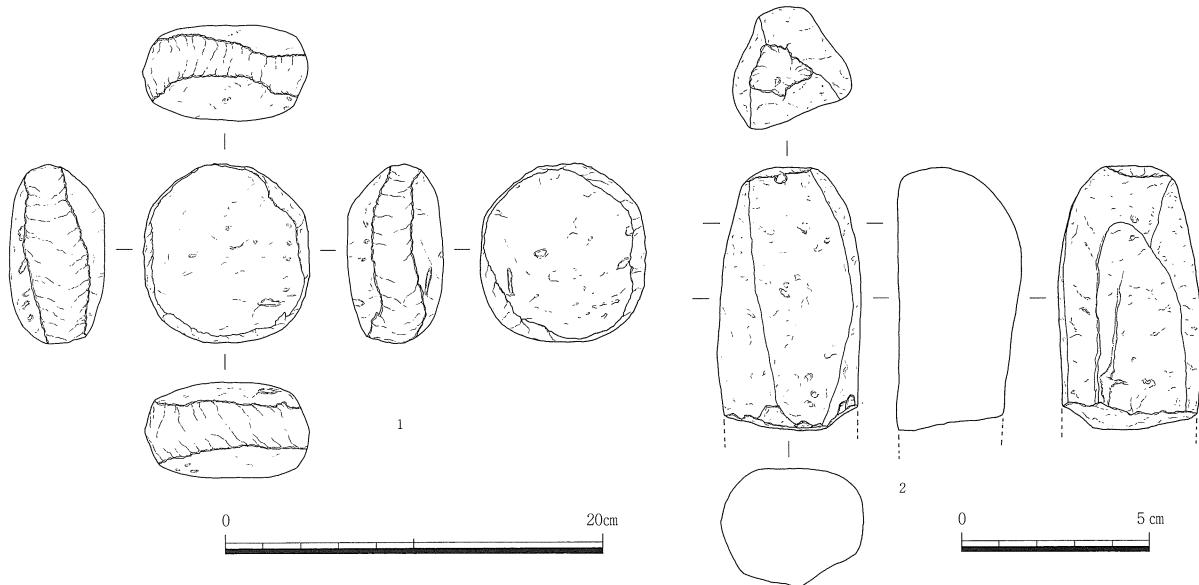


Fig.31 SX287出土遺物実測図 (1/2・1/4)

壺 (23) 口縁部片で、口縁部内面には円形浮文を付し、口縁部外面には二条の凹線文を施す、

甕 (24~26) 口縁部の細片で、いずれも口縁部外面に三条の凹線を施す。

高杯 (27) 基部片で、外面はナデ調整を施し、六条の沈線を巡らせる。

SX287出土遺物 (Fig.30・31、Pla.55・56)

弥生土器

壺 (29・30) 29は口縁部片で、外面に鋸歯文を描く。30は内傾するタイプの壺口縁部の細片で、内面にはやや粗いミガキが認められる。

鉢 (28・31・32) 28は楕形のタイプの細片で、31も楕形タイプで、口径12cm、器高3.3cmである。内面には細かいハケが施され、外面には指頭圧痕が認められる。32小型丸底土器では口径12.2cmである。内外面とも丁寧に細かいハケが施される。

石器

敲石 (1・2) 1は長さ9.5cm、幅8.8cm、厚さ5.1cmである。側面に擦痕が認められ、擦石的な用途が想定される。石材は砂岩である。2は下半部が欠損し、残存長7cm、幅3.8cm、厚さ3.2cmである。上端に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。

SX349出土遺物 (Fig.30、Pla.55)

弥生土器

壺 (33) 口縁部片で、口径11.4cmである。外面に二条の突帯を貼り付けて、刻目を施す。

SX358出土遺物 (Fig.30、Pla.55)

土師器

杯 (34) 口縁部の細片で、古代のものと考えられる。

SX366出土遺物 (Fig.30、Pla.55)

須恵器

甕 (35) 底部片で、外面には格子目のタタキ痕が認められる。全体的に被熱を受け、色調は橙色に変化している。

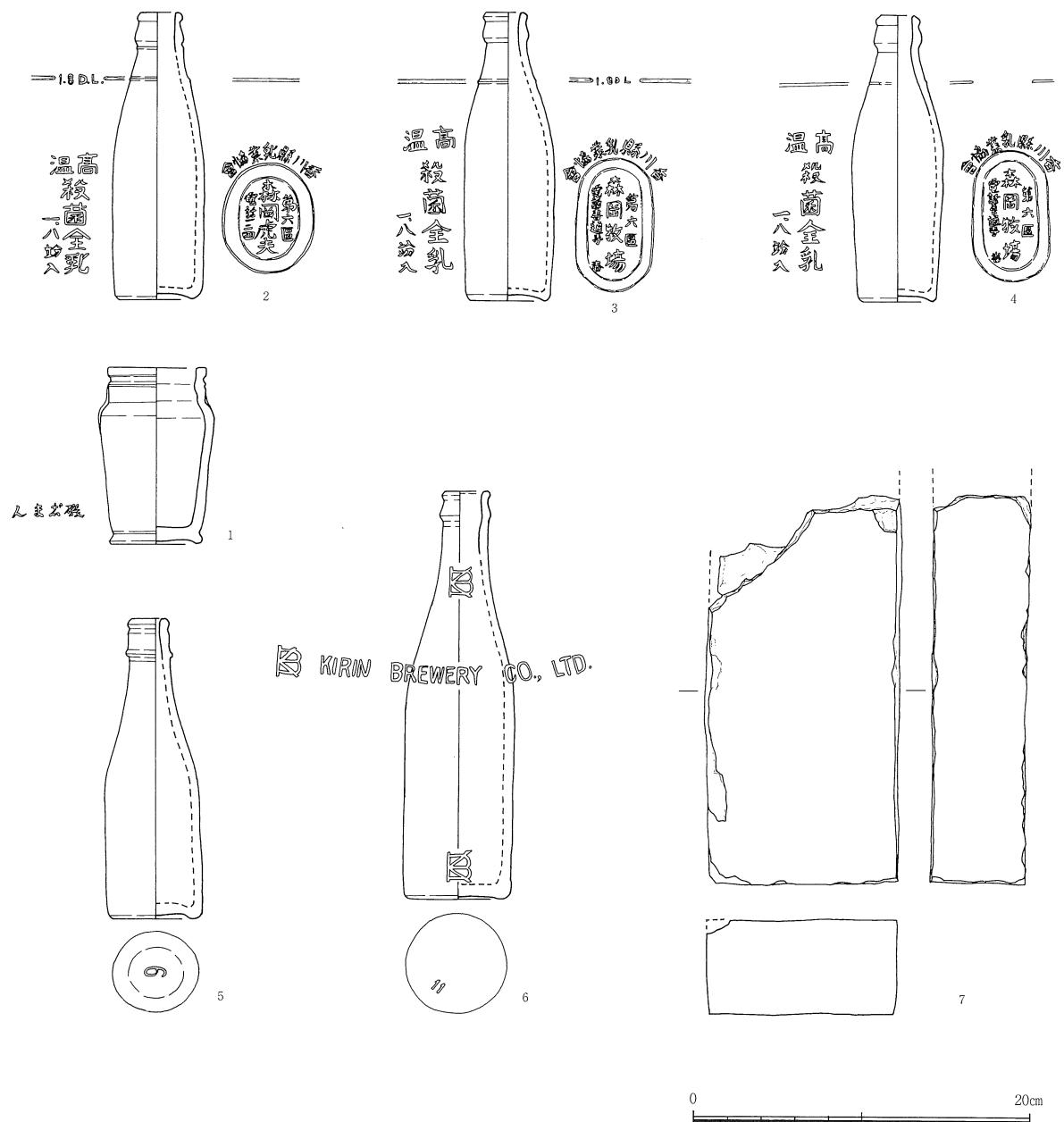


Fig.32 SK005出土遺物実測図 (1/4)

近世～近現代

土坑

SK005出土遺物 (Fig.32、Pla.56・57)

ガラス製品

牛乳瓶 (2~4) 2は胴部外面に「香川縣牛乳協會」「第六區」「森岡虎夫」「電話普通寺一二四番」と陽刻され、背面には「高温」「殺菌全乳」「一、八磅入」、頸部には「1.8D.L.」と陽刻されている。口径2.4cm、器高7cm、底径4.1cmである。3は同様の陽刻がされるが、「森岡虎夫」の部分が「森岡牧場」に、電話番号の部分は「電話普通寺□番」となっている。4は3同様に陽刻されるが、頸部の「1.8D.L.」銘が欠落する。色調はいずれも飴色状にやや曇った透明色である。出土時には口縁部に腐食した王冠で栓がされたままのものも出土している (Pla.57-a)。

佃煮瓶（1） 脊部外面下部に「磯志まん」の陽刻が認められる。口径5.8cm、器高10.5cm、底径5.2cmである。色調は青色を呈する。

飲料水瓶（5・6） 5はスカイブルーの色調で、口径2cm、器高17.8cm、底径4.7cmである。底面に「6」の文字が陽刻される。被熱により器形がやや歪んでいる。6は透明色で、口径2.5cm、器高24.2cm、底径5.7cmである。脊部に「KIRIN BREWRY CO、LTD.」、底面に「11」の陽刻が認められる。

土製品

煉瓦（7） 長さ23.1cm、幅11.5cm、厚さ5.8cmである。図上左上部分が欠損する。

地鎮遺構

SK228出土遺物（Fig.33、Pla.57）

金属器

錢貨（1～4） 1は大型五十銭黄銅貨で昭和21年と判読できる。2は一円黄銅貨で昭和21年と判読できる。3の五円黄銅貨は昭和26年と判読される。文字は楷書体である。4はアルミ製の円盤で腐食が激しいが、直径が22mmで他の貨幣が全て戦後のものであることから、昭和20年と21年に発行された稻十銭アルミ貨であると考えられる。

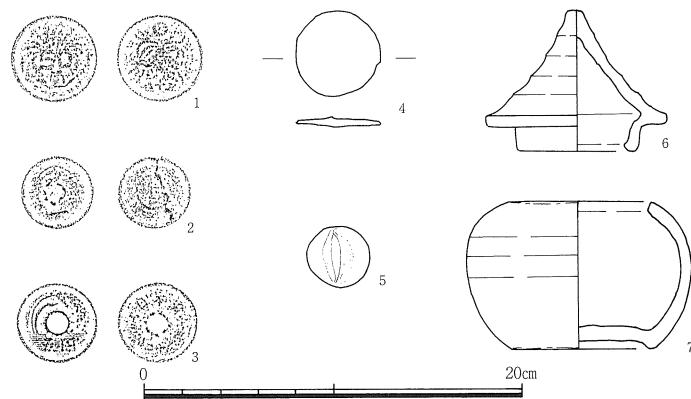


Fig.33 SK228出土遺物実測図（1/2）

ガラス製品

玉（5） いわゆるビー玉である。透明であるが芯の部分は橙色を呈する。直径17mmである。

磁器

宝珠形容器（6・7） 磁器製で、6は蓋で、口径3.1cm、器高3.8cmである。7は身で口径3.7cm、器高3.9cm、底径3.7cmである。

溝

SD001出土遺物（Fig.34、Pla.58）

磁器

皿（1） 底径17cmで、内面見込み部分には型紙摺で文様が描かれる。

鉄製品

蹄鉄（2） 長さ11.9cm、幅11.4cm、厚さ1.1cm、重さ257.5gで、方形の孔を14個穿つ。外面には溝が造られている。

SD002出土遺物（Fig.34、Pla.58）

弥生土器

壺（3～5） 3は口縁部が上下に拡張し、口縁部外面には四条の凹線を施す。頸部付近には列点文で飾る。口径15cmである。4は口頸部片で、口径20.2cmである。口縁部外面には羽状列点文をし、内面は横方向の精緻なヘラミガキをする。頸部外面には二段の指頭圧突帯を貼り付ける。5は大型壺の口頸部で、口径25.8cmである。口縁端部は上下方向に拡張する。口縁部外面は斜め方向の列点文を二段に巡らせる。頸部外面には二段の指頭圧突帯を貼り付ける。

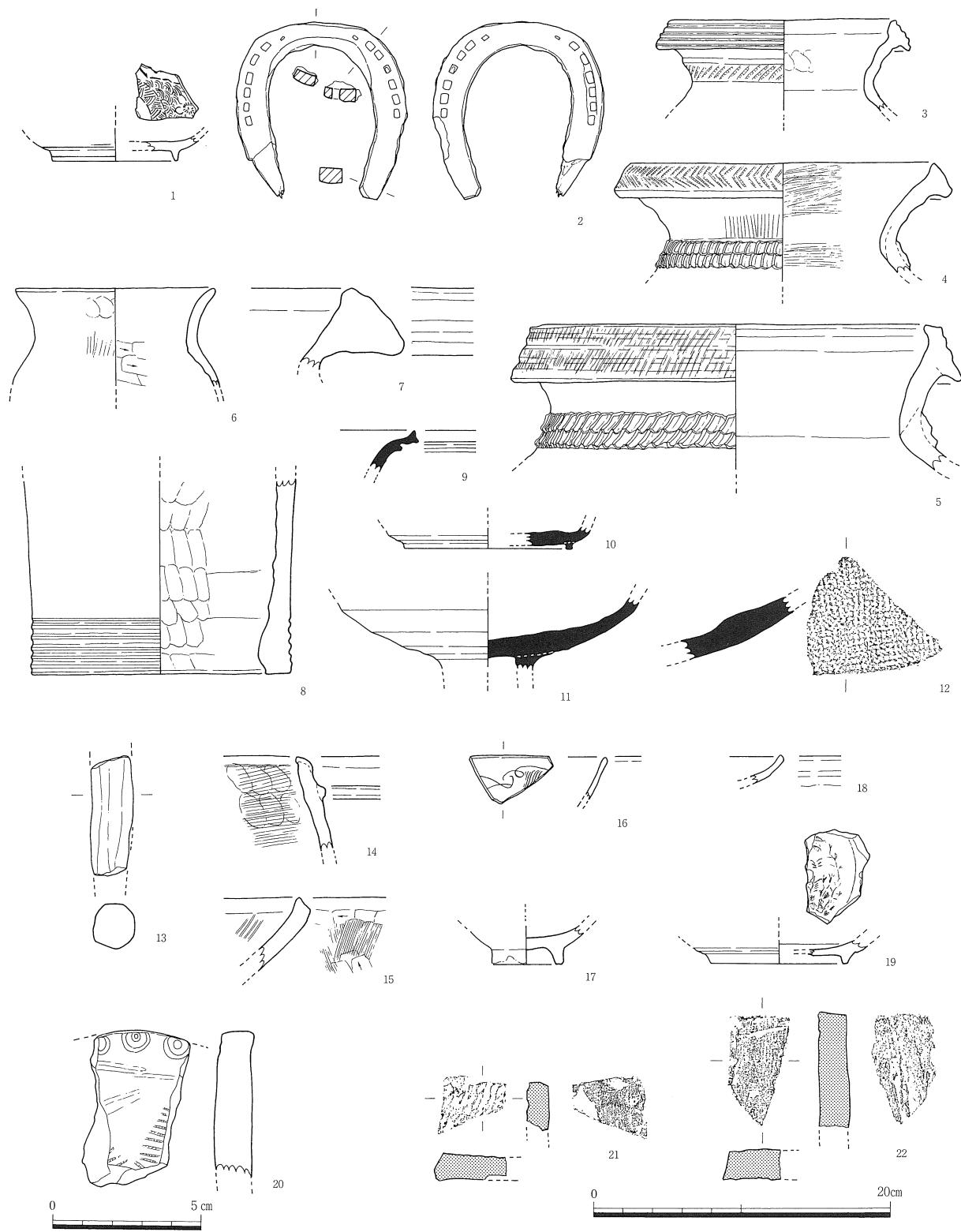


Fig.34 SD001・002・003出土遺物実測図(2) (1/2・1/4)

土師器

甕(6・7) 6は口径13.2cmで、口縁部は緩やかに外傾する。外面には粗いハケ、内面には図上左から右方向のヘラケズリを施す。7は大型品の口縁部片で、口縁は肥厚する。内外面ともに強いヨコナデを施す。

土製品



Fig.35 SD003出土遺物実測図 (1/2)

土管 (8) 土師質で軟質である。外面に鉄釉が塗布される。外面には五状の沈線が施される。底径17.2cmである。胎土などより三豊郡豊中町の岡本焼と考えられる。

SD003出土遺物 (Fig.34・35、Pla.58・59)

須恵器

壺 (9) 口縁部のみ残存する。口縁部は上方にやや拡張し、口縁部外面やや下方に突帯を貼り付ける。

高杯 (10) 杯部から基部にかけての破片である。外面は回転ヘラケズリ後にナデを施す。内面はナデ調整する。

坏 (11) 底部のみの破片である。底径4.9cmで底部外面に高台を貼り付ける。

甕 (12) 底部付近の破片で、内面には顕著な指頭圧痕跡が認められ、外面には格子目状のタタキ目が残る。軟質で色調は白灰色を呈する。

鍋 (13・14) 13は脚付鍋の脚部で、表面全体をナデしている。14は脚付鍋の口縁部片で、口縁部外面よりやや

下方に短い突帯を貼り付ける。また、外面には煤の付着も認められる。内面はハケが残存する。

瓦質土器

摺鉢（15） 口縁部片で、内面には間隔が空いた摺り目が認められる。外面にはハケが残存する。在地産のもとのと考えられる。

磁器

椀（16・19） 16は青磁椀の口縁部片で、龍泉窯系と考えられる。19は底部片で、底径9.2cmである。内面には銅板転写により文様が描かれる。

陶器

椀（17） 底部片で、底径4.8cmである。表面に黄褐色の釉を施し、胎土は黄白色で軟質である。京焼系と考えられる。

皿（18） 口縁部片で、表面に灰釉を施す。瀬戸焼と考えられる。

土製品

分銅形土製品（20） 上半部片で、表面はヘラミガキ後にナデ調整をする。端部には竹管により重弧文で飾る。外面は櫛排列点により、弧状の顔面表現を表す。

瓦（21・22） 21と22はともに細片で、須恵質である。いずれも外面には繩目タタキが、内面には布目痕が認められる。

石器

砥石（23） 泥岩製の砥石で側面には被熱痕が認められる。残存長4.8cm、残存幅3.8cm、残存厚1.6cmである。

石庖丁（24） 打製の抉刃石庖丁である。図上左部分を欠損し、長さ5cm、残存幅4.3cm、厚さ1.2cmである。

柱状片刃石斧（25） 緑泥片岩製の磨製でほぼ完形です。上面部におびただしい敲打痕が認められる。敲石として再利用された可能性がある。

SD266出土遺物（Fig.36、Pla.60）

陶器

ひょうそく（2） 底径3.7cmで、底面には糸切り痕が認められる。内面には長石釉が施される。

摺鉢（4） 口縁部片で、口縁部は玉縁状を呈し、外面に二条の沈線を施す。内面には間隔の狭い摺り目が施される。備前焼と考えられる。

椀（5） 底部片で、底径4.6cmである。表面にオリーブ色の釉を施し、貫入痕が認められる。唐津焼と考えられる。

磁器

紅皿（1） 口径6.4cm、器高2.05cm、底径2.4cmである。表面には灰色に発色した釉を施す。型作り成形と考えられる。

蓋付鉢（3） 肥前系の染付で、口縁部は垂直に立ち上がる。口径14cm、器高4.5cm、底径12.8cmである。

椀（6） 白磁で、底径5.8cmである。

土師器

鍋（7・9） 7は脚付鍋の脚である。表面全体をナデ調整する。9は大型のもので、口縁部は肥厚する。口径12.9cmである。内面には付着物が観察される。

石造品

五輪塔（8） 空風輪である。長さ32cm、幅24cm、溝最上層から出土したもので、表面の摩滅は著しく、下部

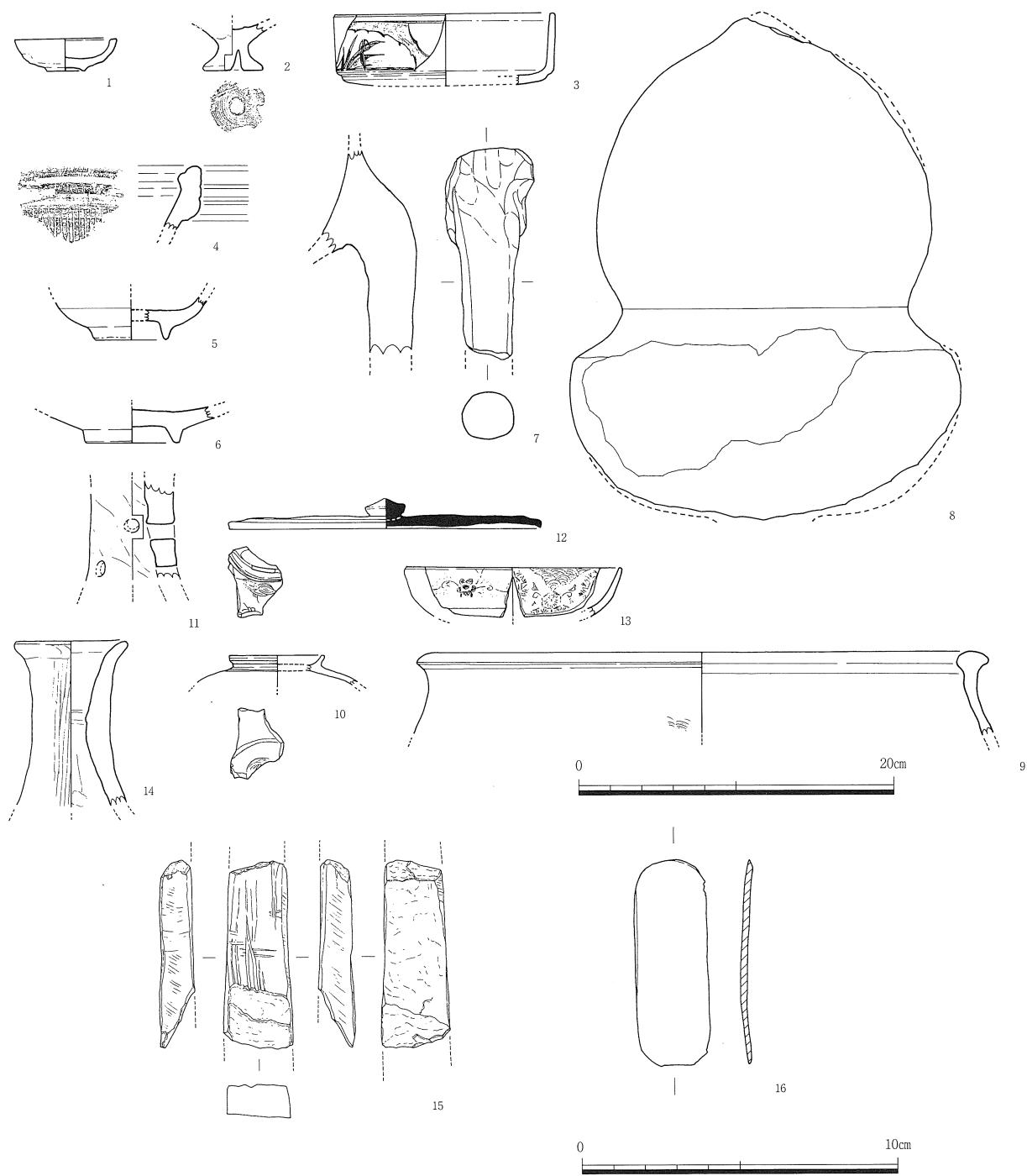


Fig.36 各溝出土遺物実測図 (1/2 · 1/4)

の出ホは欠損する。石材は粗めの角礫凝灰岩製で、大麻山産のものと考えられる。15世紀代のものと考えられる。

SD308出土遺物 (Fig.36、Pla.60)

磁器

蓋 (10) 染付の蓋で、天井部径6cmである。肥前系と考えられる。

塹壕出土遺物

SD097出土遺物 (Fig.36、Pla.60)

弥生土器

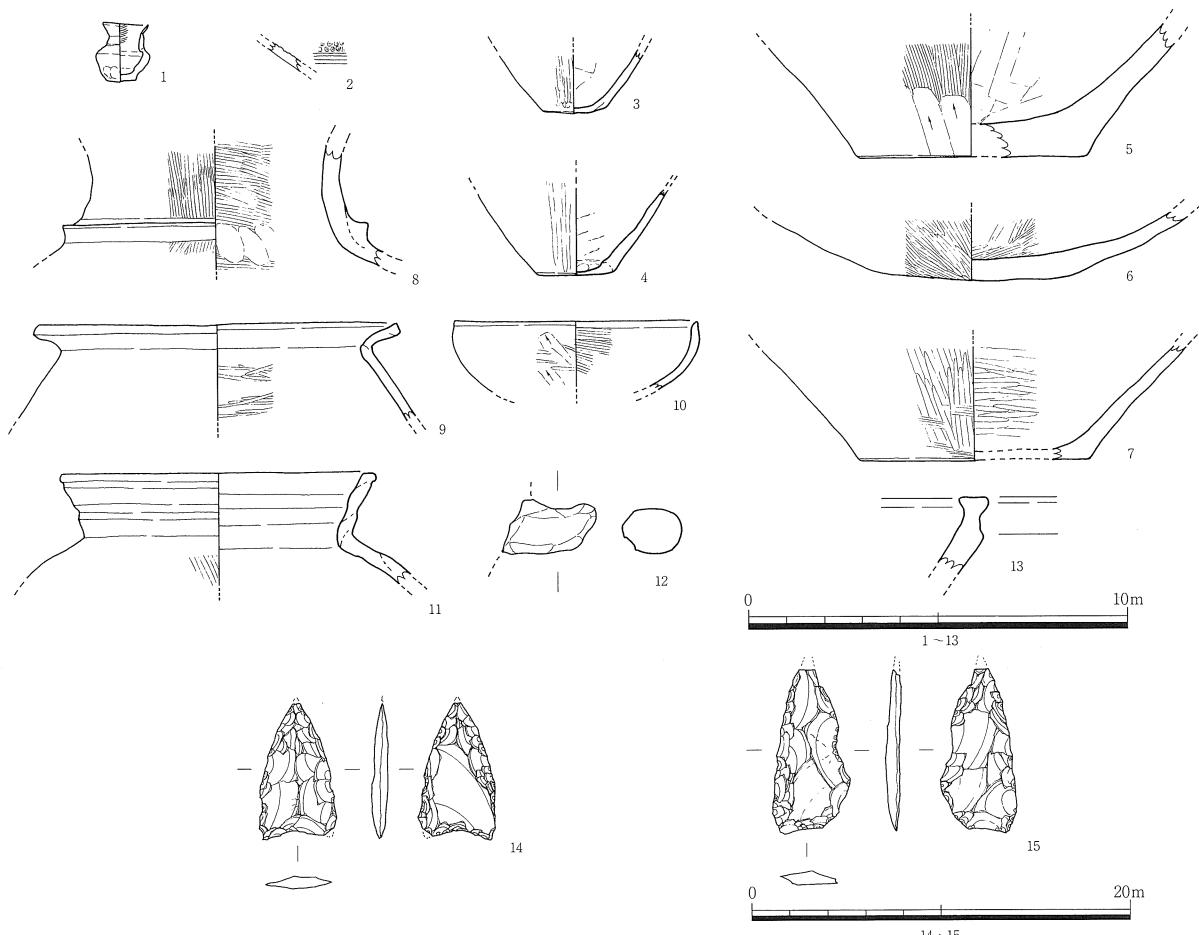


Fig.37 その他の遺構出土遺物実測図 (1) (1/2・1/4)

高杯 (11) 脚柱部片で、円形の透孔を穿つ。焼成は良好で硬質である。

須恵器

杯 (12) 蓋で、天井部に宝珠つまみを付す。口径19.6cm、器高1.9cmである。

石器

砥石 (15) 粘板岩製の小型品で、上・下端が欠損する。表面には工具による溝状の痕跡が数状認められる。

残存長6cm、幅2.2cm、厚さ1.1cm、重さ105gである。

金属製品

銅板 (16) 端部を切り落として丸くしたもので、表面は無文である。長さ6.5cm、幅2.2cm、厚さ0.2cm、重さ16.3gである。

SD104出土遺物 (Fig.36、Pla.60)

磁器

小鉢 (13) 口径13.4cmで、内外面に型紙摺によって文様が施される。

SD139出土遺物 (Fig.36、Pla.60)

弥生土器

支脚 (14) 下部を欠くもので、口径6.8cmである。粗いハケが施され、内面はナデ調整する。

その他の遺構出土遺物 (Fig.37、Pla.61・62)

弥生土器

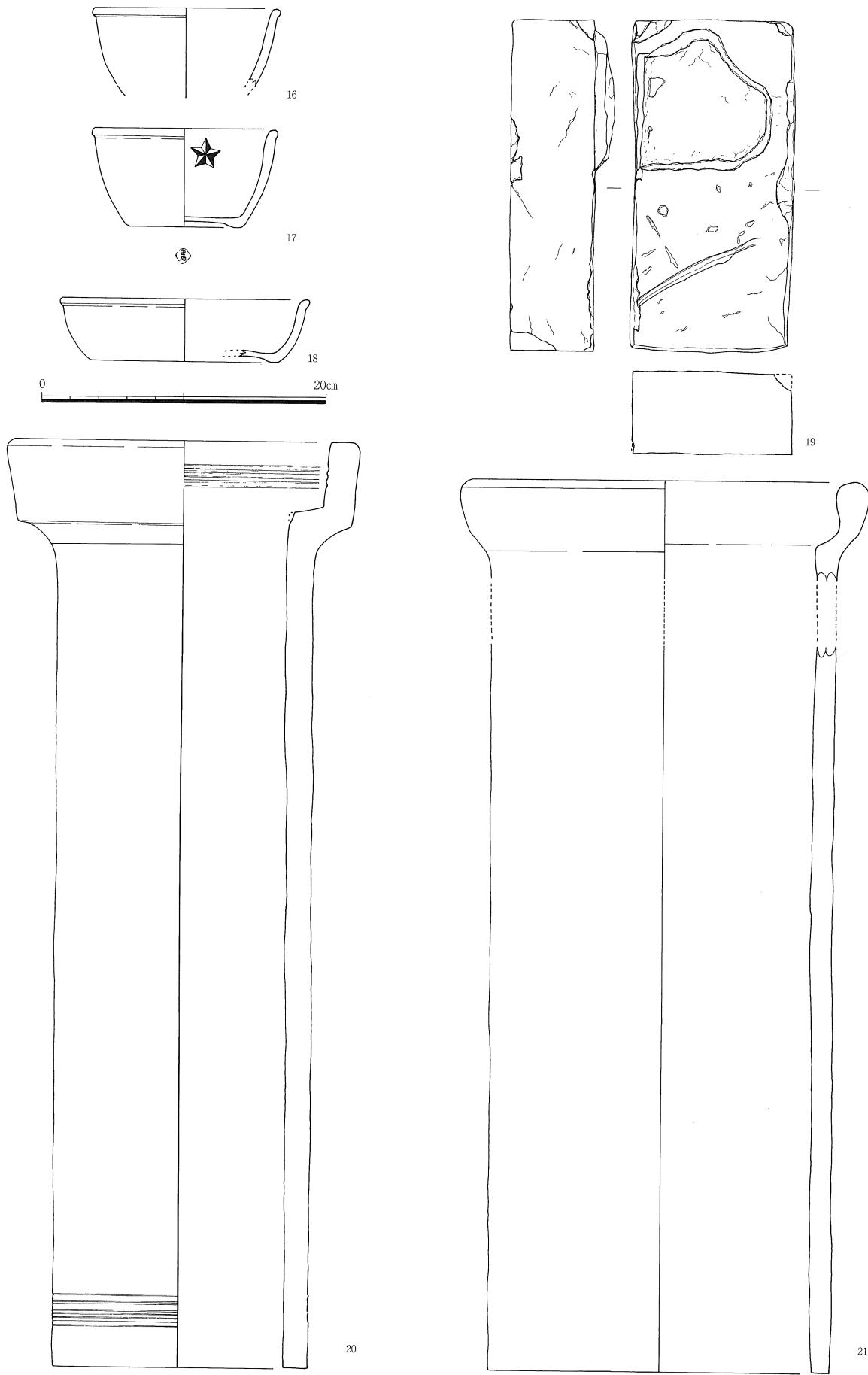


Fig.38 その他の遺構出土遺物実測図 (2) (1/4)

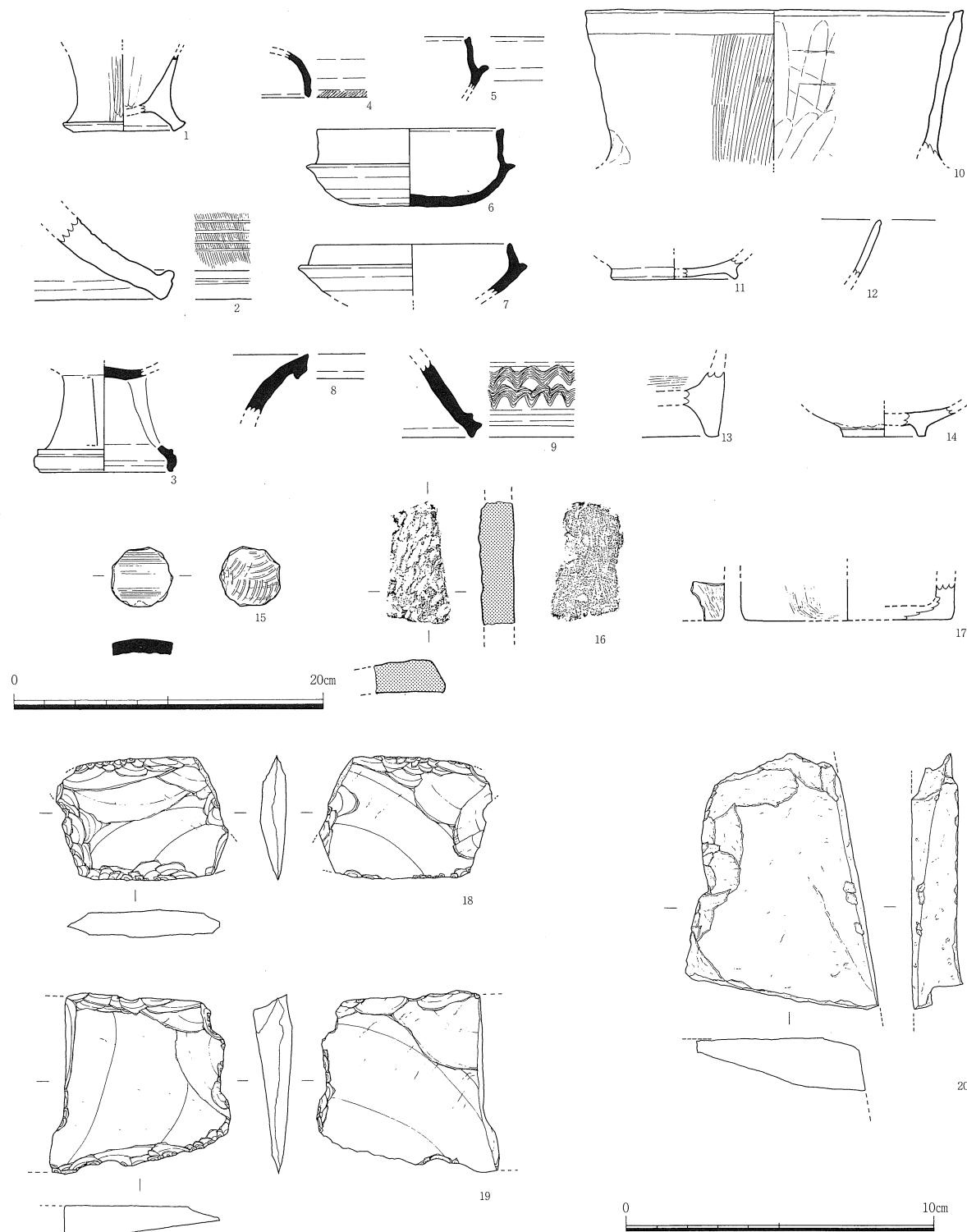


Fig.39 包含層出土遺物実測図 (1/2 · 1/4)

壺 (1・2・5~8) 1はミニチュアの壺で、口径2.4cm、器高3.1cmである。SD275より出土。2は胴部片で、外面には四条の沈線と竹管文が施される。SX272より出土。5は大型のものの底部で、底径12cmである。外面はハケ後下から上方向にヘラケズリを施す。SX272より出土。6は球形の壺底部で、底径10cmである。内外面とともに細かいハケをする。SX302より出土。7は底部片で、底径12cmである。外面は縦方向、内面は横方向に密なミガキを施す。8は壺の頸部で、内外面ともにハケ調整をする。頸部外面には突帯を貼り付ける。SD268より出土。

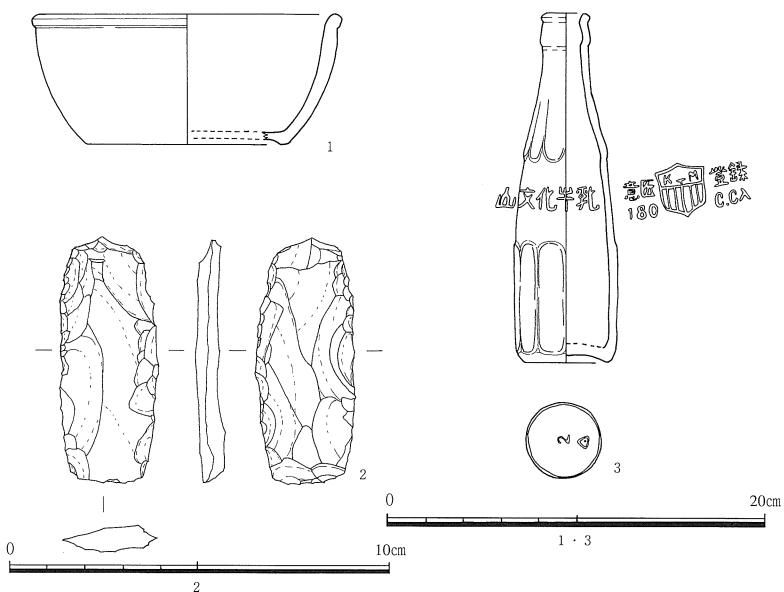


Fig.40 表土・表採遺物実測図 (1/4・1/2)

ナデ調整する。SD267より出土。

陶器

鉢 (10) 口径12.8cmで、内外面ともハケ調整後に外面はヘラケズリをする。SX112より出土。

甕 (3・4・9) 3・4は底部で3は底径3.5cmで、4は底径4cmである。外面にミガキを施し、内面に工具痕が認められる。いずれもSX272出土。9は口頸部で、口径18.8cmで内面に粗いミガキが認められる。SX311より出土。

鉢 (10) 口径12.8cmで、内外面ともハケ調整後に外面はヘラケズリをする。SX112より出土。

土師器

甕 (11) 口径16.4cmで口縁部は強いヨコナデにより段状を呈する。SD267より出土。

把手 (12) 長さ5.7cmで、全体を

石器

石鎌 (14・15) 14は打製石鎌ではほぼ完形である。石材はサヌカイト製で、長さ3.6cm、幅2cm、厚さ0.4cm、重さ3gである。SX126より出土。15は打製石鎌で、長さ4.4cm、残存幅2cm、厚さ0.35cmである。石材はサヌカイト製である。SX126より出土。

磁器

軍用食器 (16~18) 16・17は椀で、16は口径12.8cm、器高5.5cmである。17は口径12.8cm、器高6.95cm、底径8.1cmである。17の内面には旧陸軍軍章である星印が青色にプリントされる。16・17はともにSK364出土である。18は皿で、口径17cm、器高4.3cm、底径13.2cmである。SK006より出土。

土製品

煉瓦 (19) ほぼ完形で、長さ23.4cm、幅11.6cm、厚さ6cmである。一部にコンクリートの付着が認められる。SD114から出土。

土管 (20・21) 20は完形で、溝内に数個が埋設された形で検出した (Pla.62-a)。長さ65.5cm、幅23.8cm、厚さ1.7cmである。表面には鉄釉が施され、二次焼成によって製作されている。SD378より出土。21は一次焼成のみで焼締めて仕上げたものである。いくつかの部品から図上復元してある。SD114から出土。いずれも岡本焼と考えられる。

鉄製品

鉄塊 (Pla.62) SD267から出土した。X線写真を撮影したところ、釘・針金などが鋲びによって一体化している様子が観察された。

灰白色層出土遺物 (Fig.39、Pla.63)

弥生土器

鉢 (1) 台付鉢の底部で、底径6.5cmである。内面はナデ調整し外面はミガキを施す。

器台 (2) 脚裾部片で、裾端部は上方に拡張する。外面はやや粗いハケ後に、四条の沈線が残る。

須恵器

杯 (4~7・11) 4は杯蓋片で、口縁部外面に、刻目を巡らす。5は杯身片で、口縁端部に形骸化した沈線が残る。6は口径12cm、器高5cm、底径7.1cmである。底部外面は図上左から右方向にヘラケズリを施す。7は杯身で、口径12.6cmである。口縁から受部間は短く内傾する。11は杯身底部片で、底径7.8cmで、高台を貼り付ける。

壺 (8) 口縁部片で、口縁端部は外傾し下方に肥厚する。

器台 (9) 器台脚裾部としたが、高杯脚部の可能性もある。裾部外面に短いストロークの波状文を描く。

土師器

甌 (10) 上半部のみ残存し、口径24.2cmである。内面はヘラケズリをし、外面はハケ調整をする。

鉢 (17) 底部片で、外面は精緻なヘラミガキをする。岡本焼の鳥の餌箱と考えられる。

磁器

椀 (12・14) 12は青磁碗の口縁部片である。14は肥前系磁器の底部片である。底径5.2cmである。

瓦質土器

鉢 (13) 脚台部片である。被熱を受けて赤褐色を呈する。内面にハケの痕跡が認められる。

土製品

瓦 (16) 外面には縄目タタキ痕が、内面には布圧痕が認められる。須恵質。

転用円盤 (15) 須恵器甌片を転用した円盤で、外面にカキ目が、内面には同心円状の当て具痕が認められる。

長さ3.8cm、幅3.8cm、厚さ1.8cmである。

石器

石庖丁 (18・19) いずれもサヌカイト製打製抉入石庖丁である。18は図上左右端部を欠損し、長さ5.5cm、残存幅4cm、厚さ0.8cm、重さ47.9gである。19は図上左半部を欠損し、下部の刃部は一方向しか作り出されておらず、未製品と考えられる。長さ5.9cm、残存幅5.8cm、厚さ1.3cm、重さ25.3gである。

灰茶色層出土遺物 (Fig.39、Pla.63)

石器

石斧 (20) 石斧の破片としたが、他の器種の可能性もある。表面は精緻に研磨されている。残存長8.3cm、残存幅6.3cm、残存厚1.6cm、重さ105gである。

黄橙色層出土遺物 (Fig.39、Pla.63)

須恵器

高杯 (3) 脚部片である。底径8.6cmで、裾部には方形の透孔を穿つ。

表土出土遺物 (Fig.40、Pla.63)

磁器

軍用食器 (1) 汁碗で口径15.6cm、器高7cm、底径10.6cmである。

ガラス製品

牛乳瓶 (3) 口径2.2cm、器高17.7cm、底径4.2cm

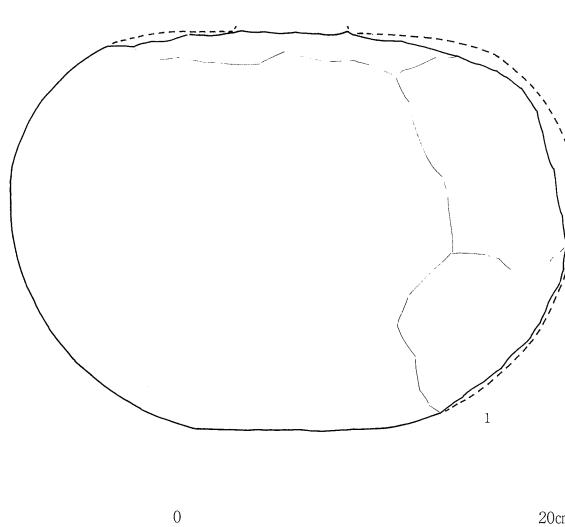


Fig.41 調査区周辺表採石塔実測図 (1/4)

である。胴部には「○山文化牛乳」「意匠登録180C.C入」、底面には「2」と陽刻される。戦後のものと考えられる。色調は透明色である。

表採遺物 (Fig.40・41、Pla.63)

石器

削器 (2) サヌカイト製で、長さ6.5cm、最大幅2.6cm、最大厚0.7cmである。先端部は欠損する。

石造品

五輪塔 (4) 調査区周辺の弘田川近くで採集したもので、水輪である。石材はややきめの細かい角礫凝灰岩である。市内吉原の十五丁石と考えられる。上部出ほぞは欠損する。全体的に摩滅が著しい。15世紀代のものと考えられる。

【引用・参考文献】

江浦 洋ほか 2000『難波宮跡北西の発掘調査』 (財) 大阪府文化財調査研究センター

乗岡 実 1999「近世備前焼の擂鉢」『関西近世考古学研究』VII 関西近世考古学研究会

服部芳人ほか 2000『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡』 三重県埋蔵文化財センター

第4章 旧練兵場遺跡出土土管・煉瓦の蛍光X線分析

旧陸軍第十一師団の建築部材として用いられた煉瓦は、現存する建物のものも含めて刻印等は確認されておらず、産地がよくわかつていない。伝承では觀音寺市で生産されていたという話も聞こえる。また、当遺跡出土の土管類は素焼きと本焼きの両者が見られるが、いずれも三豊郡豊中町岡本で焼かれたものと考えられる。そこで、土管同士の胎土は近似したものかどうかという点、土管と煉瓦は胎土が異なるのかどうかという点を検討するため、サンプリングを行い、蛍光X線分析を試みた。

分析を行ったのは、SD005出土の煉瓦 (Fig.32-7)、SD114出土の煉瓦 (Fig.38-19)、SD114出土の土管 (Fig.38-21)、SD378出土の土管 (Fig.38-20) の4点である。

標準試料がなく、絶対的な定量ができないので、ピーク強度の比を用いて検討した。須恵器等の土器の胎土分析ではカリウム (K)、カルシウム (Ca)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr) に着目して地域差の検討が行われているので、同様に4因子を用いて強度比を検討した。しかし、試料数が少ないので、これから胎土の違い、共通性などを考察するのは無理である。現時点では鉱物学的な調査の方が有効なのではないだろうか。

第5章 小結

検出遺構

検出した遺構について、主要なものを中心として遺構変遷を時期別に概観し、まとめにかえたい。

一期 弥生時代中期末～後期初頭

調査区北から中央部分にかけて遺構は展開する。この時期の遺構はほとんどが削平されていると考えられる。主な遺構は竪穴住居跡SH170、掘立柱建物SB250、掘立柱建物SB330、掘立柱建物SB350、掘立柱建物SB380である。掘立柱建物は南北方向を志向する。掘立柱建物SB380埋土の状況から、中期後半以前に遡る可能性もある。

二期 弥生時代終末

調査区中央部及び北端部にSH180、SH230、SH370の合計軒の竪穴住居跡を検出した。平面形態はいずれも隅丸方形を呈する。SH230とSH370の方向はほぼ平行する。旧練兵場遺跡で当時期の住居跡は、彼ノ宗調査区、保育所調査区、研修棟調査区でも検出されており、今回の調査でこの時期の集落が南へも展開していたことが確認できた。

三期 古墳時代～古代

古墳時代の遺構で明確なものはほとんど検出しえなかつたが、唯一調査区北付近で竪穴住居跡SH371が検出された。当初は造付の竈が北側に造られていたと考えられ、それを住居跡廃絶時に壊し土坑を掘って埋めている。出土須恵器の年代観から、古墳時代終末と考えられる。同時期の住居跡は品質実験棟調査区、仲村廃寺調査区で検出されている。

また、SD270は出土遺物より奈良時代の遺構と考えられる。奈良時代の遺構として明確なものは仲村廃寺調査区に僅かに散見される程度で、旧練兵場遺跡内での明確な遺構分布は現状では不明である。

四期 近世

この段階の遺構は、溝SD003とそれと関連すると考えられる細い溝がある。SD003は調査区西に位置する弘田川の旧東岸付近であったと考えられ、近世段階に段段と耕地として利用されていったことが、土層の観察より想定できる。

五期 近代Ⅰ

溝SD001及びSD002は最下層に水の流れた痕跡が認められることより、従来はこれらは水路として機能していたものであることが判る。その後、これらの溝は地山の黄橙色シルトを切り崩した土によって一気に埋め立てられたことが考えられる。これらの溝機能時段階と前後してこの土地が練兵場して利用されることとなり、大掛かりな整地がおこなわれたと考えられる。以上のことより、この段階は年代的に明治～大正時代が相当する。

六期 近代Ⅱ

塹壕と考えられる溝状遺構SD011、SD012、SD016、SD020、SD024、SD043、SD072、SD097、SD104、SD105、SD139、SD231の計12本が検出された。事実報告の項でも述べたが、これらの埋土は地山の黄橙色シルトと区別がつかず、掘削後すぐに埋め戻されたと考えられる。当初、これらの遺構をうまく認識できなかつたため、SD001及びSD002上のものについては十分な遺構検出・調査がおこなえなかつた。こうした理由からSD072とSD139は同一のものである可能性がある。この段階は明治～昭和初期時代が考えられる。

七期 近代Ⅲ

善通寺陸軍病院臨時第一分院と関係するものが相当する。ゴミ穴と考えられる土坑SK005、同SK006、同

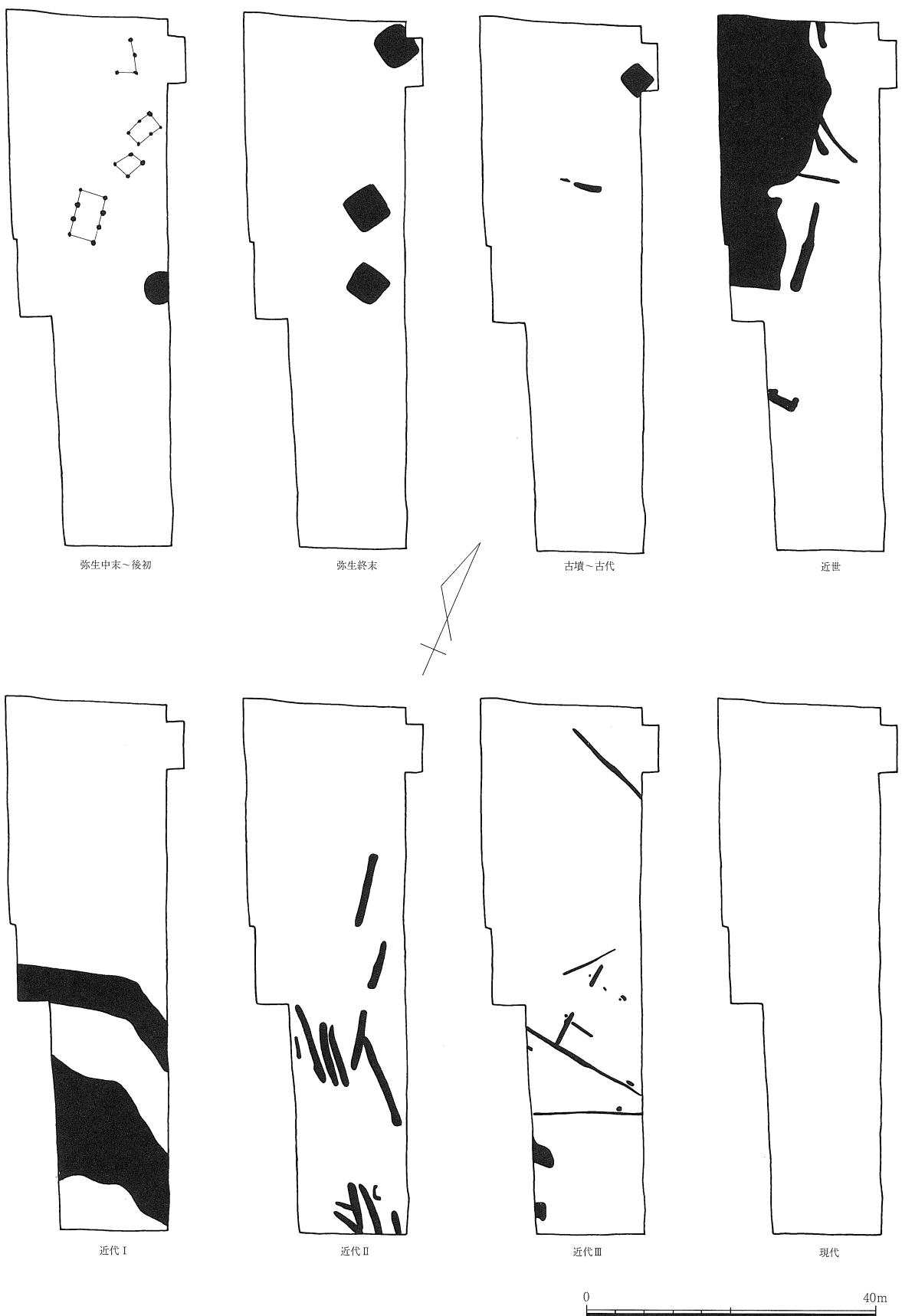


Fig.42 旧練兵場遺跡（2001）遺構変遷図（1/800）

SK364、土管が埋設された溝状遺構SD267、同SD268、同SD378、溝SD308などが主要なものである。時期は昭和10~20年代と考えられる。

八期 現代

地鎮遺構SK228は、内包された銭貨から、昭和26年以降に埋納されたことが判る。この時期に善通寺陸軍病院臨時第一分院は取り壊され、新たに昭和28（1953）年からこの地に仲多度伝染病院の建設が開始されている。検証のため仲多度伝染病院の建物の配置図にSK228をドットしてみた。すると、建物空間のほぼ「ヘソ」の部分にSK228は位置していることが判明した（Fig.43）。これらのことから、地鎮は仲多度伝染病院建設の際に執り行われたことが想定される。

出土遺物

次に前述した遺構の時期を基に、出土遺物について概観していきたい。

弥生時代中期後葉の遺物

遺構に伴うものは少なく、後世の遺構に混入する形で出土している。SD002出土の壺（Fig.34-3～5）、がある。SD003出土の柱状片刃石斧（Fig.35-25）、SD003出土の分銅形土製品（Fig.34-20）もこの段階に帰属すると考えられる。分銅形土製品は旧練兵場遺跡では19点目の資料である。

弥生時代中期末～後期初頭の遺物

SH170出土の高杯（Fig.23-1）、鉢（Fig.23-2）やSH371柱穴a（Fig.27-48）・柱穴b出土の壺（Fig.27-49）、SB250柱穴出土の遺物などが主な物である。

弥生時代終末の遺物

今回の調査では、H230・SH180・SH370などから弥生時代終末の土器が出土した。このうちには小型丸底壺・小型高杯・小型鉢が一定量存在する。特にSH370出土の複合口縁壺（Fig.25-1、5、7）は、東伊予地域からの搬入品の可能性がある。

玉類の検出のため、昨年度調査時に検出した竪穴住居跡で試みた住居跡覆土のサンプリングと洗浄を今年度もおこなった。昨年度は一棟の住居跡より23点ものガラス小玉が出土するという特異なケースであったが、今年度も洗浄の結果、ガラス小玉と緑泥片岩製小玉が計13点出土した。内訳は、SH170石製1点・ガラス製2点、SH180石製3点・ガラス製4点、SH230ガラス製2点、SH370石製1点である。昨年度及び今年度の実践によって、善通寺市域の住居跡を調査する際に、埋土をサンプリングして洗浄することに意義があり、小玉などの「貴重品」とともに魚骨、種子など自然遺体の抽出も可能であることが証明された。

古墳時代の遺物

包含層からは、中期後半まで遡る可能性のある須恵器片が出土している。また、古墳時代終末と考えられる土器はSH371などから出土している。

奈良時代の遺物

SD270から出土した須恵器壺（Fig.29-8）、土師器甕（Fig.29-2、3）、蓋（Fig.29-5）などの他に塹壕中からも奈良時代と考えられる須恵器が一定数出土した。

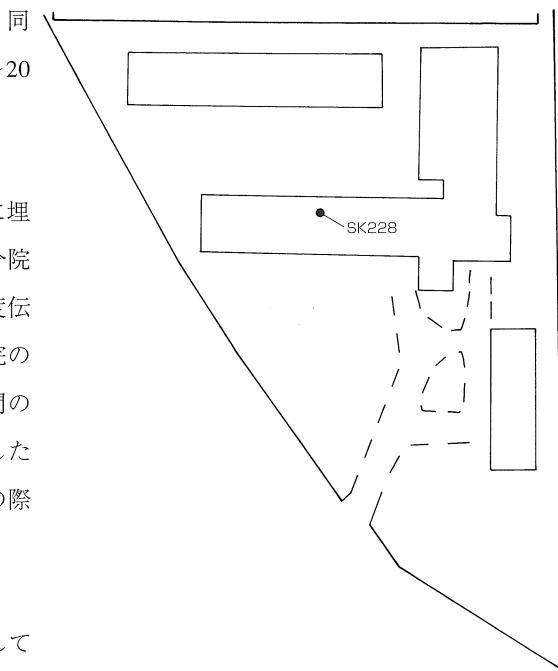


Fig.43 仲多度伝染病院の建物配置とSK228の関係 (1/1000)

平安時代の遺物

柱穴状遺構SX358から出土した土師器椀（Fig.30-34）は、平安時代に相当すると考えられる資料である。

中世の遺物

SD003及びSD266から、脚付鍋（Fig.34-13、14・Fig.-36-7）、瓦質摺鉢（Fig.34-15）、龍泉窯系青磁椀（Fig.34-16）などが出土している。

SD266から出土した空風輪（Fig.36-8）は、本来は付近に祀られていたものと考えられる。調査区近辺で採集した水輪（Fig.41-1）も本来の意味が忘却され、弘田川脇の水路に放置されていた。弘田川のやや下流、平成10（1998）年に朝比奈橋傍の水路を改修工事した際に、多数の角礫凝灰岩製の石塔が出土し、現在一部が川沿いに祀られている（Fig.）。更に、善通寺西側の駐車場付近でも工事中に多数の石塔が出土したという。このように、中世段階の石塔はかつては弘田川沿いにも多く存在していたが、何らかの理由により川へと投機され埋没たか、もしくは弘田川の増水などの災害によって埋没したと考えられる。

近世の遺物

SD003京焼系椀（Fig.34-17）、SD266紅皿（Fig.36-1）、ひょうそく（Fig.36-2）、肥前系蓋付鉢（Fig.36-3）、備前焼摺鉢（Fig.36-4）、土師器鍋（Fig.36-9）、唐津焼椀（Fig.36-5）などがある。

近現代の遺物

染付、軍用食器、ガラス瓶、煉瓦、土管などが出土した。SK005から出土した「磯志まん」銘瓶（Fig.32-1）は調査の結果、大阪に本社のある（株）磯じまんの製品であることが確認された。本資料は現在、本社にも保管されていない戦前のものであることが判明した。

【引用・参考文献】

岩崎直也 1984 「四国系土器の搬出」『大阪文化誌』17 （財）大阪文化財センター

大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下津遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

大久保徹也 1993 「讃岐地方における古墳時代初頭の土器について」『研究紀要』 I （財）香川県埋蔵文化財調査センター

大嶋和則 2001 「高松平野における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』24 庄内式土器研究会

藏本晋司 1999 「弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について」『中間西井坪遺跡』 II （財）香川県埋蔵文化財調査センター

栗林誠治 2001 「四国の東阿波型土器」『庄内式土器研究』24 庄内式土器研究会

小林行雄 1935 「小型丸底土器考」『考古学』6-1 東京考古学会

菅原康夫 「阿波弥生時代終末期社会の特質」『考古学と生活文化』同志社考古学シリーズ刊行会

菅原康夫 1992 「保持具から型へ」『眞朱』1 （財）徳島県埋蔵文化財センター

菅原康夫・滝山雄一 2000 「阿波地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』 木耳社

滝山雄一 1985 「樋口遺跡出土の土器」『徳島考古』2 徳島考古学研究グループ

真鍋昌宏 2000 「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』 木耳社

森下英治 2001 「丸龜平野における弥生時代後期～終末期の土器編年」『第22回庄内式土器研究会<追加資料>』 庄内式土器研究会〔油版〕

—付論—

中・四国地方出土の軽石

1. はじめに

旧練兵場遺跡柱穴遺構から軽石が一点出土した。遺跡は瀬戸内海から約5km離れた位置にあり、海岸に漂着した軽石を人が意図的にこの場所まで持ち帰ったことが想定される。は二層に分層され、上層からは古墳時代後期の須恵器が出土し、下層からは弥生時代後期の土器片が出土した。軽石は上層より出土した。この軽石は弥生～古墳時代の「道具」であると考えられる。

軽石は、火山大国日本ではごく普通に見られる岩石の一つである。火山から噴出した溶岩が急激に冷却される際に、含有されたガスが噴出して多孔海面状となったものである。別名を浮石といい多くは水に浮く。海流に乗って、長い距離を漂流し海岸に打ち上げられるため、火山活動が盛んな南九州や東京湾周辺地域では軽石も豊富に存在し、また漂着によって火山が近辺に存在していない地域にも軽石は存在している。我が国においては、古くは縄文時代以来、人は軽石を生活のための材として利用することを知っており、その伝統は現在の足の裏こすりのために風呂場などに置かれる軽石製砥石にまで脈々と連なっている。

考古学では軽石を出土遺物として積極的に評価し、資料化している地域とそうでない地域があり、認識度にはばらつきがある。例えば、南九州・鹿児島県では大量の軽石が現在も散布しており、道具としての利用率もかなり高く、これが遺物に転じて出土する場合は多い。また、通称「石なし県」と呼ばれ、県内に石器用石材原産地のない千葉県では、遺跡内から出土する石については慎重に検討されており、この地においては出土軽石は使用痕の有無に関わらず遺物として立派に報告されている。

では、火山の存在していない中国・四国地方では軽石に対する認識は、どのようになされているのであろうか。出土資料の集成を通じて考えてみたい。

2. 軽石の用途

近年、前述した軽石を遺物として積極的に評価する地域では、軽石の個別具体的な報告や検討がなされるようになってきた。しかし、時間軸を長く取りその用途にまで言及した研究はほとんどされてこなかった。唯一、軽石の様々な用途を想定した研究に、大賀秀実の関東地方出土の資料を検討したものがある（大賀 1995）。大賀はこの中で十五の軽石の用途を想定している。軽石研究に注意を喚起するために、以下少し長くなるが引用しておきたい。1浮子、2木製品の加工段階での仕上げ砥石、3土器製作において曲面部分を研磨する調整具、4有溝軽石を骨角器の製作に供したもの、5皮などの製品を仕上げるための滑し道具、6金属製刃物用の砥石、7矢柄研磨器、8石製模造品の製作工程での粗い研磨用、9金属器のロウ付け用具、10石偶、11容器、12装飾品、13玉、14構築材、15土器胎土混和剤

大賀のあげた用途以外にも、南九州などでは石塔や石棺、地下式横穴の閉塞石などにも軽石は使用されている。まだまだ軽石の使用例はありそうだ。

3. 中・四国出土の軽石

今回の資料収集した結果は、管見では次のようになる（Fig.44・45、Tab.1）。中国地方では、16遺跡から41個

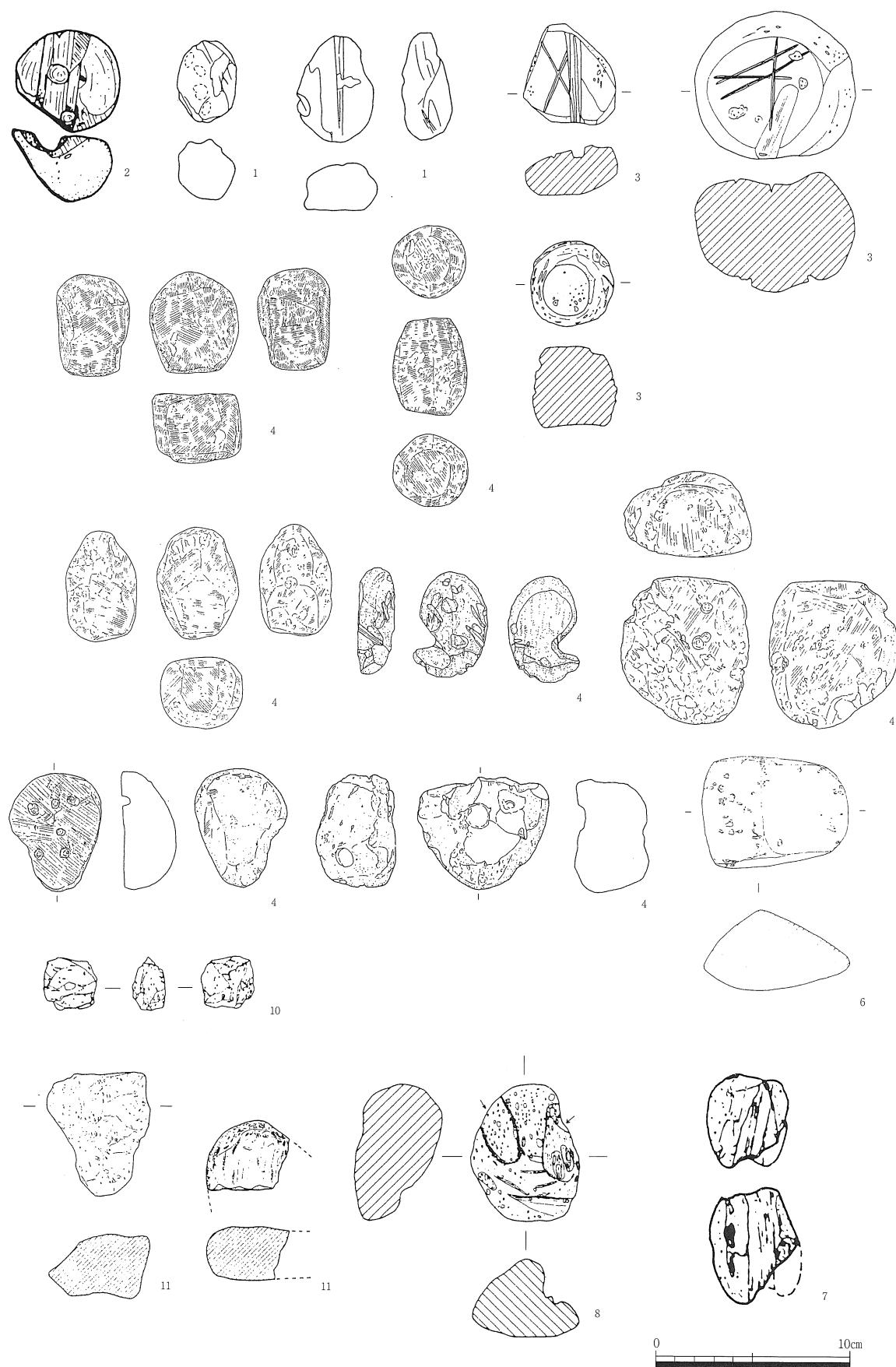


Fig.44 中・四国地方出土の軽石集成 (1) (各文献より、NoはTab.1に同じ)

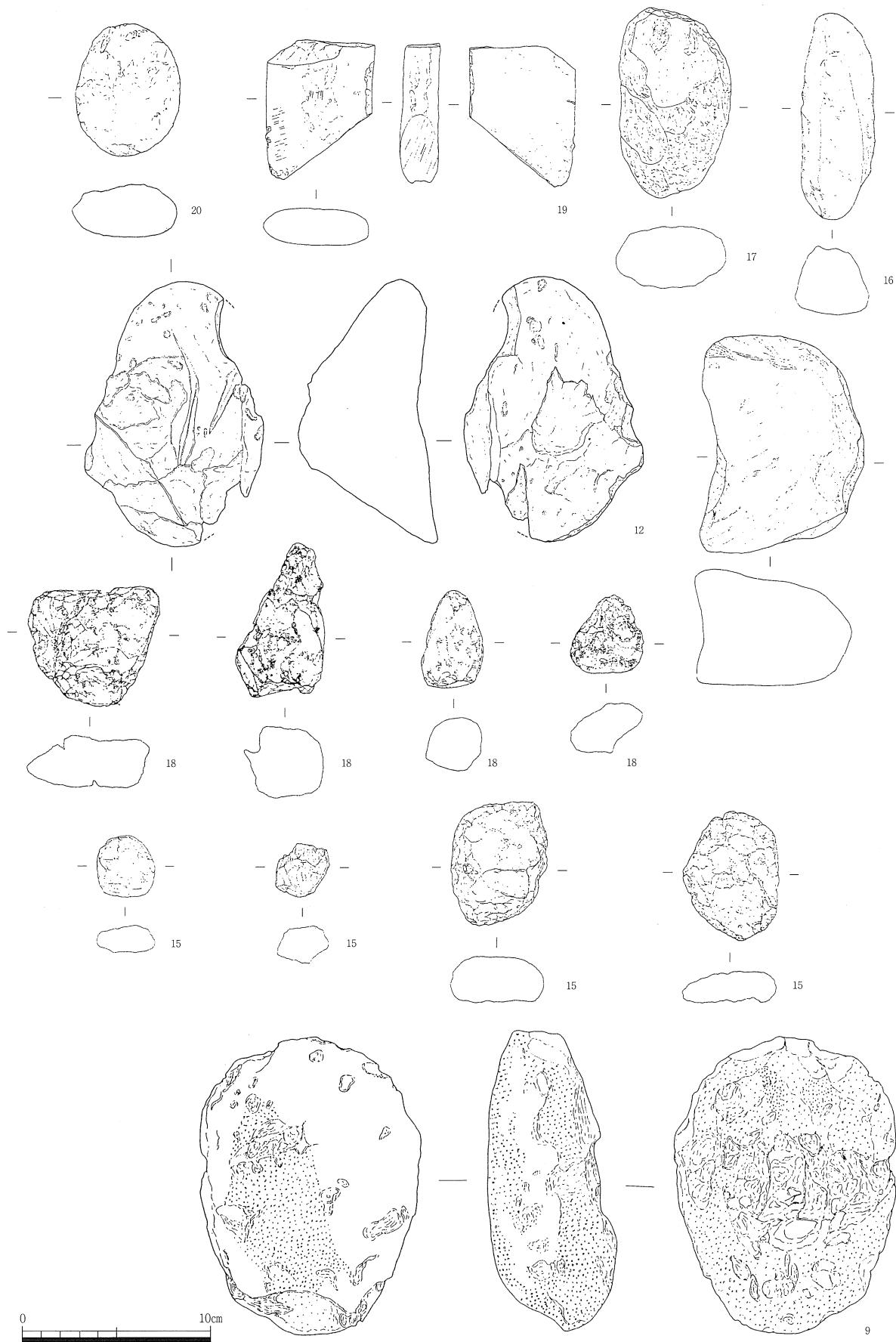


Fig.45 中・四国地方出土の軽石集成 (2) (各文献より、NoはTab.1に同じ)

Tab.1 中・四国地方出土軽石一覧

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	数量	文献
1	湖山第一	鳥取県鳥取市	遺構外		2	原田ほか 1989
2	青木	鳥取県米子市	FSI42	弥生終末	1	清水ほか 1976
3	長瀬高浜	鳥取県西伯郡羽合町			3以上	(財)鳥取県教文財団編 1983
4	青谷上寺地	鳥取県気高郡青谷町	包含層	弥生後期	7	北浦ほか 2001
5	綾羅木郷	山口県下関市	袋状堅穴	弥生前期	4	水島ほか 1981
6	草戸千軒町	広島県福山市	SK3635	14C中～後	1	福島 1994
7	上東	岡山県倉敷市	H-8	弥生後期	1	葛原ほか 1974
8	御堂奥	岡山県倉敷市	溝		1	葛原ほか 1974
9	宮前川北斎院	愛媛県松山市	遺物廃棄遺構	弥生後期	1	作田ほか 1998
10	斎院鳥山	愛媛県松山市	東端一括	弥生後期	1	作田ほか 1998
11	糸大谷	愛媛県今治市			2	竹本ほか 1996
12	旧練兵場	香川県善通寺市	SX128	弥生～古墳	1	本報告
13	大毛島第22区	徳島県鳴門市	SK-01	近世以降	1	松永 1983
14	田村西見当	高知県南国市	貯蔵穴	弥生前期	2	岡本・広田 1976
15	田村遺跡群	高知県南国市	SK6	弥生前期	4	森田 1986a
16	田村遺跡群	高知県南国市	ST3	弥生中期	1	廣田 1986
17	田村遺跡群	高知県南国市	ST6	弥生中期	2	廣田 1986
18	田村遺跡群	高知県南国市	第Ⅲ層	14～15C	4	森田 1986b
19	田村遺跡群	高知県南国市	SR2	弥生中末～後初	1	下村 1986
20	早咲	高知県幡多郡大方町	SB-1	10C	1	廣田 1991

以上が出土している。一遺跡からの出土量が多い事例として、田村遺跡群からの12個がある。鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡では7個、山口県下関市綾羅木郷遺跡の4個、鳥取県東伯郡羽合町長瀬高浜遺跡3個以上と続く。しかし、それ以外の事例は一遺跡から1・2個程度である。結果として、太平洋側と日本海側に多く香川県ではこれまで報告例がないようで、旧練兵場遺跡がはじめての事例となるものである。

軽石は形状はほとんどが自然のままの状態であるが、青谷上寺地遺跡例のように加工して形を整えたもの、鳥取県米子市青木遺跡例・岡山県倉敷市上東遺跡例などに中央部に深い溝が施されるもの、長瀬高浜遺跡例や鳥取県鳥取市湖山第一遺跡のように、器面に浅い溝か数状認められるものなどがある。これらの用途は前述した順に祭祀具、浮子、砥石が想定されよう。

4. おわりに

太平洋側では黒潮に、瀬戸内海西部では豊後水道に、東部では紀伊水道に、日本海側は対馬海流にそれぞれ乗って軽石は漂着するものと考えられる。前述した軽石の出土が日本海側と太平洋側で多いことに海流は無関係ではないだろう。これらの四つのエリアに漂着する軽石の原産地が果たして同一なのか異なっているのか、異なっているとすると、どの程度の割合でどこの産地からどういった経路で漂着するかなど、興味は尽きない。軽石の原産地についても蛍光X線分析など理化学的な検討をおこなえる可能性が高いようであり（森ほか 1992）、今後出土軽石についても試みていく必要があると思われる。

ここで旧練兵場遺跡出土軽石に立ち返ってみると、瀬戸内海に面した旧練兵場遺跡周辺の人にとって軽石は身近な「石材」であったと考えられる。本遺跡出土軽石の用途としてはサイズが片手に収まる程度であること、表面に「V」字溝が認められることなどから粗砥的な砥石が想定されよう。いずれの県も海に面している中国・四国地方では、島根県を除く多くの県では遺物として認識されているようである。報告された資料によれば、少なくとも弥生時代には「石材」として認知され、海岸などに打ち上げられる軽石を必要に応じて採取し、集落内へと持ち込まれ「道具」として利用して来たと考えられる。このような限りなく自然遺物に近い資料からも、遺跡調査の際の担当者の認識によっては、様々な情報が引き出せる可能性を秘めていると思う。

【引用・参考文献】

- 石井 忠 1986『漂着物事典』 海鳥社
- 大賀秀実 1995「軽石製品について」『高島平北』 都立学校遺跡調査会
- 岡本健児・広田典夫 1976『高知県田村西見当遺跡区の発掘』 南国市教育委員会
- 北浦弘人ほか 2001『青谷上寺地遺跡』 3（財）鳥取県教育文化財団
- 葛原克人ほか 1974『山陽新幹線建設に伴う調査』 II 岡山県教育委員会
- （財）鳥取県教育文化財団編1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』 VI （財）鳥取県教育文化財団
- 作田一耕ほか 1998『斎院・古照』 （財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 清水真一ほか 1976『青木遺跡発掘調査報告』 I 鳥取県教育委員会
- 下村公彦 1986「Loc.36A」『田村遺跡群 第5分冊』 高知県教育委員会
- 竹本英樹ほか 1996『糸谷大谷遺跡』 （財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 中西弘樹 1999『漂着物学入門』 平凡社
- 原田雅弘ほか 1989『湖山第1遺跡』 鳥取県教育委員会・（財）鳥取県教育文化財団
- 廣田佳久 1986「Loc.34A」『田村遺跡群 第4分冊』 高知県教育委員会
- 廣田佳久 1991『早咲遺跡』 大方町教育委員会
- 福島政文 1994「4 石製品」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』 II 広島県教育委員会
- 松永住美 1983『徳島県文化財調査概報 昭和56年度』 徳島県教育委員会
- 水島稔夫ほか 1981『綾羅木郷遺跡』 I 下関市教育委員会
- 森慎一・山下浩之・五島政一 1992「相模湾に漂着した小笠原・福德岡の場海底火山起源の軽石」『自然と文化』 15 平塚市博物館
- 森田尚宏 1986a「Loc.16」『田村遺跡群 第2分冊』 高知県教育委員会
- 森田尚宏 1986b「Loc.4」『田村遺跡群第6分冊』 高知県教育委員会

近現代の景観復元と練習用塹壕

1. はじめに

2001年度の調査では昨年度調査に引き続き、陸軍病院関連のと考えられる遺構を検出した。また、それに先行する遺構として溝状遺構を検出し、埋土の状態・出土遺物よりこれらは練習用の塹壕であると考えた。ここでは、検出遺構と建物配置図などより近現代における調査地付近の景観変遷を復元し、不明な点が多い調査地周辺の土地利用の実態に迫ってみたい。

2. 善通寺予備病院第二分院と善通寺陸軍病院臨時第一分院

日清戦争後の明治29（1896）年3月14日、富国強兵政策の一環として従来の七箇師団に加え六箇師団を増設した。この際に新たに善通寺に第十一師団が設立され、これに伴い善通寺衛戍病院も開設された。

明治37（1904）年2月10日の日露戦争の開始によって第十一師団らも動員令が発せられ、これに伴って、善通

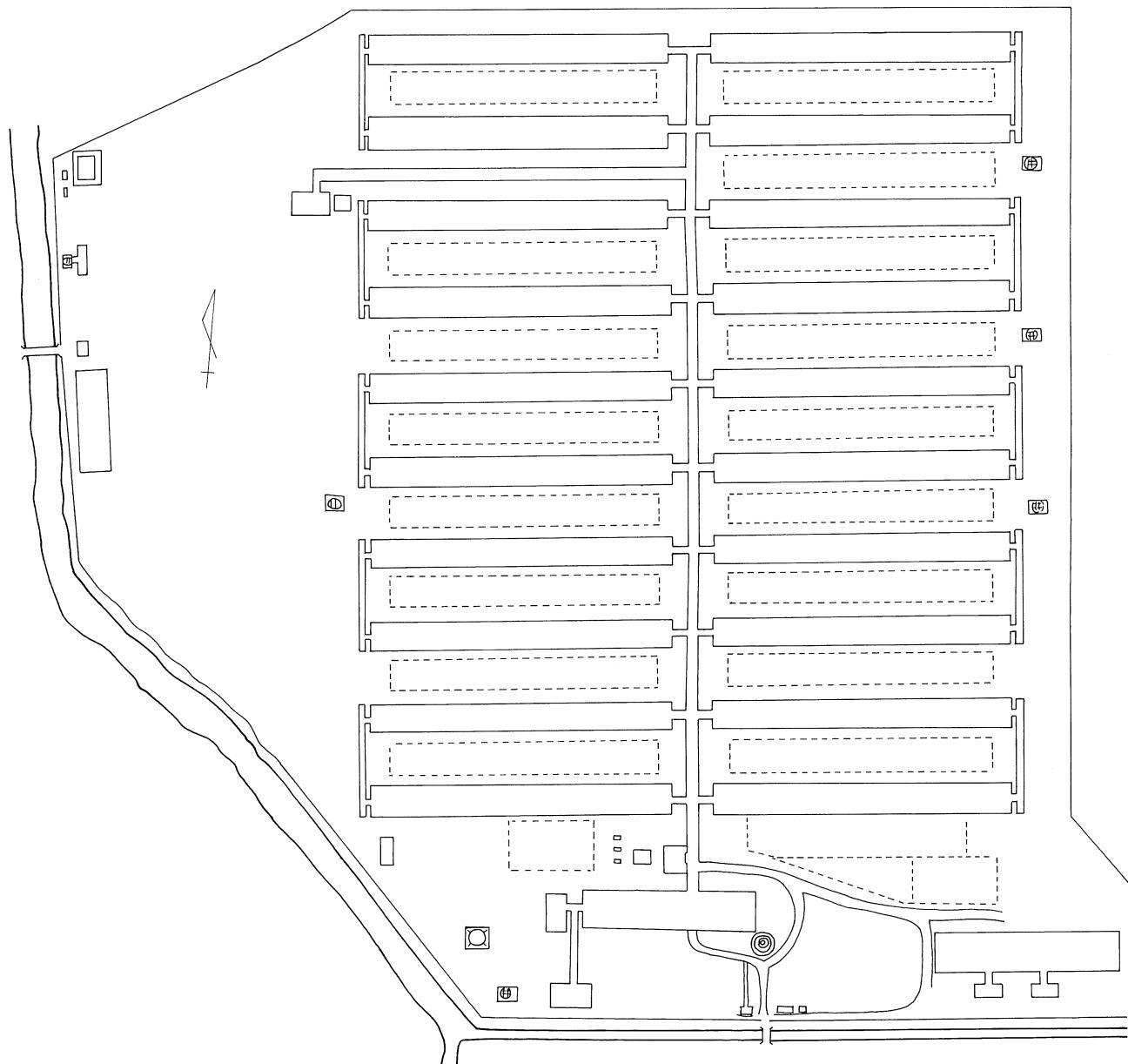


Fig.46 善通寺予備病院第二分院配置概念図（小林 1905 より）



Fig.47 善通寺陸軍病院臨時第一分院建物配置図 (1/3000)

寺衛戍病院は善通寺予備病院と改称し、還送患者の受け入れをおこなうことになった。還送転送患者は増加の一途をたどり、病室不足から分院の建設を余儀なくされた。分院は第一から第五まで開設され、急造の仮舎は114棟にも及んだという。記録によると善通寺予備病院第二分院は、明治37（1904）年9月2日に開設され、明治39（1906）年に閉鎖されている。Fig.46は明治38（1905）年当時の善通寺予備病院第二分院の建物

配置概念図である。日露戦争終結後の明治39年には、病院は再び善通寺衛戍病院へと改名された。日中戦争の勃発によって昭和11（1936）年11月2日に病院は善通寺陸軍病院と改称された。戦争の影響によって患者が増加し、昭和13（1938）年5月31日に善通寺予備病院第二分院がかつて設置された練兵場内に、再び善通寺陸軍病院臨時第一分院が設置された。Fig.47は昭和13（1938）年当時の善通寺陸軍病院臨時第一分院の建物配置図である。これに2000年度と2001年度の調査地点を合成してみた（Fig.48）。2000年度調査地は18病棟に相当し、2001年度調査地は兵舎から炊事場に相当することがわかる。今年度調査で検出したゴミ穴SK005は炊事場のそばに廃棄されたものであったことになる。このように考えると、ゴミ穴出土の遺物には軍用食器・牛乳瓶などが多いことも納得できる。

Fig.49は2000年度調査で検出した礎石立ちの掘立柱建物SB011・SB012・SB013・SB015である。現存する国立善通寺病院南側の道路の角の位置や、弘田川の位置などを参考にFig.46とFig.47両者の建物を比較すると、建物の主軸方向は善通寺予備病院第二分院の方が、善通寺陸軍病院臨時第一分院に比べて北東に振っていることが看取される。善通寺予備病院第二分院は仮舎であったこと、建物方位などからこれらの建物が明治時代の善通寺予備病院第二分院の一部である可能性が高い。



Fig.48 陸軍病院と2000・2001年度調査区の関係

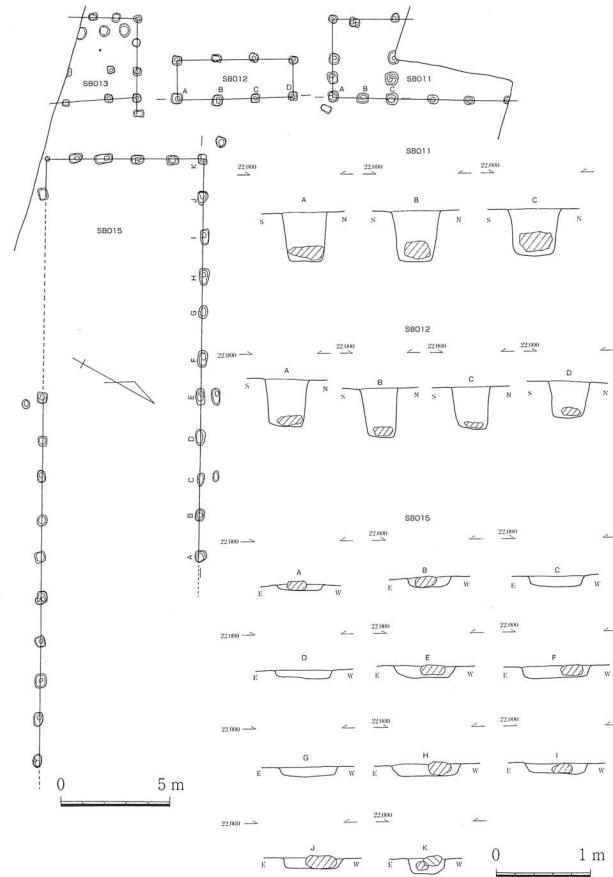
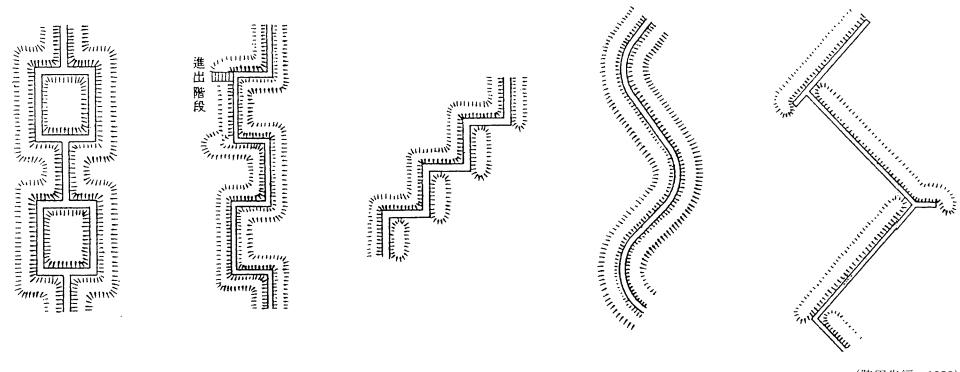
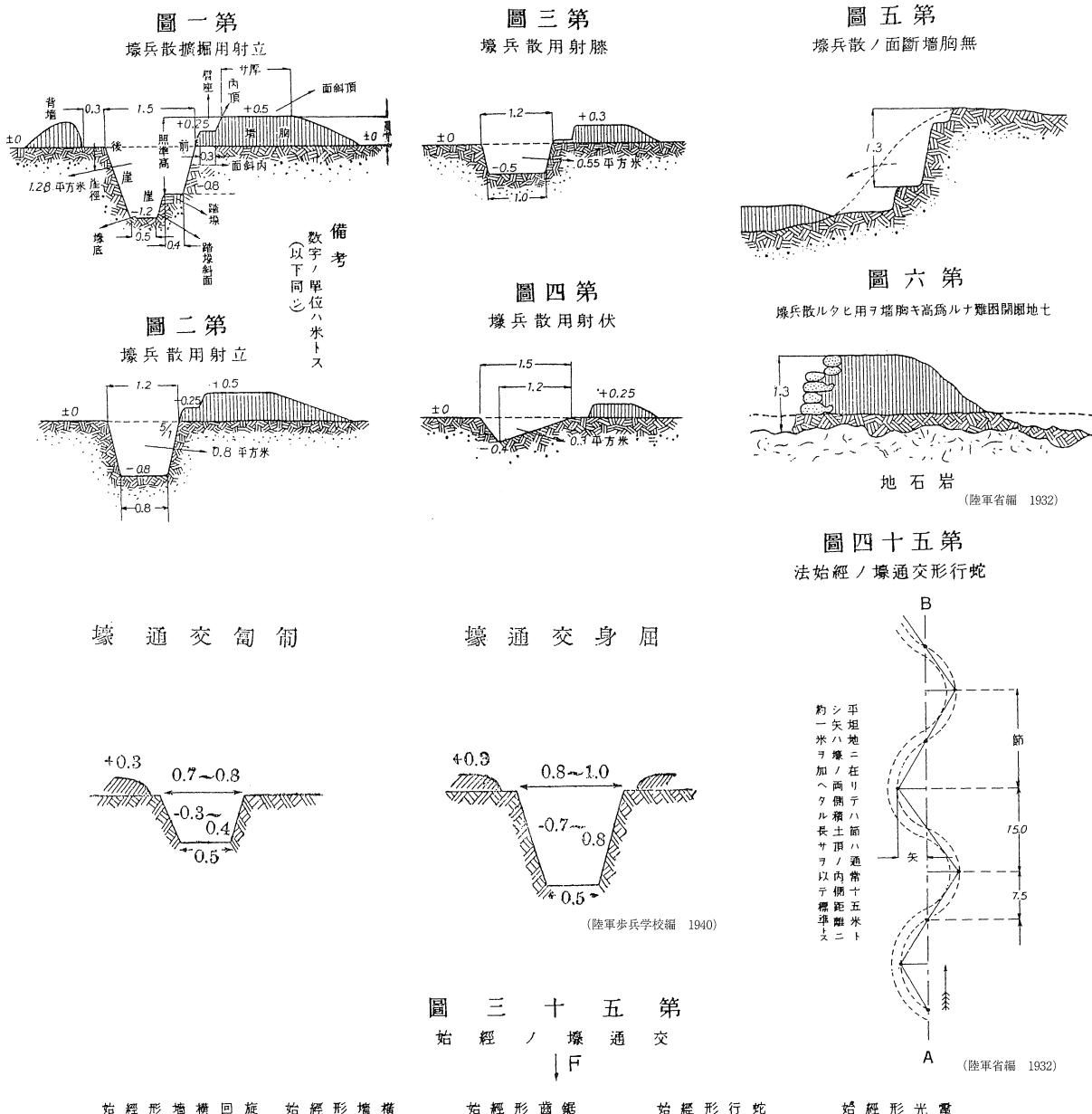


Fig.49 2000年度調査検出掘建柱建物跡



(陸軍省編 1932)

Fig.50 昭和期の塹壕掘削マニュアル

今後、実態が不明である善通寺予備病院第二分院の建物配置が、練兵場遺跡の調査で明らかになることが期待される。

3. 練習用塹壕の検討

『善通寺市史』3に掲載されている「第十一師団善通寺練兵場（昭和初期）」というタイトルの写真は、調査地が南方向から撮影されている。これを詳細に観察すると、調査地一帯まで練兵場として利用されており建物は見当らない。撮影時期は善通寺予備病院第二分院が取り壊された明治39年から、善通寺陸軍病院臨時第一分院が建設される前の昭和13年以前までと考えられる。つまり、この間調査地の空間は練兵場として利用されていたことが前述の写真からもわかる。

そこで今回検出された塹壕が問題となって来る（Fig.22）。塹壕は善通寺陸軍病院臨時第一分院の炊事場の建物関連遺構に切られており、それ以前のものと考えられることより、練兵場が拡大していた時に掘削された可能性が高くなる。当時は練兵場内では実戦に備えて練習用に塹壕が掘削されることは一般的な訓練であったという。訓練は明治時代以降、陸軍省が設定する詳細なマニュアルに基づいておこなわれていたようである。『野戦築城教範』（陸軍省編 1904、1932）や『歩兵練習参考』（陸軍歩兵学校編 1940）は実戦のためのマニュアルであるが、イラスト入りで詳細な塹壕掘削方法が解説されている（Fig.50）。今回検出した塹壕の幅は1.1から1.2mであり、マニュアルに描かれた幅とほぼ一致する。以上の諸事実より、これらの塹壕は練習用の塹壕であることが判明した。また、塹壕はその方向から南東から来る敵を想定して掘削され、訓練がおこなわれた可能性が高い⁽¹⁾。

4. おわりに

「あるものを引き出す作業は、別のあるものを隠す作業にほかならない」（木下 2002）、とう言葉は考古学にも該当するだろう。地域史としての考古学を考慮するならば、過去は現在と連結しており一昔前までの資料は地域史の解明に有効であるだろう。しかしながら、旧練兵場遺跡のような弥生時代～近現代の複合遺跡の場合は、必然的に古い時代の遺構・遺物の調査を優先するため、近現代の遺構・遺物はデータ化できない場合が多い。何らかの形で記録しておくことが必要ではないか。

今回、景観復元を試みるにあたって多くの地元の古老や郷土史家の方々に聞き取りをおこなったり、資料提供をしていただいた。しかし、この空間が戦前にどのように利用されていたかを明言できる方は、もう僅かしか存在しない。また、当時の建物配置と現在の建物配置の厳密な関係を示す基準があまり残されておらず、明治時代の善通寺予備病院第二分院は言うに及ばず、昭和の善通寺陸軍病院臨時第一分院でさえも忘却され、現在では不明となってしまった事項は多い。このような場合、考古学による遺構・遺物の情報は有効であると考えられる。近現代考古学資料は、未だ歴史化していないいわばまだ半熟卵である。近現代の遺構・遺物の検討は、地域史解明に活用することによってはじめて歴史化すると考える。

【註】

(1) 当研究所坪井清足所長のご教示による。

【引用・参考文献】

木下直之 2002 『世の途中から隠されていること－近代日本の記憶－』 晶文堂

国立善通寺病院編 1950 『火災豫防並に防火業務規定』

小林儀衛 1905 『緑の零』 善通寺豫備病院第二分院

高橋芳邦・角田一巳 1994 「陸軍の病院から国立善通寺病院へ」『善通寺市史』3 善通寺市

陸軍省編 1904 『野戦築城教範』 川流堂

陸軍省編 1932 『野戦築城教範』 川流堂

陸軍歩兵学校編 1940 『歩兵教練ノ参考（中隊教練小隊）』3 陸軍歩兵學將校集会所

旧練兵場遺跡出土の蹄鉄

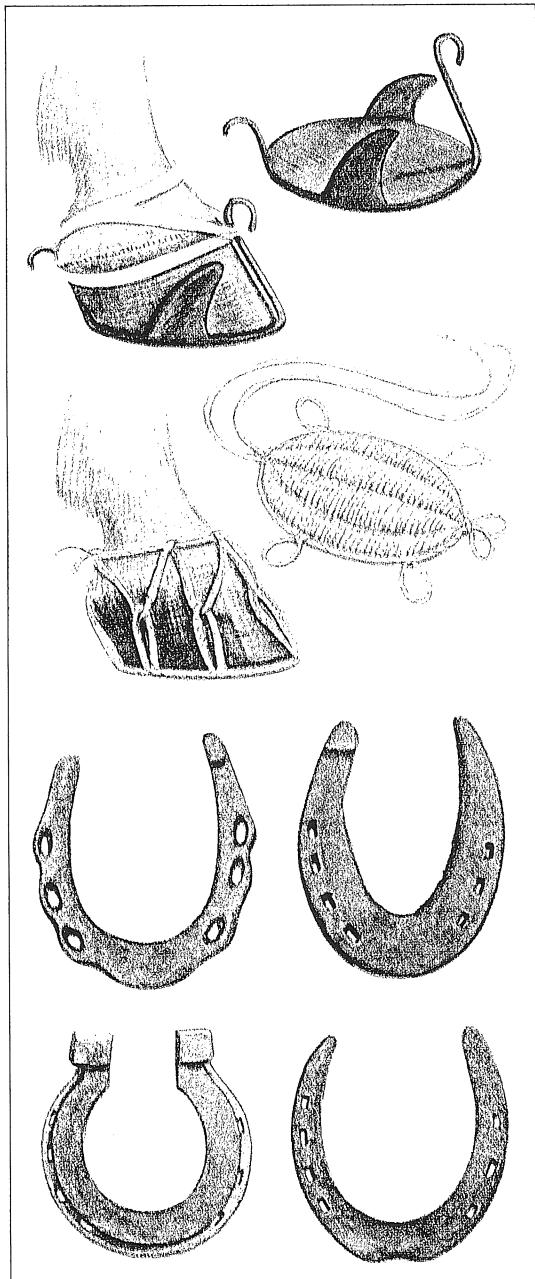
1. はじめに

香川県善通寺市旧練兵場遺跡は、戦前まで陸軍第十一師団が駐屯していた場所にある。今回の調査で蹄鉄が一点溝SD0011より出土した。本資料は調査地における陸軍の活動と深く関係するのではないかと考えられる。そこで、管見にふれた遺跡出土蹄鉄を集成し遺物からみた蹄鉄の文化史に迫ってみたい。

ローマ時代にソレアと呼ばれる馬用の履物が出現するが、これは直接現在の蹄鉄の祖型ではないと考えられている。現在の形状は、中世には既にヨーロッパで完成していた（Fig.51）。蹄鉄がわが国にはじめて伝えられたのは、18世紀前半にオランダ人によって八代将軍徳川吉宗に納められた時であるとされる。しかし、この段階では日本には洋式の蹄鉄を製作できる技術者が存在していなかったため、広まることはなかった。一般的に蹄鉄が広まるのは明治時代以降であると考えられる。蹄鉄は消耗品であるため、伝世資料は比較的少なく遺跡から出土する資料は蹄鉄の変遷を検討する上で意義があるのでないかと考える。

2. 各地出土の蹄鉄

確認できた出土蹄鉄は北は青森県から南は宮崎県にまで及ぶ、19遺跡33個である（Fig.53・54、Tab.2）。特に注目されるのは、東京都目黒区大橋遺跡である。この遺跡も本遺跡と同様に、練兵場が置かれた地であり、陸軍関係の遺構・遺物も多く報告されている（小林ほか 1997、横山 1984）。また、蹄鉄には馬蹄と牛蹄があり、左右二つよりなるものが牛蹄であると考えられる。戦前においては牛にも装蹄がなされていたのである。



古代の蹄鉄：鉄(ローマ)と草を編んだ(ギリシャ)馬用のサンダル
釘打ち蹄鉄：(左から)中世、チューダー／ステュアート朝時代、鍵穴型、19世紀

Fig.51 蹄鉄の歴史 (Webber 1994より)

3. 陸軍と蹄鉄

明治時代～戦前にかけて軍隊で軍馬の果たした役割は大きく（武市 1999）、蹄鉄は一方では競走馬が、他方では軍馬が蹄鉄の文化を推進したと評価できる。陸軍により明治6（1873）年にフランス式装蹄法が導入された。フランス式蹄鉄とは蹄鉄に穴だけがあいているものである。しかし、陸軍は装蹄法を明治25（1892）年にフランス式からドイツ式に変更した。ドイツ式蹄鉄の特徴は穴だけでなく接地面に溝があることである。戦前まで基本的に手作りで製作されていた蹄鉄であるが、明治30年代になると、大量の蹄鉄を必要とする軍馬は工場で生産された器械製蹄鉄を主に使用するようになる。陸軍は軍馬に装蹄する蹄鉄について研究をおこないマニュアル化をおこなっている（Fig.52）。このようにフランスの思想家フーコーが指摘した、人間を規律化・訓練化するための要素の一つである、戦前の

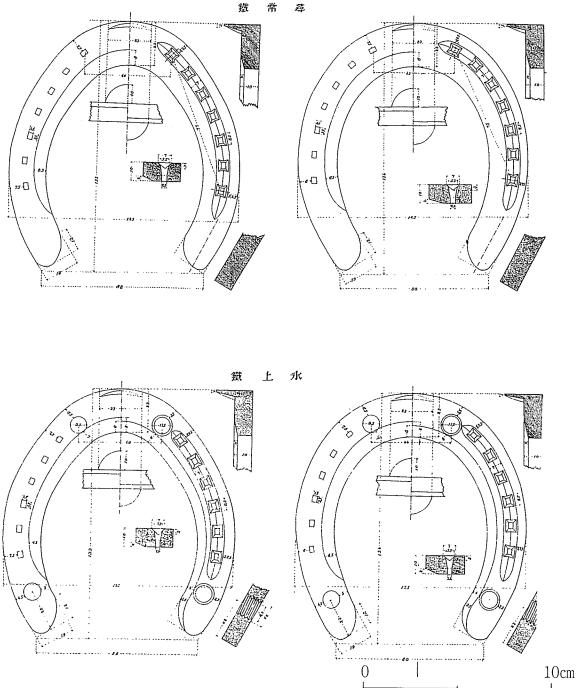


Fig.52 陸軍の蹄鉄マニュアル (陸軍省 1910より)

Tab.2 遺跡出土蹄鉄一覧

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	種別	文献
1	新町野	青森県青森市	第4号溝跡	馬蹄	笛森ほか 2000
2	屋敷前	福島県いわき市	遺構外	馬蹄	中山ほか 1999
3	白倉下原・天引向原	群馬県甘楽郡甘楽町	遺構外	牛蹄か	木村ほか 1997
4	内藤町	東京都新宿区	A-132号遺構	馬蹄	井汲ほか 1992
5	新宿一丁目	東京都新宿区	第27号遺構	馬蹄	徳澤ほか 2001
6	市谷加賀町二丁目	東京都新宿区	第A-001号遺構	馬蹄	池田ほか 1997
7	港区No.91遺跡	東京都港区	1号土坑	馬蹄	松本ほか 1991
8	汐留	東京都港区	6J-105	馬蹄	福田ほか 1997
9	汐留	東京都港区	6J-006	馬蹄	福田ほか 1997
10	汐留	東京都港区	6K-0292	馬蹄	福田ほか 1997
11	汐留	東京都港区	6K-0078	馬蹄	福田ほか 1997
12	汐留	東京都港区	遺構外	馬蹄	斎藤ほか 2000
13	汐留	東京都港区	遺構外	馬蹄	斎藤ほか 2000
14	大橋	東京都目黒区		広頭連尾蹄鉄	横山 1984
15	大橋	東京都目黒区	近代面一括	馬蹄	小林ほか 1997
16	本郷	東京都葛飾区	遺構外	馬蹄	吉井ほか 1995
17	赤羽台	東京都板橋区		馬蹄	大谷編 1992
18	落川・一の宮	東京都日野市	2-1号用水路	馬蹄	持田ほか 1999
19	落川・一の宮	東京都日野市	3-1号用水路	牛蹄	持田ほか 1999
20	落川・一の宮	東京都日野市	3-1号用水路	牛蹄	持田ほか 1999
21	落川・一の宮	東京都日野市	遺構外	牛蹄	持田ほか 1999
22	原口	神奈川県平塚市	B区K70号溝状遺構	馬蹄	長谷川ほか 1997
23	原口	神奈川県平塚市	C区K14号道状遺構	馬蹄	長谷川ほか 1997
24	原口	神奈川県平塚市	C区遺構外	牛蹄	長谷川ほか 1997
25	原口	神奈川県平塚市	E区遺構外	牛蹄	長谷川ほか 1997
26	原口	神奈川県平塚市	F区K41号溝状遺構	馬蹄	長谷川ほか 1997
27	上粕屋・〆引北	神奈川県伊勢原市	3号道	馬蹄か	宍戸ほか 1999
28	田井座	長野県飯田市	遺構外	馬蹄	馬場 1992
29	明石城武家屋敷跡	兵庫県明石市	包含層	馬蹄	山下ほか 1992
30	初田館跡	兵庫県多紀郡丹南町	包含層	馬蹄	山上ほか 1992
31	旧練兵場	香川県善通寺市	SD001	馬蹄	本報告
32	前田	宮崎県宮崎市	包含層	馬蹄か	東 1998
33	牧の原第2	宮崎県都城市	包含層	馬蹄	久木田 1999

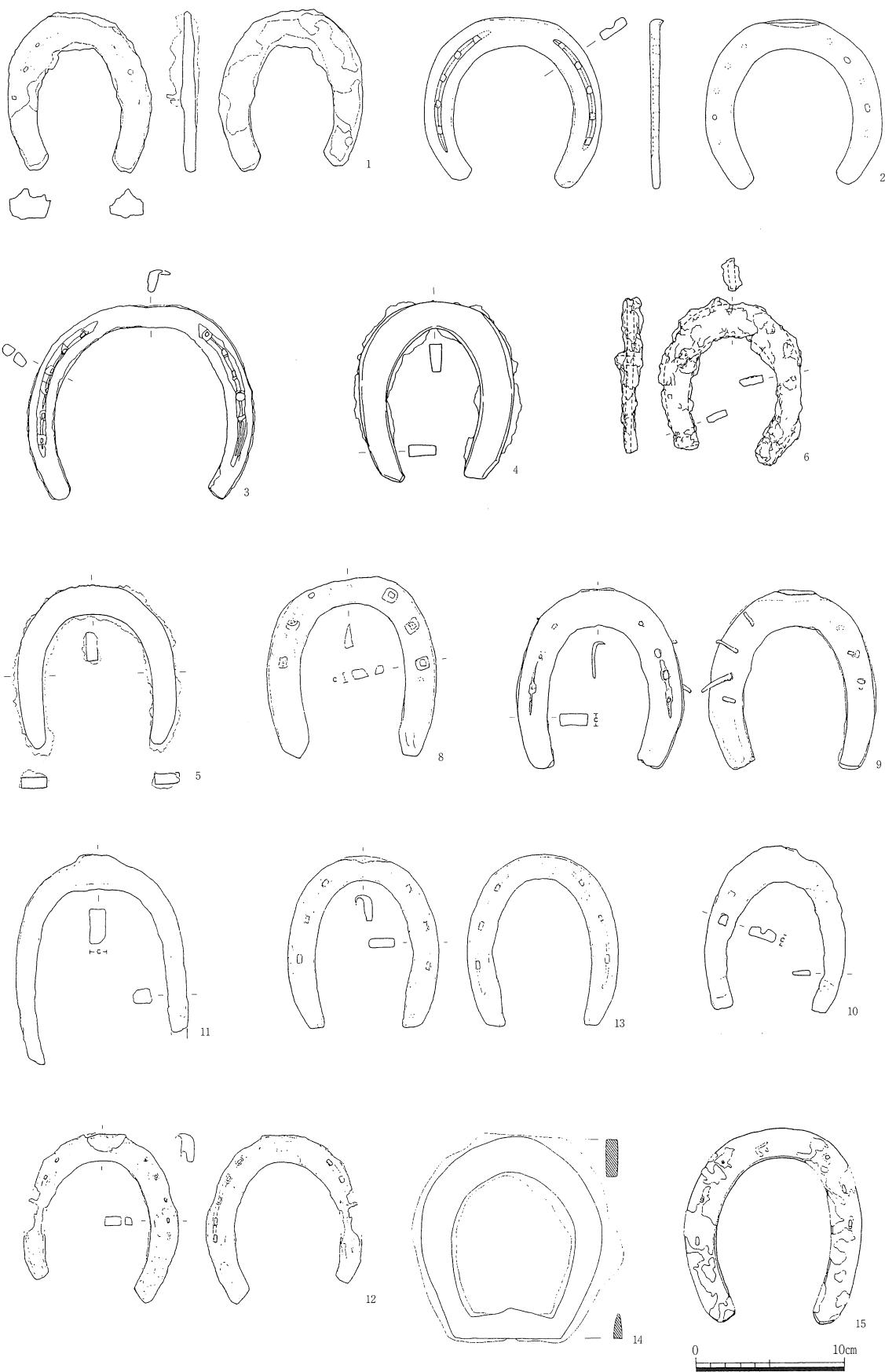


Fig.53 遺跡出土の蹄鉄集成（1）（各文献より、NoはTab.2に同じ）

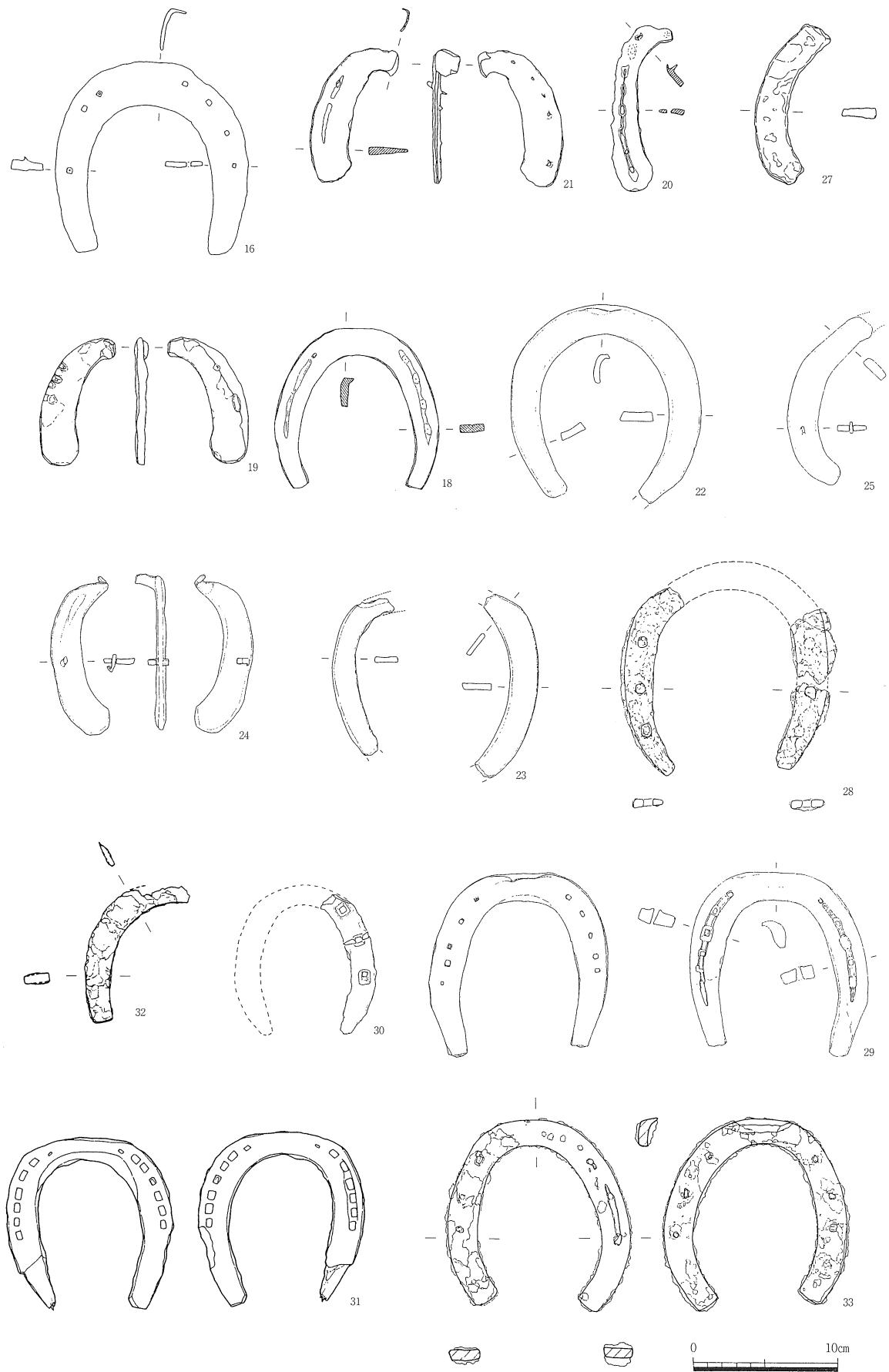


Fig.54 遺跡出土の蹄鉄集成 (2) (各文献より、NoはTab.2に同じ)

兵舎では、人が使用する軍馬にまでマニュアル化が及んでいたことが見て取れる。

旧練兵場遺跡出土の蹄鉄について馬の博物館・末崎真澄氏及びJRA馬事公苑・関口 隆氏に検討していただき、コメントをいただいた。これによると、本資料は形状や厚さ、溝の位置、釘孔（穴）の数から考えると、陸軍（旧式）ドイツ式軍用蹄鉄（器械製である可能性が高い）を右前蹄に装着した蹄鉄であると考えられるとのことである。

付論2でみたように、調査地は明治時代後葉から昭和初期までは拡大した練兵場として、主に訓練がおこなわれていたと考えられる。出土した溝SD001は練習用塹壕に切られる関係にあることより、本資料は明治時代後葉～大正時代に軍馬に装蹄されていた可能性が高いと考えられる。

4. おわりに

戦前は軍部以外の人間にとって、軍馬やその関係については民俗学的に研究対象とすることが、タブー視されていた感がある（川村 1998）。このため、蹄鉄を民俗資料として保存・記録したり、研究をするといった蓄積があまり無いまま、現代では軍馬は日本では原則的にその役割を終えてしまった。この埋もれつつある軍馬の蹄鉄に遺跡出土蹄鉄を手がかりに検討していくことで、タイポロジーなどにより制作年代などの検討が行える可能性を若干提示してみた。今後は場を改めて戦跡考古学における遺構論や旧日本軍関連の文献と絡めながら、出土資料としての蹄鉄を総合的に研究していきたい。

【引用・参考文献】

- 井汲隆夫ほか 1992 『内藤町遺跡』 新宿区内藤町遺跡調査会
- 池田悦夫ほか 1997 『市谷加賀町二丁目遺跡』 I 新宿区市谷加賀町二丁目遺跡調査団
- Webber, Toni 1994 『Feet and Snoe』 The Kenilworth Press (山田和子訳 1996 『蹄と蹄鉄』 緑書房)
- 大谷 猛編 1992 『赤羽台遺跡』 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
- 大友源九郎 1933a 「蹄鉄工の養成と馬の装蹄沿線概要」『馬の世界』 13-9 馬の世界社
- 大友源九郎 1933b 「蹄鉄工の養成と馬の装蹄沿線概要（続）」『馬の世界』 13-10 馬の世界社
- 加茂儀一 1981 『騎行・車行の歴史』 法政大学出版局
- 川村邦光 1998 「戦争と民俗／民俗学」『日本民俗学』 215 日本民俗学会
- 久木田浩子 1999 『牧の原第2遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター
- 木村収ほか 1997 『白倉下原・天引向原遺跡』 V (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 近衛騎兵聯隊附蹄鉄工長 1902 「獨逸器械製蹄鉄試験成績」『陸軍蹄鉄学会会誌』 6 陸軍蹄鉄学会
- 小林謙一ほか 1998 『大橋遺跡』 目黒区大橋遺跡調査会
- 斎藤 進ほか 2000 『汐留遺跡』 II (財) 東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター
- 笛森一朗ほか 2000 『新町野遺跡』 II 青森県教育委員会
- 宍戸信悟ほか 1999 『上柏屋・上尾崎遺跡（No.10） 上柏屋・メ引北遺跡（No.11） 上柏屋・メ引西遺跡（No.12）』 (財) かながわ考古学財団
- 武市銀治郎 1999 『富国強馬』 講談社
- 徳澤啓一ほか 2001 『新宿一丁目遺跡』 I (財) 新宿区生涯学習財団
- 中山雅弘ほか 1999 『屋敷前遺跡』 (財) いわき市教育文化事業団
- 長谷川厚ほか 1997 『原口遺跡』 (財) かながわ考古学財団
- 馬場保之 『田井座遺跡』 飯田市教育委員会

東憲章 1998『前田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
福田敏一ほか 1997『汐留遺跡』（財）東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター
松本健ほか1991『港区No.91遺跡』南麻布福祉施設建設用地内遺跡調査会
持田友宏ほか 1999『落川・一の宮遺跡』I 落川・一の宮遺跡（日野3・2・7号線）調査団
Foucault,M 1975『Surveiller et punir』Gallimard（田村俊訳 1977『監獄の誕生』新潮社）
山上雅弘ほか 1992『初田館跡』兵庫県教育委員会
山下史朗ほか 1992『明石城武家屋敷跡』兵庫県教育委員会
渡辺昌美・渡部武 1998「蹄鉄の起源と発達」『世界大百科事典』日立デジタル平凡社
吉井邦子ほか 1995『本郷遺跡』V 葛飾区遺跡調査会
横山昭一 1984『大橋遺跡』目黒区大橋二丁目遺跡調査会
陸軍省 1910『陸軍蹄鉄術教範改正草案』厚生堂

【追記】

兵庫県神戸市北神第5地点遺跡で、蹄鉄2点が出土していることを知った。補っておきたい。

丸山潔・前田佳久1988「北神ニュータウン内遺跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

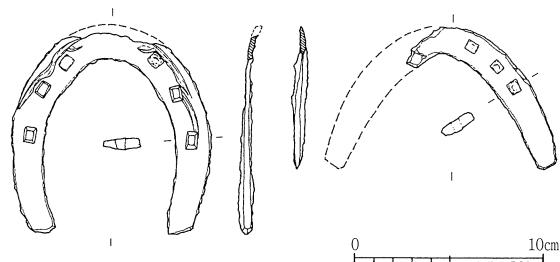


Fig.55 遺跡出土の蹄鉄集成（3）（丸山、前田1988より）

付表 旧練兵場遺跡遺構番号一覧表 (1)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
1	SD001	流路	明治時代	A~I 1~6
2	SD002	流路	明治時代	LM 1~8
3	SD003	流路	近世	M~O 7~8
4		溝	炭が入る。	A 1
5	SK005	土坑	炭が多量に入る。(攪乱1から変更)	F 6
6	SK006	土坑	炭が多量に入る。SK005と同時期か?(攪乱2から変更)	BC 6
7		ピット	新しい	A 2
8	SP008	ピット	弥生時代	A 3
9		ピット	弥生時代	B 3
10		ピット	弥生時代	B 3
11	SD011	溝	練兵場期の塹壕	B 3
12	SD012	溝	練兵場期の塹壕	A 3~
13		ピット	弥生時代	A 4
14		ピット	新しい。ガラス出土。	A 5
15		ピット	弥生時代	B 5
16	SD016	溝	練兵場期の塹壕	B 2
17		ピット	弥生時代	B 2
18		ピット	弥生時代	B 2
19	SX019	柱穴状遺構	弥生時代	B 2
20	SD020	溝	練兵場期の塹壕	A~P 2~3
21		土坑	近現代	B 3
22	SX022	柱穴状遺構	弥生時代?	BC 3
23		ピット	新しい	A 4
24	SD024	溝	練兵場期の塹壕	C 3
25	SX025	柱穴状遺構	弥生時代	C 3
26		ピット	新しい	C 3
27	SX027	柱穴状遺構	弥生時代	C 4
28		ピット	新しい	AB 4
29		土坑	新しい	AB 4
30		土坑	新しい	BC 4・5
31		ピット	弥生時代。S-30に切られる。	B 5
32		土坑	ごく最近のもの	C 5
33		土坑	ごく最近のもの	C 5
34		土坑	SX025の柱抜き取り痕か?	C 3
35		ピット	弥生時代	B 6
36		ピット	弥生時代	C 6
37		ピット	弥生時代	C 6
38		ピット	弥生時代	C 5
39		ピット	弥生時代	D 5
40	SX040	柱穴状遺構	弥生時代以降のもの。	F 2
41		土坑	弥生時代以降	G 2
42		溝	明治時代頃の埋め立てか? SD002の続き。欠番。	I~K 1~3
43	SD043	溝	練兵場期の塹壕	F2~J3
44		ピット	弥生時代	F 2
45		柱穴	弥生時代以降。根石有り。	G 2
46		ピット		GH 2
47		ピット	弥生時代以降。焼土塊を含む。	H 2
48		柱穴状遺構	弥生時代以降	G 2
49		柱穴状遺構	弥生時代以降	G 2
50		ピット		G 3
51		柱穴状遺構	弥生時代以降	H 3
52		柱穴状遺構	弥生時代以降。根石有り。	G 2
53		ピット		G 2
54		ピット	弥生時代以降	G 1
55		溝	弥生時代	GH 2・3
56		柱穴状遺構	弥生時代以降	H 2
57		ピット	弥生時代以降	G 2
58		ピット	弥生時代以降	G 2
59		ピット	弥生時代以降	H 2
60		ピット	弥生時代以降	H 2
61		柱穴状遺構	弥生時代	I 2
62		ピット	弥生時代	HI 1・2
63		ピット	弥生時代	H 1

付表 旧練兵場遺跡遺構番号一覧表 (2)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
64		柱穴状遺構	弥生時代	G 1・2
65	SX065	柱穴状遺構	弥生時代。焼土塊有り。	H 1・2
66		柱穴状遺構	弥生時代。根石有り。	H 2
67		柱穴状遺構	弥生時代	H 2
68		柱穴状遺構	弥生時代	H 3
69	SX069	柱穴状遺構	弥生時代。焼土塊有り。	H 3
70		土坑	弥生時代以降。S-73の続きか?	I 3
71		土坑	弥生時代以降	H 3
72	SD072	溝	練兵場期の塹壕	I~K 3・4
73		溝	弥生時代以降	IJ 2・3
74		土坑	弥生時代	J 3
75		土坑	弥生時代以降	HI 3・4
76		ピット	弥生時代以降	I 2
77		ピット	弥生時代以降	I 2
78		ピット	弥生時代以降	I 2
79		柱穴状遺構	弥生時代以降	H 4
80		ピット	弥生時代以降	I 2
81		ピット	弥生時代	I 2
82		土坑	弥生時代。柱穴か?	I 2・3
83		ピット	弥生時代	J 3
84		柱穴状遺構	弥生時代	I 3
85		ピット		I 3
86		土坑	弥生時代	J 3
87		ピット	弥生時代。S-84に切られる。	I 3
88		ピット	弥生時代以降	I 2
89		柱穴状遺構	弥生時代以降。根石有り。	I 2
90		ピット	弥生時代以降	I 2
91		ピット	弥生時代以降	I 3
92		ピット	弥生時代	K 3
93		ピット	弥生時代	J 3
94		ピット	弥生時代	I 3
95		ピット	弥生時代以降	I 3
96		ピット	弥生時代以降	I 3
97	SD097	溝	練兵場期の塹壕	H~K 5
98		溝	近世末か?	H 5・6
99		ピット	弥生時代以降	K 3
100		ピット	弥生時代	I 3
101		ピット	弥生時代	I 3
102	SD102	溝	練兵場期の塹壕	JK 6
103		土坑	攪乱	J 6
104	SD104	溝	練兵場期の塹壕	H~L 5・6
105	SD105	溝	練兵場期の塹壕	H~K 4
106		土坑	弥生時代以降	I 4
107		ピット	弥生時代	J 2
108	SX108	柱穴状遺構	弥生時代	K 3
109	SX109	柱穴状遺構	弥生時代以降	J 4
110		柱穴状遺構	弥生時代	J 4
111		柱穴状遺構	弥生時代	H 2・3
112	SX112	柱穴状遺構	弥生時代以降	K 3
113		ピット	弥生時代	J 3
114	SD114	溝	土管入り。練兵場期のもの。	JK 5
115		ピット	弥生時代	K 4
116		ピット	弥生時代	I 4
117		土坑	新しい攪乱	K 6
118	SK118	土坑	新しい?	K 4
119		土坑	新しい攪乱	K 5
120		溝	土管入り。	K 4
121		溝	近代	K 5
122		土坑	弥生時代。S-110に切られる。	J4、K4
123		土坑	弥生時代以降	J 4
124		土坑	弥生時代。S-110に切られる。	J 4
125		溝	SD003の肩か?	K 6~7、L 6~7
126	SX126	柱穴状遺構	弥生時代。S-110、S-123に切られる。	J 4

付表 旧練兵場遺跡遺構番号一覧表 (3)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
127		土坑	弥生時代	K 4
128	SX128	柱穴状遺構	弥生時代以降	J 6
129		ピット	弥生時代。SX128に切られる。	J 6
130		ピット	弥生時代以降	K 5
131		ピット	弥生時代以降	K 5
132		ピット	弥生時代	K 4
133		ピット	弥生時代。SD102に切られる。	I 6
134		柱穴状遺構	弥生時代	J 5
135		土坑	弥生時代以降。SD072に切られる。	J 4
136		ピット	弥生時代以降	J 4
137		溝	練兵場期のものか?	J 4
138		柱穴状遺構	弥生時代	L 2、M 1~2
139	SD139	溝	練兵場期の塹壕	M 3、N 2~3
140		溝	近現代	M 1、N 1
141		溝	近現代	M 2
142		ピット	弥生時代	K 3
143		ピット	弥生時代	K 3
144		ピット	弥生時代	I 5
145		ピット	弥生時代	H 4
146		ピット	弥生時代	I 5
147		ピット	弥生時代	I 6
148		ピット	弥生時代	J 6
149		ピット	弥生時代	J 6
150		ピット	弥生時代	J 6
151		ピット	弥生時代	J 6
152		ピット	弥生時代	J 6
153		ピット	弥生時代	K 3
154		ピット	弥生時代	K 5
155		ピット	弥生時代	J 5
156		ピット	弥生時代。S-119に切られる。	K 5
157		ピット	弥生時代。S-110、S-123に切られる。	J 3
158		ピット	弥生時代	J 6
159		ピット	弥生時代	J 6
160		ピット	弥生時代	J 3
161		溝	近世以降	M~O 5
162		ピット	弥生時代	K 1
163		ピット	弥生時代	K 2
164		ピット	攢乱	N 5
165		ピット	攢乱	N 4
166		土坑	攢乱	N 4
167		土坑	攢乱	N 4
168		土坑	攢乱	N 4
169		ピット	弥生時代	J 6
170	SH170	竪穴住居	弥生時代後期。SH180に切られる。a~j。	MN 2
171		柱穴	近現代	L 2
172		柱穴	弥生時代	L 2
173		ピット	弥生時代?	K 1
174	SX174	柱穴状遺構	弥生時代	L 2
175	SX175	柱穴状遺構	弥生時代以降	L 2
176		ピット	弥生時代	L 1
177		ピット	弥生時代	L 2
178	SD178	溝	弥生時代。SX175に切られる。	L 2
179		溝	弥生時代	N 2
180	SH180	住居跡	隅丸方形。庄内式期。a~i。	M·N 2~4
181		ピット	新しい	N 2
182		ピット	弥生時代	C 6
183		ピット	新しい	O 2
184		土坑	弥生時代。S-183に切られる。	O 1·2
185		ピット	弥生時代以降	M 2
186		ピット	弥生時代以降	M 2
187		柱穴状遺構	弥生時代	N 1·2
188		ピット	弥生時代以降	O 1·2
189		ピット		M 2
190	SX190	柱穴状遺構	弥生時代?炭多く入る。	N 2

付表 旧練兵場遺跡遺構番号一覧表 (4)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
191		ピット	弥生時代以降	O 2
192		ピット	弥生時代以降	W 2
193		ピット	弥生時代以降	W 2
194		ピット	弥生時代	N 2
195		ピット	弥生時代	N 2
196		ピット	弥生時代	O 3
197		ピット	弥生時代	K 4
198		ピット	弥生時代	N 2
199		ピット	弥生時代	N 3
200		ピット	弥生時代。SH180の主柱穴。	N 3
201		ピット	弥生時代以降	O 3
202		ピット	弥生時代以降	O 3
203		ピット	弥生時代	N 4
204		ピット	弥生時代	N 4
205		ピット	弥生時代以降	O 4
206		ピット	弥生時代以降	O 4
207		ピット	弥生時代以降	N 5
208		ピット	弥生時代以降	O 4
209		柱穴	弥生時代。SB250-aに変更。	O 5
210	SX210	柱穴状遺構	弥生時代	N 5
211		ピット	弥生時代	M 5
212		ピット	弥生時代以降	O 4
213		ピット	弥生時代以降	O 4
214		ピット	弥生時代以降	N 4
215	SX215	柱穴状遺構	弥生時代以降	N 4
216		ピット	弥生時代	L 2
217		ピット	弥生時代？石をひいてある。	M 4
218		ピット	弥生時代以降	N 4
219		ピット	弥生時代以降	N 4
220		ピット	弥生時代以降	O 4
221		ピット	弥生時代以降	O 4
222		ピット	弥生時代以降	O 4
223		ピット	弥生時代以降。石をひいてある。	N・O 5
224		ピット	弥生時代以降	N 4
225		ピット	近世以降	M 3
226		ピット	近世以降	M 4
227		ピット	弥生時代以降	O 4
228	SK228	ピット	地鎮跡(昭和時代)	R 3
229		溝	擾乱。ごく最近のもの。	P 2・3
230	SH230	住居跡	隅丸方形。庄内式期。a～n。	PQR 2～4
231	SD231	溝	練兵場期の塹壕	P～J 3
232		ピット	弥生時代	P 2
233		ピット	弥生時代	P 3
234		ピット	弥生時代	P 3
235		ピット	弥生時代以降	Q 4
236		ピット	弥生時代以降	P 4
237		ピット	弥生時代以降	P 4
238		土坑	弥生時代	Q 1・2
239		ピット	弥生時代以降	Q 2
240	SX240a・b	柱穴状遺構	弥生時代。a・b。	P 2
241		ピット	古墳時代	P 3
242		柱穴状遺構	弥生時代	P 4
243	SK243	土坑	弥生時代以降	P 2
244		ピット	弥生時代以降	P 4
245		ピット	弥生時代以降	Q 2
246		溝	近世以降。S-337を切る。	T 4
247		ピット	弥生時代	P 3
248		ピット	弥生時代	P 3
249		ピット	弥生時代	P 3
250	SB250	掘立柱建物	弥生時代中期。a～h。1×3間。	P～R 4～6
251		ピット	弥生時代	Q 4
252		ピット	新しい。石をひく(近代?)。	Q 2
253		柱穴状遺構	弥生時代	Q 2
254		ピット	弥生時代	R 3

付表 旧練兵場遺跡遺構番号一覧表 (5)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
255		ピット	弥生時代	R 2
256		ピット	弥生時代	R 2
257		ピット	弥生時代	R 2
258		ピット	弥生時代	R 2
259		ピット	弥生時代	R 2
260		ピット	弥生時代	T 2
261		ピット	弥生時代	R 2
262		ピット	弥生時代	R 2
263		ピット	弥生時代	R 2
264		ピット	弥生時代	T 2
265		溝	近世	R 3~5
266	SD266	溝	近代	U~Y 1~4
267	SD267	溝	近現代(攢乱から変更)	H~K 1~6
268	SD268	溝	近現代(攢乱から変更)	N 3・4
269		柱穴	SB380-dに変更	T 4
270	SD270	溝	奈良時代	R 4・5
271		ピット	弥生時代以降	Q 5
272	SX272	柱穴状遺構	弥生時代以降	TU 2
273		溝	近世	T 2~V 4
274		ピット	弥生時代以降	T 2
275	SD275	溝	近世	U 4
276		溝	奈良時代。SD270の続き?	R 5
277		ピット	攢乱(近現代)。アース入り。	Q 2
278		ピット	弥生時代以降	T 3
279		ピット	弥生時代以降	T 3
280		ピット	弥生時代	T 3・4
281		柱穴	弥生時代。焼土多い。SB380-oに変更。	T 3
282		ピット	弥生時代	T 1
283		ピット	弥生時代	T 2
284		ピット	弥生時代	T 2
285		ピット	弥生時代	T 2
286		ピット	弥生時代	T 4
287	SX287	柱穴状遺構	弥生時代以降?(庄内式期?)	U 4
288		柱穴状遺構	弥生時代	U 4
289		ピット	弥生時代	U 4
290		ピット	弥生時代	U 4
291		ピット	弥生時代	U 4
292		ピット	弥生時代	U 4
293		ピット	弥生時代	U 2
294		柱穴状遺構	弥生時代以降	V 4
295		柱穴状遺構	弥生時代以降	V 4
296		ピット	弥生時代	V 4
297		ピット	弥生時代	W 4
298		柱穴状遺構	弥生時代	V 3
299		ピット	近世?	U 2
300		柱穴状遺構	弥生時代以降?	U 2
301		柱穴状遺構	近現代	W 3
302	SX302	柱穴状遺構	弥生時代	U 3
303		ピット	弥生時代	T 3
304		ピット	弥生時代	U 4
305		ピット	弥生時代	U 4
306		ピット	弥生時代以降	W 4
307		ピット	弥生時代	W 3
308	SD308	溝	近現代。SD266を切る。	V 1~Y 4
309		ピット	弥生時代	T 2
310		土坑	弥生時代以降	T・U 2
311	SX311	柱穴状遺構	弥生時代。S-346に切られる。	V 3
312		柱穴状遺構	弥生時代以降	V 3
313		土坑	近世以降	NA 4
314		柱穴状遺構	奈良時代?	X 2
315	SX315	柱穴状遺構	奈良時代?	XY 2
316		ピット	弥生時代	X 3
317		柱穴	弥生時代。SB350-dに変更。	V 2

付表 旧練兵場遺跡遺構番号一覧表 (6)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
318	SX318	柱穴状遺構	弥生時代	W 3
319		ピット	弥生時代	X 2
320		ピット	弥生時代	X 4
321		柱穴	弥生時代。SB330-dに変更。	X 4
322		ピット	弥生時代	Y 4
323		ピット	弥生時代	Y 4
324		ピット	弥生時代	Y 4
325		ピット	弥生時代以降	Y 3
326		ピット	弥生時代	Y 3
327		柱穴	弥生時代。SB330-cに変更。	Y 3
328		柱穴	弥生時代。SB330-bに変更。	Y 3
329		ピット	弥生時代以降	Y 3
330	SB330	掘立柱建物	弥生時代中期。a~f。SB330-aに変更。	X 3
331		ピット	弥生時代。SD308に切られる。	X 4
332		ピット	弥生時代	NA 3
333		ピット	弥生時代以降	X 1・2
334		ピット	弥生時代	R 2
335		ピット	弥生時代	R 3
336		ピット	弥生時代	T 3
337		落ち込み	近世以降。礫多し。	T 4・5
338		ピット	弥生時代	T 4
339		ピット	弥生時代	T 6
340		ピット	弥生時代	R 6
341		ピット	弥生時代以降	R 5
342		ピット	弥生時代以降	R 6
343		落ち込み	弥生時代以降。SB250-bを切る。	P 5
344		ピット	弥生時代	T 2
345		柱穴状遺構	弥生時代	R 3
346		柱穴状遺構	弥生時代以降。SX311を切る。	V 3
347		土坑	弥生時代。S-346、SX311、SB350-eに切られる。	V 3
348		柱穴状遺構	弥生時代	U 2
349	SX349	柱穴状遺構	弥生時代	V 2
350	SB350	掘立柱建物	弥生時代中期。a~f。	UV 2・3
351		柱穴状遺構	弥生時代	V 2
352		ピット	弥生時代以降?	T 5
353		ピット	弥生時代	W 2
354		ピット	弥生時代以降?	W 1・2
355		ピット	弥生時代以降か? SD308に切られる。	W 2
356		ピット	弥生時代以降	T 5
357		柱穴状遺構	弥生時代以降	W 2
358	SX358	柱穴状遺構	弥生時代以降	W 2
359		柱穴	弥生時代。SB380-aに変更。	R 3
360		ピット	弥生時代以降	X 2
361		柱穴状遺構	弥生時代以降	X 2
362		柱穴状遺構	弥生時代以降。S-329に切られる。	Y 3
363		土坑	弥生時代以降	NA 3
364	SK364	土坑	練兵場期のゴミ穴	NA 1
365		土坑	古墳時代以降	Y 1
366	SX366	柱穴状遺構	古墳時代以降	X 1
367		ピット	弥生時代	O 2
368		ピット	弥生時代	V 3
369		柱穴	弥生時代。SB380-dに変更。	T 4
370	SH370	住居跡	隅丸方形。庄内式期。	X~NB 1~3
371	SH371	住居跡	TK209の須恵器出土。焼土がまとまって北より出土。	W~Y 1・2
372		土坑	弥生時代	X 1
373		ピット	弥生時代	X 1
374		ピット	弥生時代。SX366に切られる。	X 1
375		ピット	古墳時代?	X 1
376		ピット	弥生時代	X 1
377		ピット	弥生時代以降	X 1
378	SD378	溝	練兵場期のもの。SD001を切る。	G 2~6
379			欠番	
380	SB380	掘立柱建物	弥生時代中期。a~d。1×1間。根石をもつ。	R 3~T 4

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (1)

SD001

種別	器種
弥生土器	壺、細片
須恵器	杯、高坏、細片
土師器(古代～)	細片
国産陶器	細片
石器	打製石器(サヌカイト)
土製品	焼土
金属製品	蹄鉄、不明鉄器
ガラス	細片

SD002

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高坏、鉢、細片
須恵器	甕、杯、高坏、細片
土師器(古代～)	甕、大甕、杯、皿、細片
国産陶器	椀、細片
石器	剥片(サヌカイト)
土製品	土管(岡本焼)
木製品	板
ガラス	細片

SD003

種別	器種
弥生土器	壺、高坏、細片
須恵器	壺、細片
土師器(古代～)	羽釜、脚鍋、皿
須恵器(中世～)	甕
灰釉陶器	細片
瓦質土器	摺鉢、細片
国産陶器	信楽焼片、備前焼片
輸入陶磁器	青磁碗(同安窯系)
染付	細片
瓦	布目瓦
石器	剥片(サヌカイト)、打製石包丁 柱状片刃石斧、砥石
土製品	分銅形土製品

SK005

種別	器種
国産陶器	細片
国産磁器	軍用食器
土製品	レンガ
木製品	炭
ガラス	牛乳瓶、ビール瓶、礎志まん瓶、不明瓶

SK006

種別	器種
弥生土器	細片
国産磁器	軍用食器
金属製品	不明鉄器

SP008

種別	器種
弥生土器	細片
国産陶器	備前焼片

S-9

種別	器種
弥生土器	甕、細片

SD011

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

SD012

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-14

種別	器種
ガラス	細片

SX019

種別	器種
弥生土器	甕、高坏
木製品	炭

SD020

種別	器種
弥生土器	高坏、細片
石器	剥片(サヌカイト)

S-21

種別	器種
弥生土器	細片
金属製品	鉄器

SX022

種別	器種
弥生土器	高坏、細片
須恵器	高坏

S-23

種別	器種
弥生土器	細片

SX025

種別	器種
弥生土器	細片

S-28

種別	器種
弥生土器	細片

S-32

種別	器種
弥生土器	細片

S-34

種別	器種
弥生土器	壺

SX040

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	壺、細片

S-41

種別	器種
弥生土器	細片

SD043

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	蓋、細片

S-45

種別	器種
弥生土器	細片

S-54

種別	器種
弥生土器	細片

S-55

種別	器種
弥生土器	細片
国産陶器	細片

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (2)

S-56

種別	器種
弥生土器	細片

S-59

種別	器種
弥生土器	細片

S-61

種別	器種
弥生土器	細片

S-62

種別	器種
弥生土器	細片

S-64

種別	器種
弥生土器	細片

SX065

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-66

種別	器種
弥生土器	細片

S-67

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-68

種別	器種
弥生土器	細片

SX069

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片(サヌカイト)
土製品	燒土

S-70

種別	器種
弥生土器	細片

S-71

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

SD072

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

S-73

種別	器種
弥生土器	細片

S-74

種別	器種
弥生土器	細片

S-75

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-78

種別	器種
弥生土器	細片

S-79

種別	器種
弥生土器	細片

S-80

種別	器種
弥生土器	細片

S-81

種別	器種
弥生土器	細片

S-82

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-83

種別	器種
弥生土器	細片

S-84

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-85

種別	器種
弥生土器	細片

S-86

種別	器種
弥生土器	細片

S-87

種別	器種
弥生土器	細片

S-90

種別	器種
弥生土器	細片

S-91

種別	器種
弥生土器	細片

S-92

種別	器種
弥生土器	細片

S-93

種別	器種
弥生土器	細片

S-94

種別	器種
弥生土器	細片

S-95

種別	器種
弥生土器	細片

S-96

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (3)

SD097

種別	器種
弥生土器	高坏、細片
須恵器	蓋、細片
石器	剥片(サヌカイト)、砥石
金属製品	銅板
ガラス	細片
その他	コンクリート片

S-98

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
国産陶器	京焼片

S-99

種別	器種
弥生土器	細片

S-100

種別	器種
弥生土器	細片

S-101

種別	器種
弥生土器	細片

SD102

種別	器種
弥生土器	甕、細片
須恵器	細片

S-103

種別	器種
弥生土器	細片

SD104

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
瓦器	細片
国産陶器	細片
木製品	木片
ガラス	細片

SD105

種別	器種
弥生土器	高坏、細片
須恵器	杯、細片
石器	剥片(サヌカイト)
土製品	レンガ

S-106

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

S-107

種別	器種
弥生土器	細片

SX108

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

SX109

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	杯、細片
石器	打製石鎚(サヌカイト)、剥片(サヌカイト)

S-110

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-111

種別	器種
弥生土器	細片

S-112

種別	器種
弥生土器	鉢、細片

S-113

種別	器種
弥生土器	細片

SD114

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
土製品	土管、レンガ
木製品	炭

S-115

種別	器種
弥生土器	細片

S-116

種別	器種
弥生土器	細片

S-117

種別	器種
弥生土器	細片

SK118

種別	器種
弥生土器	高坏、細片
石器	打製石鎚(サヌカイト)、剥片(サヌカイト)

S-119

種別	器種
弥生土器	細片
国産陶器	細片

S-120

種別	器種
弥生土器	細片

S-121

種別	器種
弥生土器	細片

S-122

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

S-123

種別	器種
弥生土器	細片

S-124

種別	器種
弥生土器	細片

S-125

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (4)

SX126

種別	器種
弥生土器	細片
石器	打製石鏃(サヌカイト)

S-127

種別	器種
弥生土器	細片

SX128

種別	器種
弥生土器	甕、高坏
石器	砥石(軽石)

S-129

種別	器種
弥生土器	細片

S-130

種別	器種
弥生土器	細片

S-131

種別	器種
弥生土器	細片

S-132

種別	器種
弥生土器	細片

S-133

種別	器種
弥生土器	細片

S-134

種別	器種
弥生土器	甕、細片
須恵器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

S-135

種別	器種
弥生土器	細片

S-136

種別	器種
弥生土器	高坏

S-137

種別	器種
弥生土器	細片

S-138

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	杯

SD139

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高坏、鉢、支脚、細片
須恵器	杯、細片

S-140

種別	器種
弥生土器	甕、高坏、細片
須恵器	細片

S-141

種別	器種
弥生土器	壺、細片

S-142

種別	器種
弥生土器	細片

S-143

種別	器種
弥生土器	甕、細片
須恵器	甕

S-144

種別	器種
弥生土器	細片

S-145

種別	器種
弥生土器	細片

S-146

種別	器種
弥生土器	細片

S-147

種別	器種
弥生土器	細片

S-148

種別	器種
弥生土器	細片

S-150

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片(サヌカイト)
土製品	焼土

S-151

種別	器種
弥生土器	細片

S-152

種別	器種
弥生土器	細片

S-153

種別	器種
弥生土器	細片

S-154

種別	器種
弥生土器	細片

S-155

種別	器種
弥生土器	細片

S-156

種別	器種
弥生土器	細片

S-157

種別	器種
弥生土器	細片

S-158

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (5)

S-159

種別	器種
弥生土器	細片

S-160

種別	器種
弥生土器	細片

S-161

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

S-162

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-163

種別	器種
弥生土器	細片

S-164

種別	器種
弥生土器	細片

S-165

種別	器種
弥生土器	細片

S-166

種別	器種
弥生土器	細片

S-167

種別	器種
弥生土器	壺、細片
須恵器	細片

S-168

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-169

種別	器種
弥生土器	高坏、細片

SH170-b

種別	器種
弥生土器	壺、細片
石器	剥片(サヌカイト)

SH170-c

種別	器種
弥生土器	細片

SH170-d

種別	器種
弥生土器	高坏、鉢、細片
石器	小玉
土製品	燒土
ガラス	小玉
動物遺体	骨

SH170-e

種別	器種
弥生土器	細片

SH170-f

種別	器種
弥生土器	細片

SH170-g

種別	器種
弥生土器	細片

SH170-h

種別	器種
弥生土器	細片

SH170-j

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	燒土

S-171

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
木製品	板

S-172

種別	器種
弥生土器	細片
動物遺体	骨

S-173

種別	器種
弥生土器	細片

SX174

種別	器種
弥生土器	壺、甕、細片

SX175

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	杯、細片
土師器(古代～)	甕

S-176

種別	器種
弥生土器	細片

SD178

種別	器種
弥生土器	細片

S-179

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	燒土
木製品	炭

SH180-埋土

種別	器種
弥生土器	壺、甕
須恵器	脚部
植物	種子
石器	剥片(サヌカイト)、チップ(サヌカイト) 被熱石、小玉
木製品	炭
金属製品	鉄釘
ガラス	玉

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (6)

SH180-中央攪乱

種別	器種
弥生土器	高坏、細片

SH180-a

種別	器種
弥生土器	甕、鉢

SH180-b

種別	器種
弥生土器	細片

SH180-c

種別	器種
弥生土器	壺、甕、鉢
石器	チップ(サヌカイト)
土製品	焼土

SH180-d

種別	器種
弥生土器	甕、鉢、細片

SH180-e

種別	器種
弥生土器	壺、甕、鉢、細片

SH180-f

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	焼土

SH180-g

種別	器種
弥生土器	細片

SH180-h

種別	器種
弥生土器	細片

SH180-i

種別	器種
弥生土器	細片

S-181

種別	器種
弥生土器	細片

S-182

種別	器種
弥生土器	細片

S-183

種別	器種
弥生土器	細片

S-184

種別	器種
弥生土器	細片

S-185

種別	器種
土製品	土管

S-186

種別	器種
弥生土器	細片

S-187

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-188

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

S-189

種別	器種
弥生土器	細片

SX190

種別	器種
弥生土器	甕、ミニチュア鉢、細片
木製品	炭化物
動物遺体	骨

S-191

種別	器種
弥生土器	細片

S-192

種別	器種
弥生土器	細片

S-193

種別	器種
弥生土器	細片

S-194

種別	器種
弥生土器	甕、細片
土製品	焼土

S-195

種別	器種
弥生土器	細片

S-196

種別	器種
弥生土器	甕、細片
土製品	焼土

S-197

種別	器種
弥生土器	細片

S-198

種別	器種
弥生土器	甕、細片
土製品	焼土

S-199

種別	器種
弥生土器	細片

S-200

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-201

種別	器種
弥生土器	細片

S-202

種別	器種
弥生土器	細片

S-203

種別	器種
弥生土器	細片

87

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (7)

S-204

種別	器種
弥生土器	細片

S-205

種別	器種
弥生土器	細片

S-206

種別	器種
石器	剥片(サヌカイト)
土製品	焼土

S-207

種別	器種
弥生土器	細片

S-208

種別	器種
弥生土器	壺、細片

SX210

種別	器種
弥生土器	壺、甕、器台、赤色土器、細片
須恵器	細片
土師器(古代～)	甕片
土製品	焼土

S-211

種別	器台
弥生土器	細片
須恵器	蓋

S-212

種別	器台
弥生土器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

S-213

種別	器種
弥生土器	細片

S-214

種別	器種
弥生土器	細片

SX215

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高坏、細片

S-216

種別	器種
弥生土器	細片

S-217

種別	器種
弥生土器	高坏
石器	敲石

S-218

種別	器種
弥生土器	細片

S-219

種別	器種
弥生土器	細片

S-220

種別	器種
弥生土器	細片

S-221

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-222

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	焼土

S-223

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-224

種別	器種
石器	剥片(サヌカイト)

S-226

種別	器種
弥生土器	細片

S-227

種別	器種
弥生土器	甕
木製品	柱

SK228

種別	器種
国産陶器	宝珠形容器
金属製品	五円玉、五十銭銅貨、一銭アルミ貨
ガラス	ビーベー

S-229

種別	器種
弥生土器	甕、高坏

SH230-埋土

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高坏、鉢、小型鉢
石器	チップ(サヌカイト)、敲石
土製品	焼土、炭化物
動物遺体	骨

SH230-a

種別	器種
弥生土器	細片

SH230-a'

種別	器種
弥生土器	細片

SH230-b

種別	器種
弥生土器	細片

SH230-c

種別	器種
弥生土器	甕、高坏、鉢、細片

SH230-d

種別	器種
弥生土器	細片

SH230-e

種別	器種
弥生土器	甕、小型鉢、細片
須恵器	細片
土製品	焼土
木製品	炭

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (8)

SH230-f

種別	器種
弥生土器	細片

SH230-g

種別	器種
弥生土器	細片

SH230-h

種別	器種
弥生土器	細片

SH230-i

種別	器種
弥生土器	細片

SH230-j

種別	器種
弥生土器	小型鉢、細片

SH230-k

種別	器種
弥生土器	細片

SH230-l

種別	器種
弥生土器	細片

SH230-m

種別	器種
弥生土器	細片

SD231

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高坏、鉢、器台、細片

S-232

種別	器種
弥生土器	細片

S-233

種別	器種
弥生土器	細片

S-234

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-235

種別	器種
弥生土器	細片

S-236

種別	器種
弥生土器	細片

S-237

種別	器種
弥生土器	細片

S-238

種別	器種
弥生土器	細片

S-239

種別	器種
弥生土器	細片

SX240-a

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高坏、細片

SX240-b

種別	器種
弥生土器	細片

S-241

種別	器種
弥生土器	細片

S-242

種別	器種
弥生土器	甕、細片

SK243

種別	器種
弥生土器	壺(後期)、鉢、細片

S-244

種別	器種
弥生土器	細片

S-245

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-246

種別	器種
弥生土器	細片

S-247

種別	器種
弥生土器	細片

S-248

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-249

種別	器種
弥生土器	細片

SB250-a

種別	器種
弥生土器	甕、甌、細片

SB250-b

種別	器種
弥生土器	甕、甌、細片

SB250-c

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高坏、細片

SB250-d

種別	器種
弥生土器	甕、高坏、細片

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (9)

SB250-e

種別	器種
弥生土器	加飾壺、甕or鉢、鉢、細片

SB250-f

種別	器種
弥生土器	甕、細片

SB250-g

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高坏、細片
須恵器	細片

SB250-h

種別	器種
弥生土器	細片

S-251

種別	器種
弥生土器	細片

S-252

種別	器種
弥生土器	細片
金属製品	鉄釘

S-253

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-254

種別	器種
弥生土器	細片

S-255

種別	器種
弥生土器	細片

S-256

種別	器種
弥生土器	細片

S-257

種別	器種
弥生土器	細片

S-258

種別	器種
弥生土器	細片

S-259

種別	器種
弥生土器	壺(後期初頭)、細片

S-260

種別	器種
弥生土器	細片

S-261

種別	器種
弥生土器	細片

S-262

種別	器種
弥生土器	細片

S-263

種別	器種
弥生土器	壺、細片

S-264

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片(サヌカイト)
土製品	焼土

S-265

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	壺、杯身、鉢、細片

SD266

種別	器種
弥生土器	壺、甕、鉢(中期)、細片
須恵器	蓋、杯身、細片
土師器(古代)	脚銅、皿、細片
灰釉陶器	細片
瓦器	摺鉢
国産陶器	椀、皿、紅皿、京焼椀、備前焼、摺鉢 備前焼片、ひょうそく、細片
輸入陶磁器	白磁碗
染付	鉢、細片
瓦	細片、中世瓦
石器	剥片(サヌカイト)、被熱石
石造品	石塔
木製品	炭、杭
金属製品	鉄片
その他	モルタル

SD267(土管下)

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
国産陶器	細片
金属製品	不明鉄器
ガラス	細片

SD268(土管)

種別	器種
古式土師器	壺

SD270

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	壺、器台、細片
土師器(古代~)	壺、鍋or瓶の取手、細片
石器	剥片(サヌカイト)

S-271

種別	器種
弥生土器	甕、細片
須恵器	細片

SX272

種別	器種
弥生土器	壺、鉢、細片

S-273

種別	器種
弥生土器	壺(中期末~後期初頭)、壺(後期)、壺 高坏、鉢、小型鉢、細片
須恵器	細片

S-274

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (10)

SD275

種別	器種
弥生土器	ミニチュア壺、甕、高杯、細片
須恵器	細片
石器	剥片(サヌカイト)
土製品	焼土

S-276

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

S-277

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-278

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	杯身

S-279

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S-280

種別	器種
弥生土器	細片

S-282

種別	器種
弥生土器	細片

S-283

種別	器種
弥生土器	細片

S-284

種別	器種
弥生土器	壺、細片

S-285

種別	器種
弥生土器	細片

S-286

種別	器種
弥生土器	細片

SX287

種別	器種
弥生土器	壺(鋸齒文)、甕、鉢、細片
石器	敲石

S-288

種別	器種
弥生土器	甕、鉢、細片

S-289

種別	器種
弥生土器	細片

S-290

種別	器種
弥生土器	鉢、細片

S-291

種別	器種
弥生土器	細片

S-292

種別	器種
弥生土器	細片

S-294

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高杯、細片

S-295

種別	器種
弥生土器	細片

S-296

種別	器種
弥生土器	細片

S-298

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-300

種別	器種
弥生土器	壺、甕、細片

S-301

種別	器種
弥生土器	細片

SX302

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-303

種別	器種
弥生土器	細片

S-304

種別	器種
弥生土器	細片

S-305

種別	器種
弥生土器	細片

S-306

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-307

種別	器種
弥生土器	甕(後期)、細片

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (11)

SD308

種別	器種
弥生土器	高杯、細片
須恵器	杯身、細片
国産陶器	細片
染付	細片
瓦	細片
石器	剥片(サヌカイト)

S - 307

種別	器種
弥生土器	細片

S - 310

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

SX311

種別	器種
弥生土器	壺、甕、細片
石器	剥片(サヌカイト)

S - 312

種別	器種
弥生土器	鉢、細片
須恵器	細片

S - 313

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
国産陶器	細片
染付	細片
瓦	細片

S - 314

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

SX315

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高杯、細片
須恵器	細片
土師器(古代～)	甕
土製品	焼土

S - 316

種別	器種
弥生土器	細片

SX318

種別	器種
弥生土器	壺、細片

S - 319

種別	器種
弥生土器	細片
石器	チップ(サヌカイト)

S - 320

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S - 322

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S - 323

種別	器種
弥生土器	細片

S - 324

種別	器種
弥生土器	細片

S - 325

種別	器種
弥生土器	細片

S - 326

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	焼土

S - 329

種別	器種
弥生土器	壺、細片

SB330-a

種別	器種
弥生土器	壺、甕、細片
須恵器	細片
石器	剥片(サヌカイト)
土製品	焼土

SB330-b

種別	器種
弥生土器	細片

SB330-c

種別	器種
弥生土器	細片

SB330-d

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

SB330-e

種別	器種
弥生土器	細片

SB330-f

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

S - 331

種別	器種
弥生土器	細片

S - 332

種別	器種
弥生土器	細片

S - 333

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	杯身、細片

S - 334

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S - 335

種別	器種
弥生土器	細片

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (12)

S-336

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-337

種別	器種
弥生土器	壺、細片
須恵器	壺、杯、細片
瓦器	椀
石器	剥片(サヌカイト)
動物遺体	骨片

S-338

種別	器種
弥生土器	細片

S-339

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-340

種別	器種
弥生土器	細片

S-341

種別	器種
弥生土器	細片

S-342

種別	器種
弥生土器	細片

S-343

種別	器種
弥生土器	細片

S-344

種別	器種
弥生土器	細片

S-345

種別	器種
弥生土器	細片

S-346

種別	器種
弥生土器	高坏、細片

S-347

種別	器種
弥生土器	細片

S-348

種別	器種
弥生土器	細片

SX349

種別	器種
弥生土器	壺、細片

石器 剥片(サヌカイト)

SB350-a

種別	器種
弥生土器	細片

SB350-b

種別	器種
弥生土器	細片

石器
自然石

SB350-c

種別	器種
弥生土器	細片

SB350-d

種別	器種
弥生土器	細片

SB350-e

種別	器種
弥生土器	鉢、細片

SB350-f

種別	器種
弥生土器	甕、高坏、取手、細片

S-351

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-352

種別	器種
弥生土器	細片

S-353

種別	器種
弥生土器	細片

S-354

種別	器種
弥生土器	壺、鉢、細片

S-355

種別	器種
弥生土器	細片

S-356

種別	器種
弥生土器	細片

S-357

種別	器種
弥生土器	細片

SX358

種別	器種
弥生土器	細片

土師器(古代~) 椪

S-360

種別	器種
弥生土器	細片

S-361

種別	器種
弥生土器	細片

須恵器

S-362

種別	器種
弥生土器	細片

S-363

種別	器種
弥生土器	壺、甕、細片

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表（13）

SK364

種別	器種
弥生土器	細片
國產磁器	軍用食器

S-365

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

SX366

種別	器種
弥生土器	壺、細片
須恵器	杯身、細片
石器	チップ(サヌカイト)
土製品	焼土

S-367

種別	器種
弥生土器	細片

S-368

種別	器種
弥生土器	細片

S-369

種別	器種
弥生土器	細片

SH370-埋土

種別	器種
弥生土器	壺(庄内式)、甕(庄内式)、高坏(庄内式) 鉢(庄内式)、小型丸底鉢、細片
須恵器	細片
石器	チップ(サヌカイト)、石製小玉、被熱石
動物遺体	獸骨

SH370-a

種別	器種
弥生土器	壺、細片

SH370-b

種別	器種
弥生土器	細片

SH370-c

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

SH370-g

種別	器種
弥生土器	鉢、細片
石器	台石

SH370-h

種別	器種
弥生土器	甕、鉢、細片

SH370-j

種別	器種
弥生土器	細片

SH370-k

種別	器種
弥生土器	壺、ミニチュア鉢、細片
須恵器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

SH370-I

種別	器種
弥生土器	細片

SH370-m

種別	器種
弥生土器	細片

SH370-o

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	焼土

SH370-p

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	焼土

SH370-q

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	焼土

SH370-r

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

SH370-s

種別	器種
弥生土器	鉢、細片

SH371

種別	器種
弥生土器	壺、甕、細片
須恵器	高坏、杯身、細片
石器	被熱石
土製品	焼土

SH371-a

種別	器種
弥生土器	壺(中期)、細片
須恵器	細片
土製品	焼土

SH371-b

種別	器種
弥生土器	甕、細片
須恵器	細片

SH371-c

種別	器種
弥生土器	細片
石器	被熱石
土製品	焼土

SH371-d

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

SH371-e

種別	器種
弥生土器	細片

SH371-f

種別	器種
弥生土器	細片

付表 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (14)

SH371-g

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

SH371-h

種別	器種
弥生土器	壺、細片
土製品	焼土

SH371-i

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
土製品	焼土

SH371-j

種別	器種
弥生土器	細片

S-372

種別	器種
弥生土器	細片

S-373

種別	器種
弥生土器	細片

S-374

種別	器種
弥生土器	細片

S-375

種別	器種
弥生土器	細片
土師器(古代～)	壺

S-376

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	杯蓋

SD378

種別	器種
土製品	土管(岡本焼)

SB380-c

種別	器種
弥生土器	壺、細片

SB380-d

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片

黄橙色層

種別	器種
弥生土器	壺、壺、高坏、細片
須恵器	細片
石器	剥片(サヌカイト)

灰茶層

種別	器種
弥生土器	壺、壺
須恵器	杯身、細片
土師器	甌(古墳)
石器	砥石
土製品	焼土

灰白色層

種別	器種
弥生土器	甌、高坏、有孔鉢、器台、細片
須恵器	杯身、杯蓋、器台、加工円盤、細片
土師器(古代～)	脚鍋
黒色土器	細片
瓦器	細片
青磁	椀
白磁	細片
国産陶器	岡本焼片
染付	細片
瓦	瓦片(中世)
石器	剥片(サヌカイト)
木製品	木片

カクラン

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	壺、細片
国産磁器	軍用食器
土製品	土管、レンガ
金属製品	不明鉄器
ガラス	瓶

表土

種別	器種
弥生土器	細片
須恵器	細片
国産陶器	細片
国産磁器	軍用食器
土製品	土管
金属製品	不明鉄器
ガラス	牛乳瓶

表採

種別	器種
弥生土器	壺、高坏、細片
須恵器	杯、細片
石器	打製石包丁(サヌカイト) 打製石鎌(サヌカイト)
土製品	レンガ

報告書抄録

ふりがな	きゅうれんぺいじょういせき							
書名	旧練兵場遺跡							
副書名	特別養護老人ホーム仙遊荘建替えに伴う旧練兵場遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	笹川龍一、狭川真一、角南聰一郎							
編集機関	1)善通寺市 2)(財)元興寺文化財研究所							
所在地	1) 〒765-8503 香川県善通寺市文京町2丁目1番1号 TEL 0877-62-2121 2) 〒630-8392 奈良県奈良市中院町11番地 TEL 0742-23-1376							
発行年月日	平成14(2002)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
市町村	遺跡番号							
きゅうれんぺいじょう 旧練兵場遺跡	かがわけん 香川県 ぜんつうじし 善通寺市 せんゆうちょう 仙遊町 二丁目 3番3号	204	41	34度 13分 27秒	133度 46分 23秒	2001 0730 ~ 2001 1128	1430m ²	住宅建設 (老人ホーム)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
旧練兵場遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代 近世 近代 現代	堅穴住居跡 掘立柱建物 土坑 堅穴住居跡 溝 溝 塹壕 地鎮遺構	弥生土器、石器、分銅形土製品 石製小玉、ガラス小玉 須恵器、土師器、軽石 軍用食器、牛乳瓶、蹄鉄 宝珠形容器			練習用塹壕	

写真図版



遺物写真に付した数字は
Fig.番号－遺物番号
の順である。

Pla.1

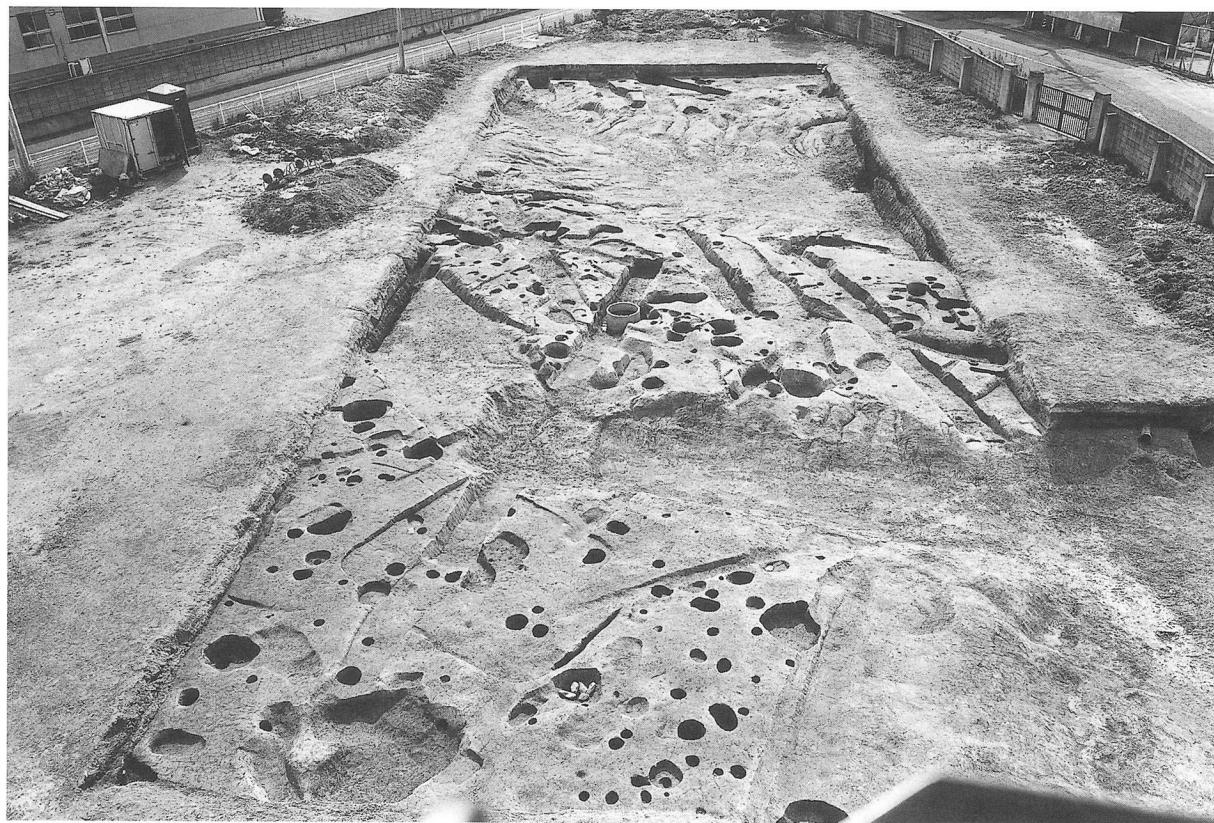


調査地全景（東から）



調査地全景（南から）

Pla.2

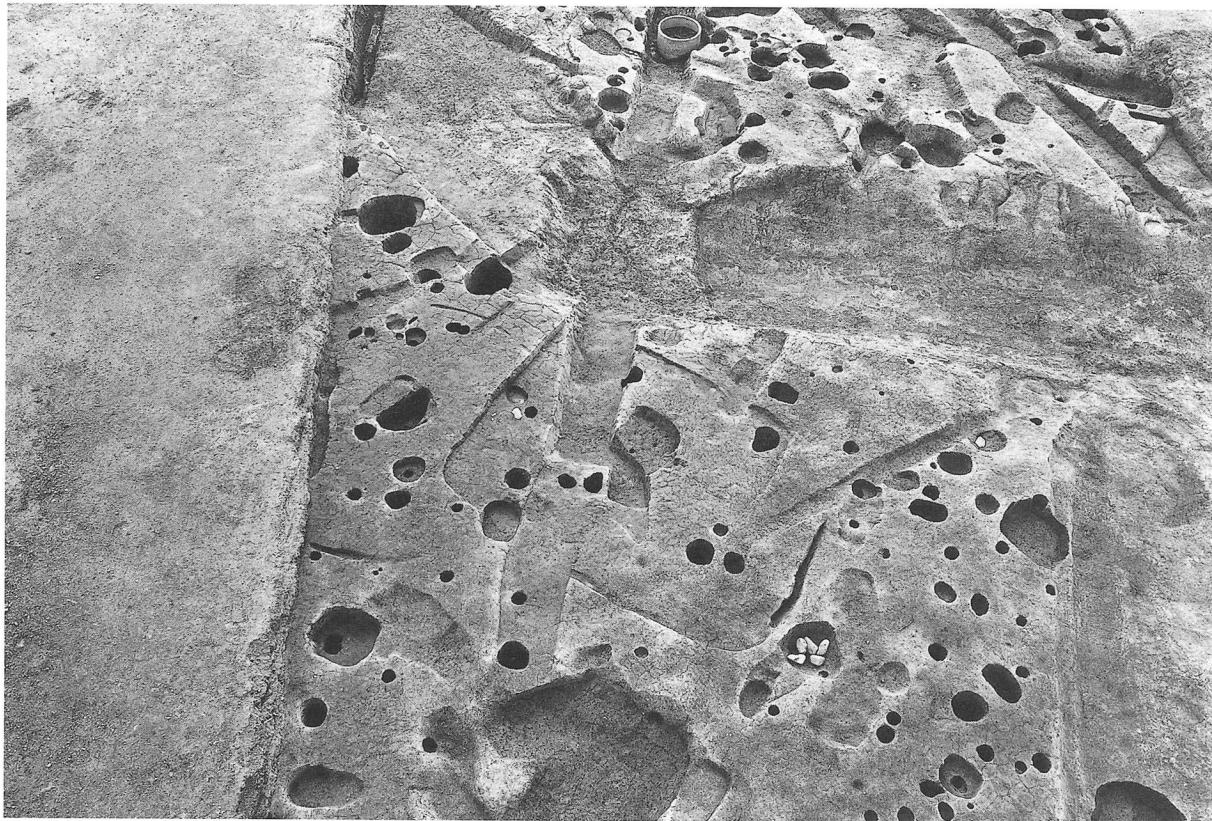


調査地全景（北から）



調査地全景（北西から）

Pla.3



SH170・180 (北から)



SH170g 土層断面 (南から)

Pla.4



SH180e遺物出土状況（南から）



SH230（東から）

Pla.5

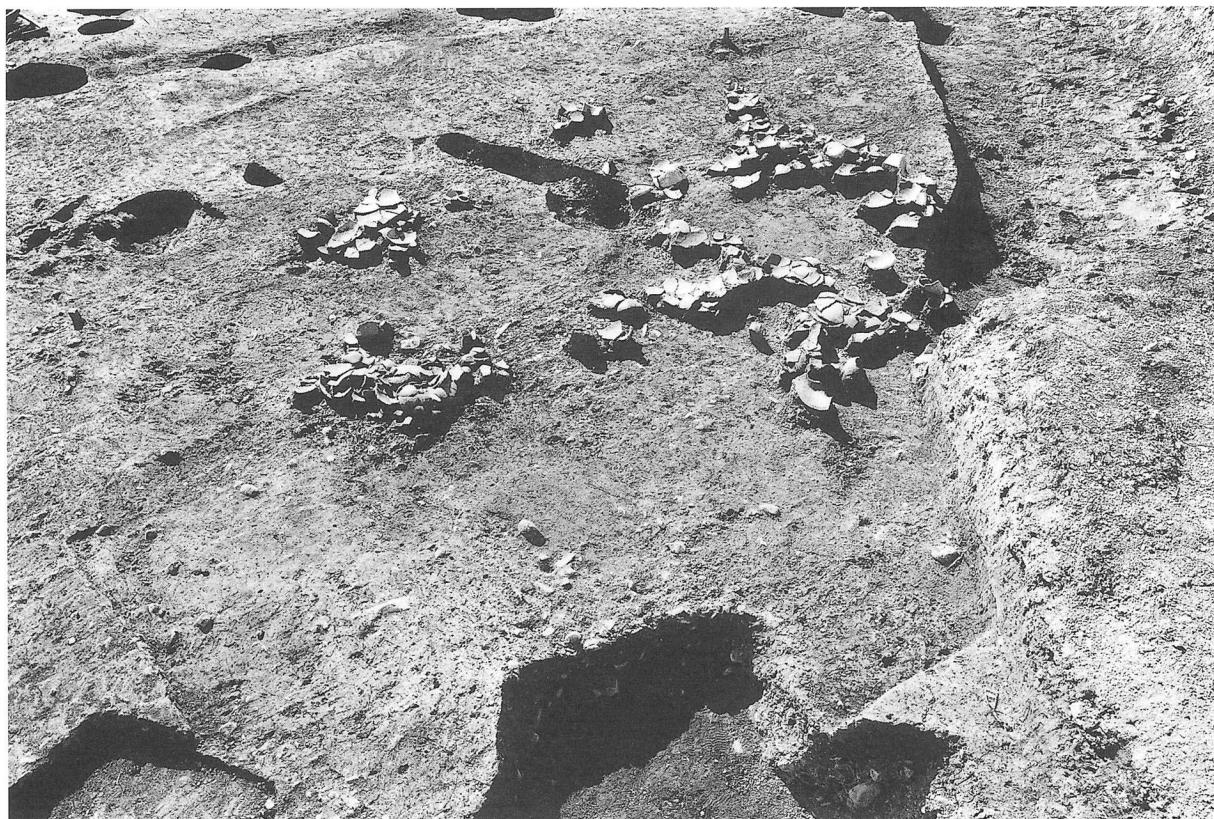


SH230e土層断面（東から）

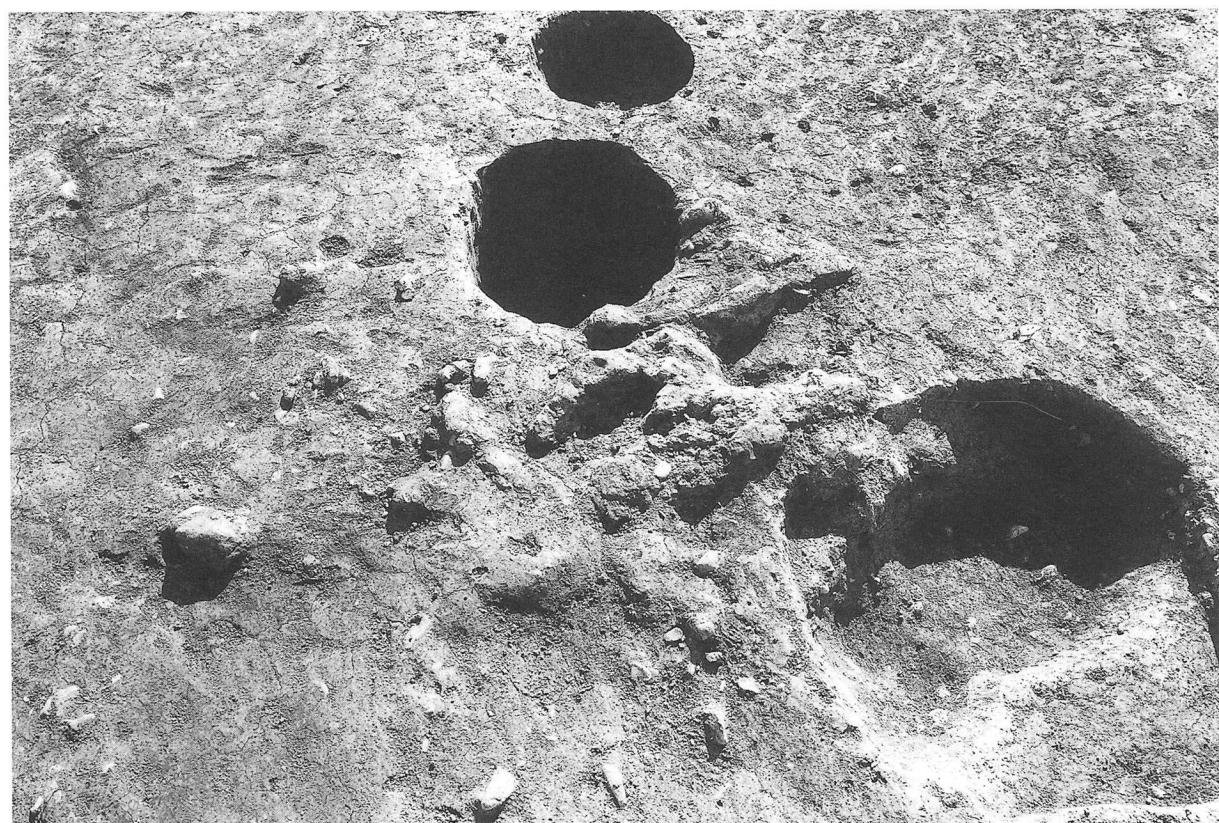


SH370・371（南東から）

Pla.6



SH370遺物出土状況（東から）



SH371焼土（北から）

Pla.7



SB250 (南から)

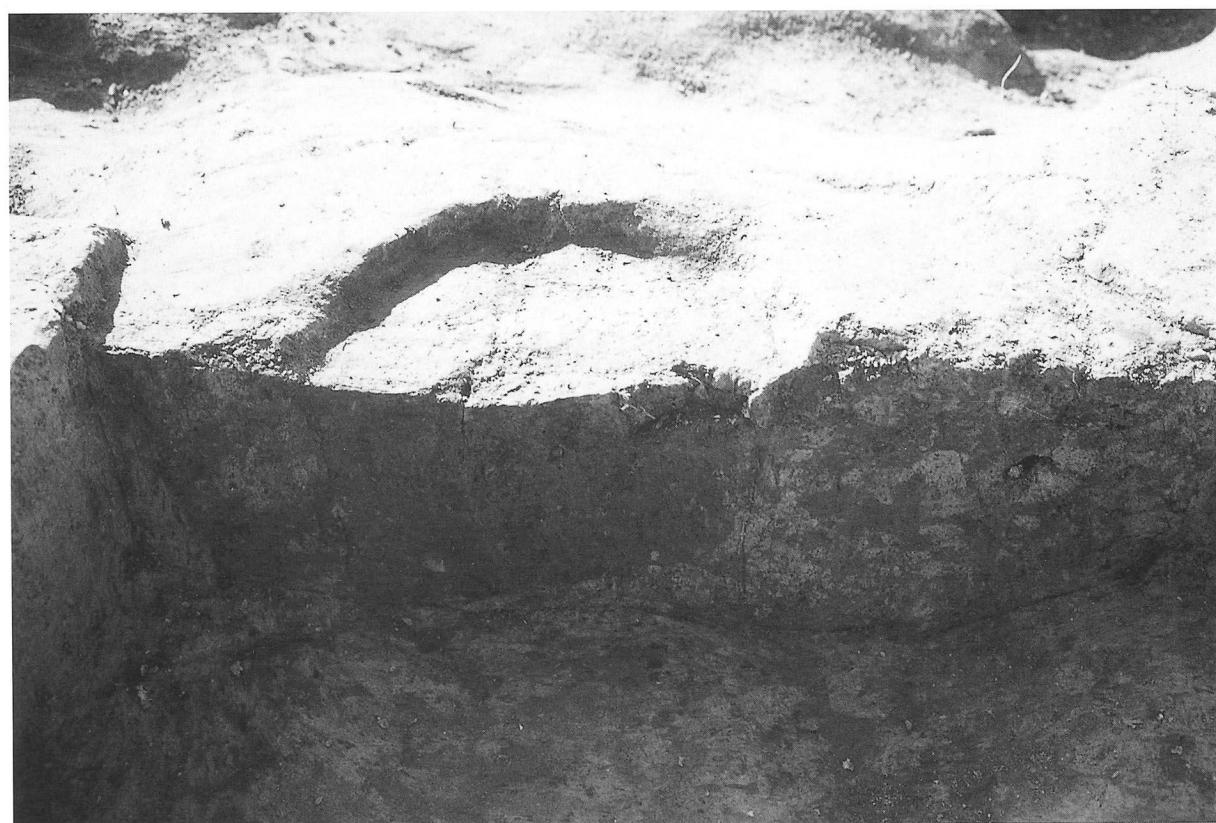


SH250b土層断面 (東から)

Pla.8



SB250c土層断面（東から）



SB250d土層断面（東から）

Pla.9



SB250e土層断面（西から）



SB250f土層断面（西から）

Pla.10



SB250g土層断面（西から）



SB250h土層断面（西から）



SB330b土層断面（東から）



SB330c土層断面（東から）